秋田県文化財調査報告書第94集

腹鞍の沢遺跡・桐木田遺跡
蒲沼遺跡発掘調査概報

1982・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

序

昭和56年度に国庫補助を得て実施された発掘調査は，桐木田・蒲沼・腹鞍の沢の３遺跡です。いずれも，国営及び県営の農地造成事業に係る緊急発掘調査であります。本報告書は，３遺跡の発掘調査の概報であります。

桐木田遺跡は，昨年からの継続調査であり，中世から近世初期の掘立柱建物跡・竪穴住居跡が多数検出されました。また，同時期の陶磁器も多く出土し，中・近世の研究には欠かすことのできない資料を得ることができました。

蒲沼遺跡からは，古代の土器のほか，中世後半から近世の陶磁器が出土しました。

腹鞍の沢遺跡からは、縄文時代の竪穴住居跡，陥し穴状遺構・袋状土壙のほか，古代の竪穴住居跡が検出されました。

以上のように，各地で多大な成果を上げて調査を終了することができました。

発掘調査は文化財を保護する側と開発側との相互理解のもとにおこなわれるもので，今回の調査がスムーズに無事終了し，本報告をまとめることができたのは，関係各位のご協力の賜と存じます。心から感謝の意を表します。

昭和57年３月

秋田県教育委員会

教育長　畠　山　芳　郎

例　　言

1．本調査報告書は昭和56年度，秋田県教育委員会が主体となって国庫補助を得て緊急発掘調査を実施した遺跡の調査概報である。

2．本調査概報作成には下記のものが担当し，まとめたものである。

腹鞍の沢遺跡

調査員　永瀬福男，熊谷太郎

補佐員　大高博康，佐々木金正

桐木田遺跡

調査員　大野憲司

補佐員　三嶋隆儀，栗沢光男，池田洋一

蒲沼遺跡

調査員　柴田陽一郎

補佐員　三嶋隆儀，佐藤雅子

3．本調査概報の全体編集は秋田県埋蔵文化財センターがあたった。

4．本調査概報とは別に各遺跡ごとの本報告書を年度内に作成する。それとあわせて活用されたい。

目　　次

Ⅰ．腹鞁の沢遺跡

第１章　はじめに……1

第２章　遺跡の立地と環境……3

第３章　発掘調査の概要……3

第４章　調査の記録……6

第５章　まとめ……9

Ⅱ．桐木田遺跡

第１章　はじめに……29

第２章　遺跡の立地と環境……31

第３章　発掘調査の概要……34

第４章　調査の記録……40

第５章　まとめ……46

Ⅲ．蒲沼遺跡

第１章　はじめに……83

第２章　遺跡の立地と環境……86

第３章　発掘調査の概要……89

第４章　調査の記録……92

第５章　まとめ……95

腹鞍の沢遺跡

（A地区）

第1章　はじめに

第1節　発掘調査に至るまで

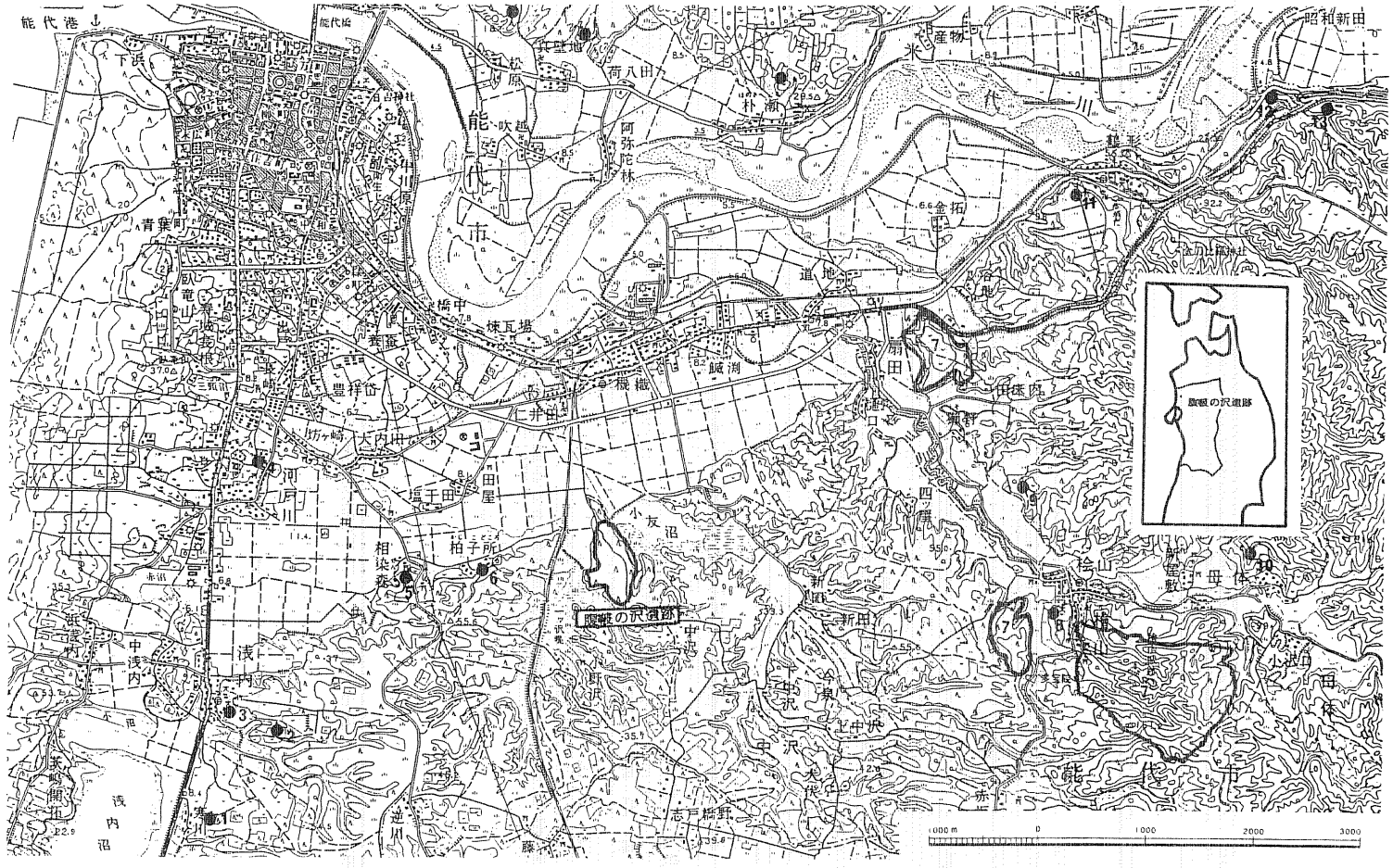
腹鞍の沢遺跡発掘調査は，能代開拓建設事業に係る緊急発掘調査である。当事業は，米代川の右岸・左岸を対象とする国営総合開発事業であり，その面積は3,671haにおよぶ。

昭和56年度の工事対象地域内に所在する腹鞍の沢遺跡は，同年4月に範囲確認調査（秋田県教育庁文化課実施）が実施された。その結果，約10haの台地上に6地点の遺跡が所在することが確認された。遺跡名は，6地点を総称して腹鞍の沢遺跡とし，それぞれの地点は，A地区・B地区……と呼称することにした。

本概報は，6地点のうちのA地区の概報である。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名	腹鞍の沢遺跡
遺跡所在地	秋田県能代市腹鞍の沢18－5他
調査期間	昭和56年5月11日～昭和56年8月6日
調査対象面積	4,000m²
調査面積	5,230m²
調査主体	秋田県教育委員会
調査担当者	永瀬福男　秋田県埋蔵文化財センター　社会教育主事
	熊谷太郎　秋田県埋蔵文化財センター　社会教育主事
補佐員	大高博康
	佐々木金正
調査協力機関	東北農政局能代開拓建設事業所
	能代市教育委員会
	秋田県土地改良区
	機織組（土地所有者の組織）



第１図　腹鞍の沢遺跡周辺地形図

第２章　　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境

腹鞍の沢遺跡は，北緯40°10′－40°11′・東経140°04′－140°05′に位置する。遺跡の下には，米代川の形成した沖積地が広がる。米代川は西流し，日本海に注ぐ。北を遠望すると青森県との県境となっている白神山地が東西に横走する。西を遠望すると，砂丘がみえ，まもなく日本海がある。遺跡から日本海までの距離は直線距離にして約５kmである。

米代川の右岸・左岸ともに標高35ｍ程の段丘が形成されている。腹鞍の沢遺跡は，右岸の段丘の北縁に位置する。

遺跡周辺は松・杉・雑木が生え，開田・開畑が進行している。

第２節　歴史的環境

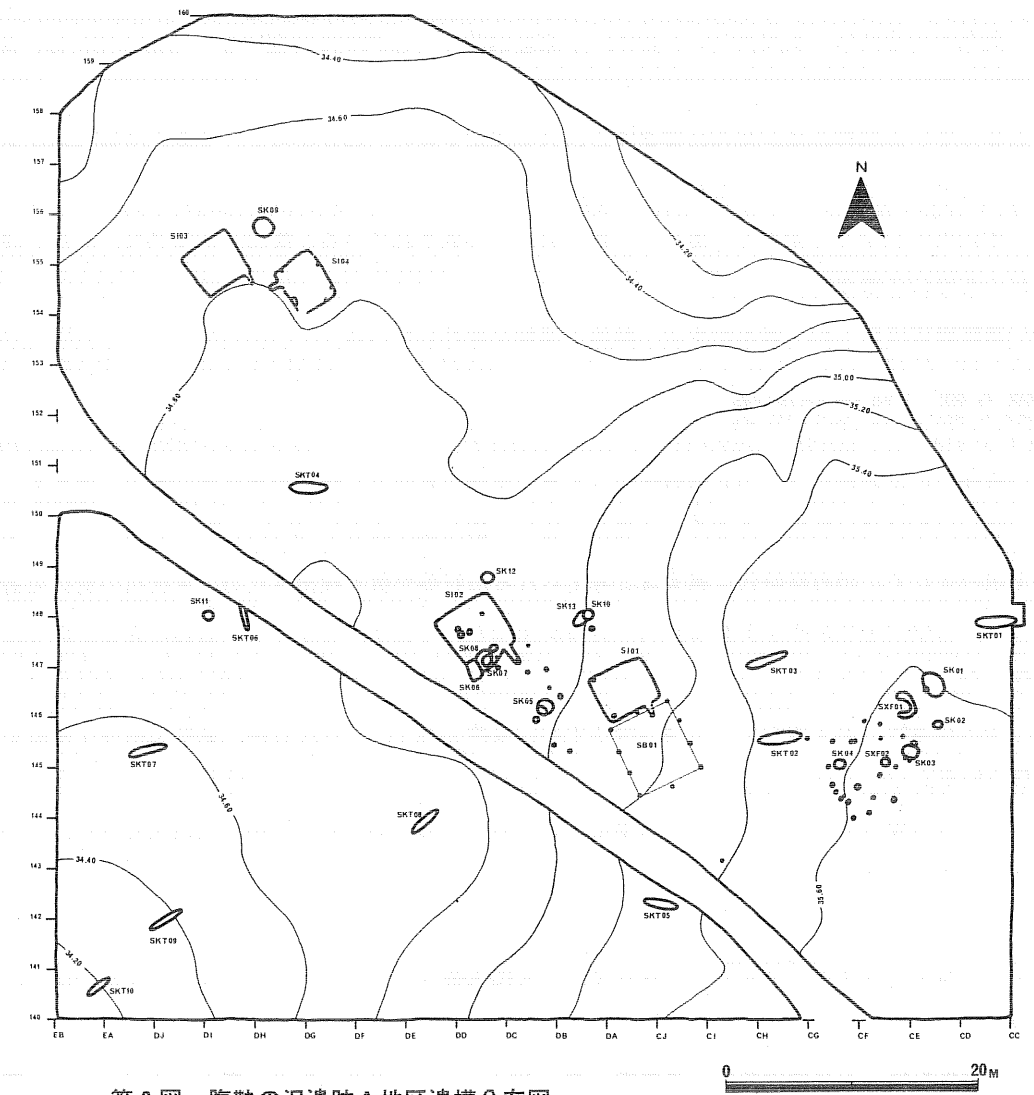
腹鞍の沢遺跡周辺は，旧石器時代から人々の生活の舞台として利用されていたようである。

昭和56年11月に秋田県教育庁文化課が実施した範囲確認調査で，能代市浅内字此掛沢遺跡（第１図の３）で，旧石器時代に属すると考えられる旧石器が数点検出された。米代川の河口周辺では，左岸で昭和53年に旧石器時代の石器が発掘されており，右岸でも旧石器の存在が確実になった。

相染森遺跡（第１図の５）は縄文時代中期の遺跡であり，竪穴住居跡・袋状土壙等が確認されている。

柏子所貝塚（第１図の６）は，県指定史跡である。昭和30・32・33年に発掘調査され，その結果，人骨８体・貝類（コタマガイ・サルボウ・ベンケイガイ・アカニシ・イタボガイ・ヤマトシジミ・イシガイ・カワニナ）・獣鳥魚骨類（シカ・イノシシ・クマ・ムササビ・クジラ・オットセイ・ウサギ・クロダイ・スズキ）・炭化植物（クリ・ドングリ・トチ）などのほか，縄文時代晩期の土製品・石製品・骨角器が多数検出されている。

国指定史跡である檜山安東氏城館跡（第１図の７）は，中世に秋田・檜山・比内３郡を支配した檜山安藤氏の居城である。遺跡周辺の集落である桧山・扇田・柏子所・道地・仁井田・長崎・塩千田・大内田・河戸川・浅内は戦国期には，すでに誕生していた村々である。



第２図　腹鞍の沢遺跡Ａ地区遺構分布図

第３章　　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

腹鞄の沢遺跡は，米代川の右岸に形成された段丘の一部が，北に舌状に延びる地形上に所在する。北端は沖積地に接し，東と西は谷となっている。この谷は堰止められ，堤となっている。段丘面はゆるやかな起伏があり，標高35～38ｍを測る。

Ａ地区は段丘の北縁に位置し，標高約35ｍ。

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド方式で実施した。台地の北縁の小友土区測量基準点No.３より原点を移動Ｖ，Ｘ＝19,00ｍ・Ｙ＝－65,200ｍを発掘基準点とした。この発掘基準点を中心として，東西南北に40ｍ×40ｍの大グリッドを設定した。南北方向は磁北方向に一致する。この大グリッドには，４ｍ×４ｍの小グリッドを配置した。

グリッドの名称は，東西方向の基線の算用数字３桁と南北方向の基線のアルファベット２文字の組み合せで表現することとした。そして，グリッドの南東隅の交点が，グリッド名になるようにした。なお，算用数字は北へ進むと増え，アルファベットは小グリッドが10進むごとに頭文字が変わることとする。すなわち，西方へDA→DJと小グリッドが10進むとこんどは頭文字を変えてEA→EJとする。

遺構の実測は，遣り方測量で実施した。

略記号は下記の通りである。

SI　……竪穴住居跡

SB　……掘立柱建物跡

SK　……土壙

SD　……溝状遺構

SKT　……陥し穴状遺構

SXF　……焼土遺構

第３節　調査の経過

発掘調査は，昭和56年５月11日から同年10月20日まで実施した。

５月11日の午前中は，作業員に対して発掘調査の目的・賃金の支払い・勤務時間・安全規則等について説明。午後からＡ地区の調査を開始。13日，陥し穴状遺構のプランが確認される。

4月に実施された範囲確認調査では，陥し穴状遺構は1基も確認されていない。18日，雨の日が続き調査はなかなか進まない。スライドで掘り方指導。19日，竪穴住居跡（SI01）のプラン確認。21日，竪穴住居跡（SI02）のプラン確認。27日，地層観察・花粉分析資料採取のため，CC140グリッドの掘り下げ開始。

6月2日，竪穴住居跡(SI03)のプラン確認。6日，土壙(SK01)のプラン確認。精査開始。9日，遣り方測量の抗打ち。11日，SI01･02の精査開始。13日，SK02・SKT01の精査。15日，SK03の精査。17日，SI01床面の硬度測定を計画。佐藤照男（県立農業短期大学）氏より中山式硬度計を借用。25日，SI01の床面の硬度の測定開始。硬度計の読み手1人，と記録係1人で1パーティーとする。30日SKT04の精査。

7月3日，SI04の精査開始。8日，地形測量開始。9日，SI03の精査。13日，SKT05の精査。14日，秋田大学教育学部生25名実習のため来跡。16日，林謙作（北海道大学）氏来跡。17日，SI03の床面の硬度計測。20日，地山を掘り下げ，旧石器の探索開始。22日，遺構の実測・地山面の地形図作製開始。24日，遺構の写真撮影。28日，文化課・農政局・業者の3者でA・C・D地区の調査日程を確認。

8月3日，能代市立第1中学校社会科クラブ員5名調査に参加。4日，C地区のグリッド抗打ち。6日，A地区の補足調査。

第4章　調査の記録

第1節　検出遺構

本調査により，A区にて検出された遺構は竪穴住居跡4棟・掘立柱建物跡1棟・土壙3基・焼土状遺構2・陥し穴状土壙10基である。

①　竪穴住居跡

調査区東南部と北西部で，それぞれ2棟づつ隣接して検出。うち3棟(SI01～03)はカマドの主軸方向（南東),構造（くり抜き式の煙道）が類似している。出土土器は土師器を主とし，須恵器は1点。

SI01竪穴住居跡　東西辺長4.6m，南北辺長3.8mで平面プランは長方形。南壁を除き他の3辺壁に沿い，壁溝を持つ，柱穴はその痕跡が明瞭でない。

SI02竪穴住居跡　東西辺長4.4m,北辺長5mで，南壁東西部は土壙と重複しており，輪郭が明瞭でないが，南北にわずかに長い長方形を呈する。壁溝は3辺壁に沿いみられ，東，北壁では一部中断している。柱穴は壁に沿う8基で，対角線上に3基うち2基が主柱穴と考えられる。

床面は平坦でしまっており，遺構中央部西面寄りの，隣接する2基のピット底面からは比較的多くの土師器が出土した。

SI03竪穴住居跡　西辺長3.8m，南辺長4mで，わずかに長方形のプランを呈する。壁溝は壁際に沿いほぼ全周するが，カマド東側に接続する部分は1.2mにわたり中断している。柱穴は検出されない。

SI04竪穴住居跡　南北3.4m，東西4.2mの周溝に区画された長方形プランを呈し，周溝に囲まれた住居跡内は竪穴の様相を示していない。周溝は幅16～20cm，深さ8～12cmで東辺部は40cmにわたり中断している。柱穴は周溝内でみられるが，小さく浅い。カマドは住居跡南西寄りに位置する。燃焼部内に，土師器甕を転用，支脚として利用しており，本体は粘土構築されている。

②　掘立柱建物跡

SB01掘立柱建物跡　本調査区中央部南寄りで，SI01に隣接して検出。東西2間，南北3間で，柱間は東西が2.4m，南北が1.8mでほぼ均等値を示す。柱穴は，平面が円形プランで，直経28～33cm，柱痕跡は明瞭でない。

③　土壙

大部分が住居跡に隣接する場に，単体もしくは集合して検出された。平面は楕円か円形を呈し比較的浅い。出土遺物は3基から土師器。

SK01土壙 平面が楕円形を呈し，上幅径2.32×1.6m。底面は中央部で1段凹み，深さ20cm，遺構内に多量の炭化材を含んでいるが，廃棄後投入されたものである。

SK02土壙 平面が円形を呈し，直径0.44m，深さ12cm

SK03土壙 平面が不整円形で直径1.28m，深さ20cm。堆積土に小量の炭化材と焼土を含有。

SK04土壙 平面が楕円形で，上幅径0.92×0.8m，深さ16cm。堆積土全層にわたり炭化粒，焼土を含む。

SK05土壙 平面が楕円形を呈し，上幅径1.48×1.32m。北面部で一段深く落ち凹み，深さ38cm。最下層の6層を除き，焼土を多量に混入するが，底壁面に熱を受けた痕跡は見られない。

SK06，07，08土壙 いずれもSI02南面部で検出され，住居跡と重複している。SK06は，1辺1.6mの方形プランで，深さ28cm。SK07は長辺1m，短辺0.6mの隅丸方形プランで，深さ72cm。SK08は長軸が1.2mの不整楕円形で，深さ40cm。遺構廃棄時は，06，08が住居跡より新しく，07は古い。

SK09土壙 平面がほぼ円形を呈し，直径1.6m，深さ28cm。

SK10・13土壙 遺構確認時SK13の範囲は，焼土，土器を混入した黒褐色土でマウンド状を呈していた。SK10は，平面が不整の楕円形を呈し，長軸1.0m，深さ40cm。SK13は，10に切られており，現況での開口部南北軸長1.2m。

SK11土壙 平面は東面が張り出し気味の不整楕円形を呈し，上幅径0.88×0.8m。

④ 焼土状遺構

SXF01焼土状遺構 平面が円形状に，焼土が厚く堆積し，東面は幅約20cmで半円状に熱化した粘土の堆積がみられた。焼土層下に掘り込みは見られない。中心部に多量の炭化材を検出。出土遺物は西面粘土層中より土師器杯。

SXF02焼土状遺構 高さ30cmで円筒状に焼土堆積。上面の直径23cm。

⑤ 陥し穴状土壙

調査区全域に分散しているが，多くは長軸方位がNE－SW方向を示す。形状は平面形が隅丸方形。長軸方向の断面は，底面付近でふくらみ気味に内傾，上面でほぼ垂直に立ち上る傾向を持つ。

SKT01陥し穴状遺構 開口部長軸3.32m，短軸80cm。土壙底部長軸4.0m，短軸16cm。深さ1.96m。

SKT02陥し穴状遺構 開口部長軸3.28m，短軸84cm。土壙底部長軸3.8m，短軸16cm。深さ1.2m。

SKT03陥し穴状遺構 開口部長軸3.36m，短軸68cm。土壙底部長軸4.16m，短軸12cm。深さ1.2m。

SKT04陥し穴状遺構 開口部長軸2.96m，短軸76cm。土壙底部長軸3.4m，短軸16cm。深さ1.28m。

SKT05陥し穴状遺構 開口部長軸2.56m，短軸48cm。短軸48cm。土壙底部長軸2.96m，短軸短軸17cm，深さ96cm。

SKT06陥し穴状遺構 開口部短軸48cm。土壙底部短軸16cm。深さ64cm。

SKT07陥し穴状遺構 開口部長軸3.08m，短軸40cm。土壙底部長軸3.8m，短軸12cm。深さ1m。

SKT08陥し穴状遺構 開口部長軸2.8m，短軸32cm。土壙底部長軸3.0m，短軸13cm。深さ72cm。

SKT09陥し穴状遺構 開口部長軸3.04m，短軸60cm。土壙底部長軸3.0m，短軸18cm。深さ1.08m。

SKT10陥し穴状遺構 開口部長軸2.4m，短軸48cm。土壙底部長軸2.2m，短軸16cm。深さ1.08m。

第2節　出土遺物

石器は，石匙2，石箆3，剥片石器6，石錘15出土し，縄文土器も数点出土したが，器表の摩耗が激しく，時期不明。他は土師器が主として，須恵器は杯が1点，SI02より出土したにとどまる。

土師器

杯　遺構内を中心として，その周辺からの出土を主とする。形態及び成形，調整技法に差異はみられず，いずれもロクロ整形され，底部は回転糸切り無調整，体部は内湾して立ち上がり，口縁部でわずかに外反するものが多い。

甕　遺構内からの出土が大部分である。比較的大型のものと小型のがあり，前者は胴部上半にロクロ調整痕を留め，下半はヘラナデを施す。胴部の立ち上がりは直線状のものを主とし，紡錘状にゆるく内湾するのもあり，口縁部で「く」の字状に外反，口唇部で垂直に立ち上がる。後者は胴部がゆるやかに内湾，口縁部で外反する器表面は，口縁部で横ナデ，胴部上半から下位にかけヘラナデを施こし，底部付近はヘラケズリ調整をなす。出土量は比較的少ない。

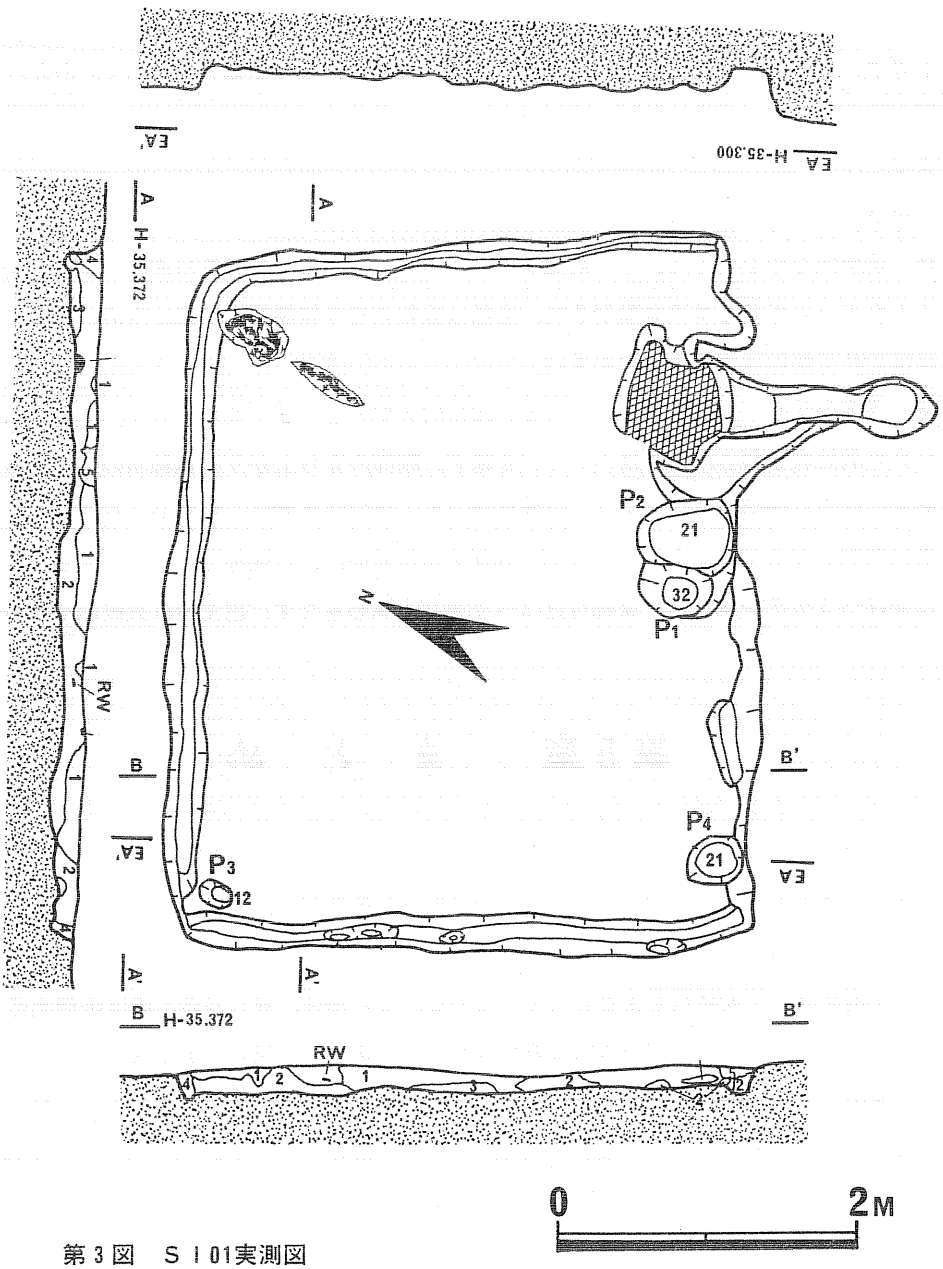
第5章　まとめ

最後に腹鞍の沢遺跡，A地区調査で明らかになった事を記し，問題点も含めてまとめとしたい。

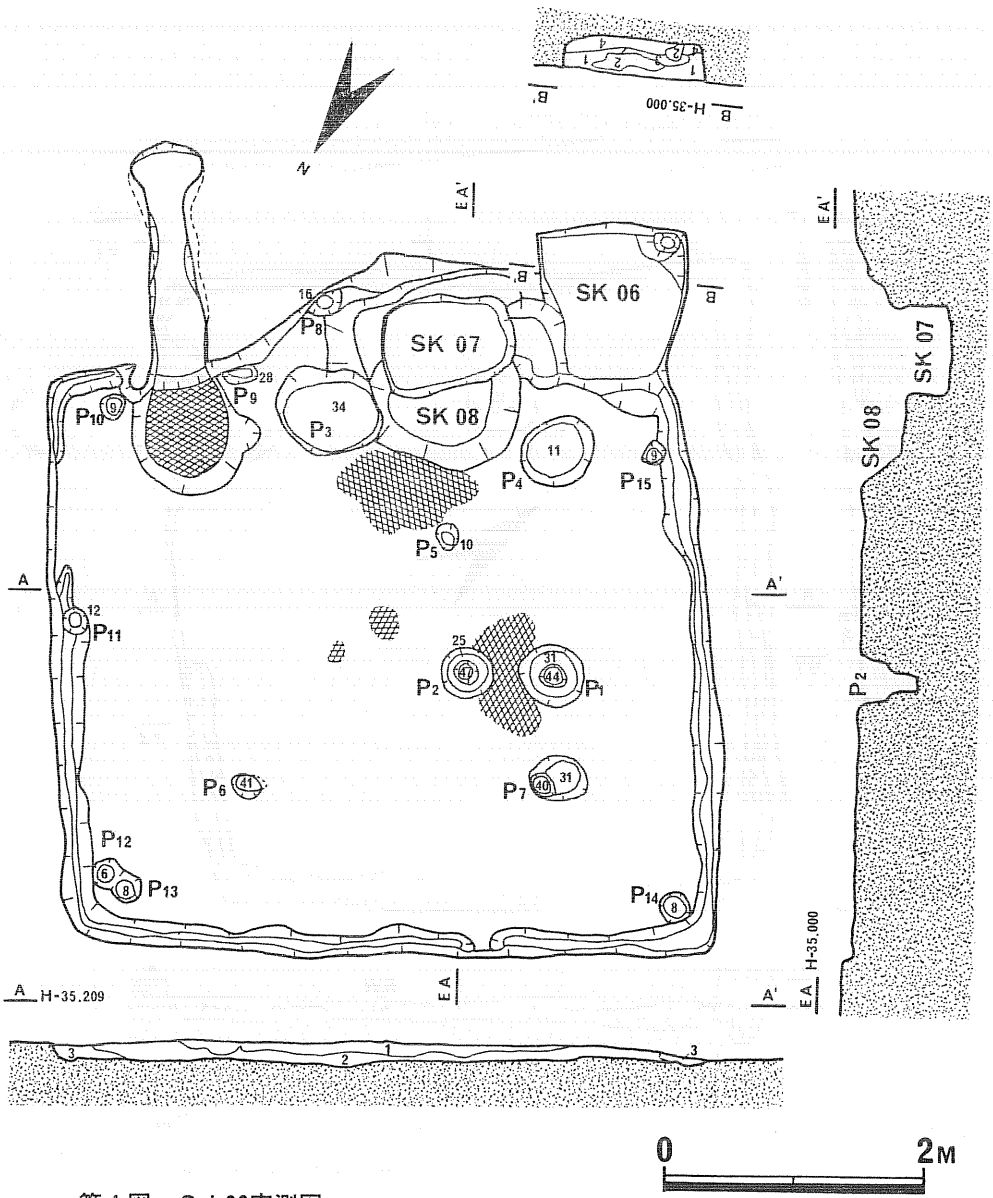
①　本遺跡は，平安時代を主としたものである。この場合，陥し穴状土壙は時期決定する遺物を出土しておらず，その使用目的と兼ね合わせ，今後さらに検討する必要があろう。

②　検出した住居跡は4棟であるが，その平面プラン（東西に長辺を有する長方形），カマド構造とその主軸方向，遺構内施設（壁溝，カマド隣接ピット）等から，SI01～03は極めて接した時期に構築されたと思われる。SI04も出土土器からSI01～03竪穴住居跡に近い時期が想定される。

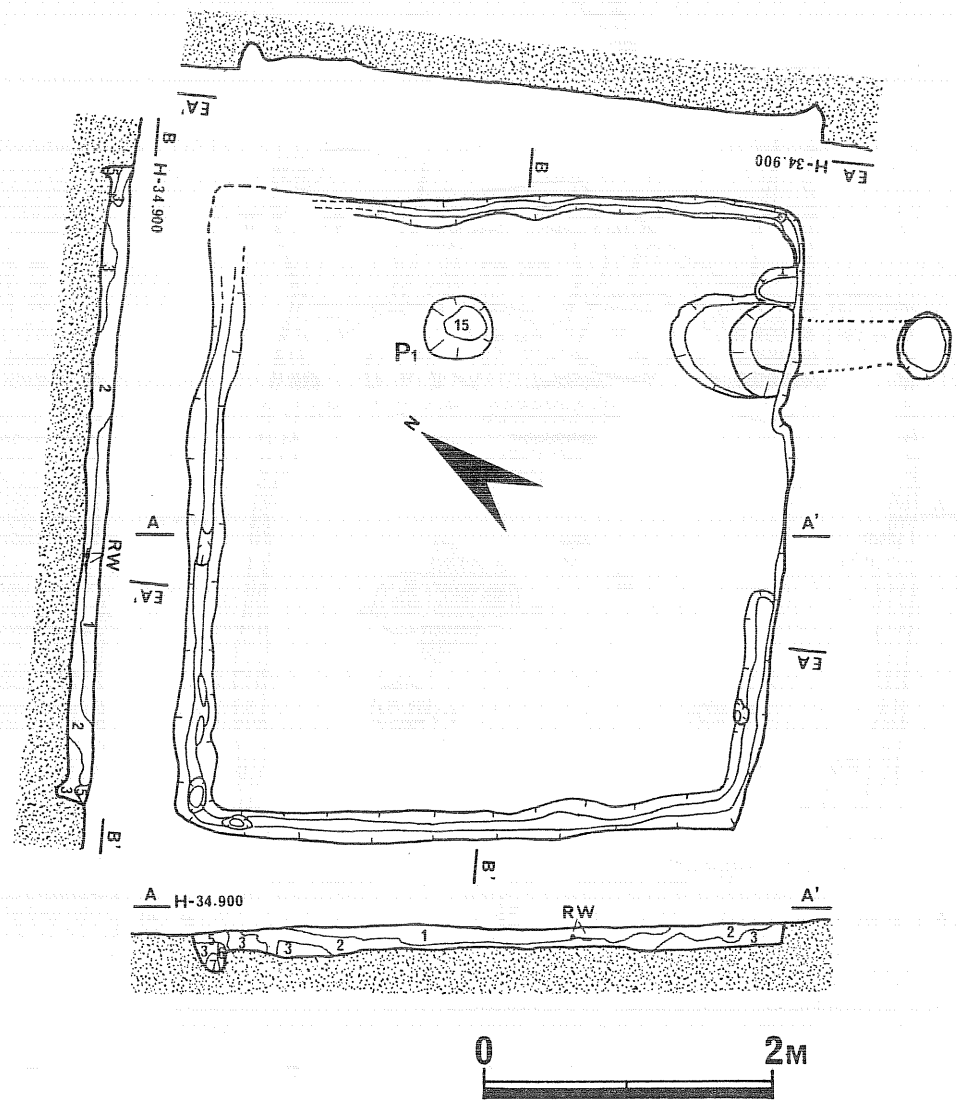
③　調査区周辺の確認調査では，同時期遺跡の存在する可能性がみられず，一集団が，検出された4棟以内に限定される小集落の可能性がうかがえる。そして，小集落の性格を，他遺跡の例と比較しながら，今後検討する必要があろう。


EA
H-35.300
EA'
A
A
H-35.372
A
P2
21
32
P1
N
RW
B
B'
EA'
P4
21
EA
P3
12
A'
A'
B
H-35.372
B'
RW
4
2
1
3
2
2
12
0
2M

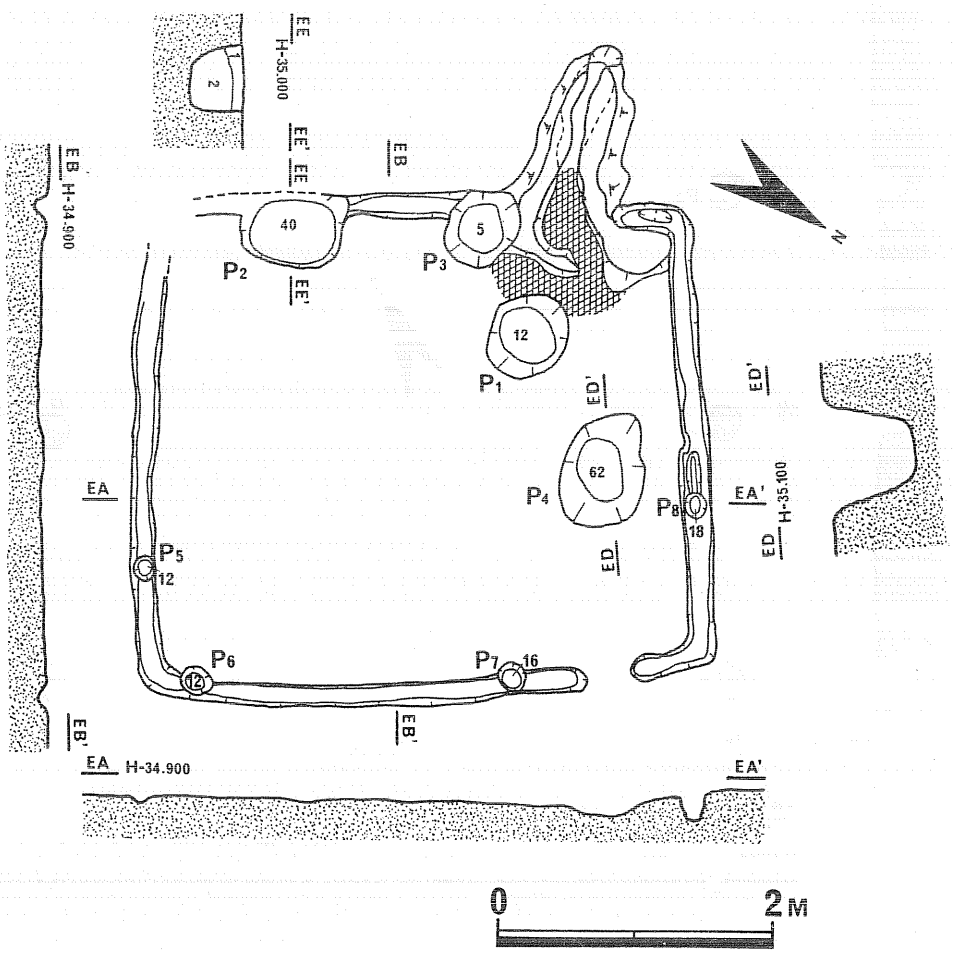
第3図　S I 01実測図


SK 06
SK 07
SK 08
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
A
A'
B
B'
E A'
E A
H-35.209
H-35.000
0
2M

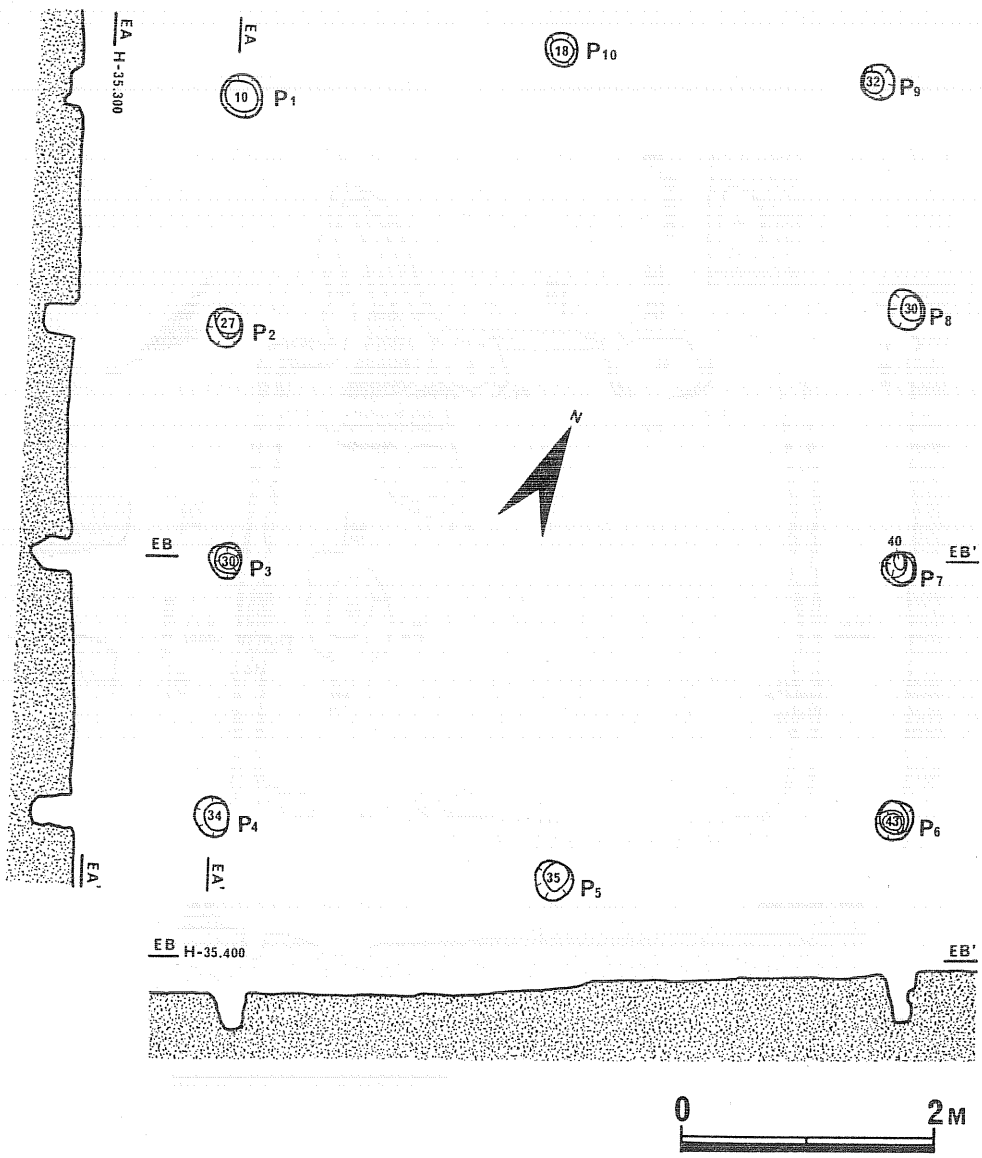
第４図　ＳＩ02実測図



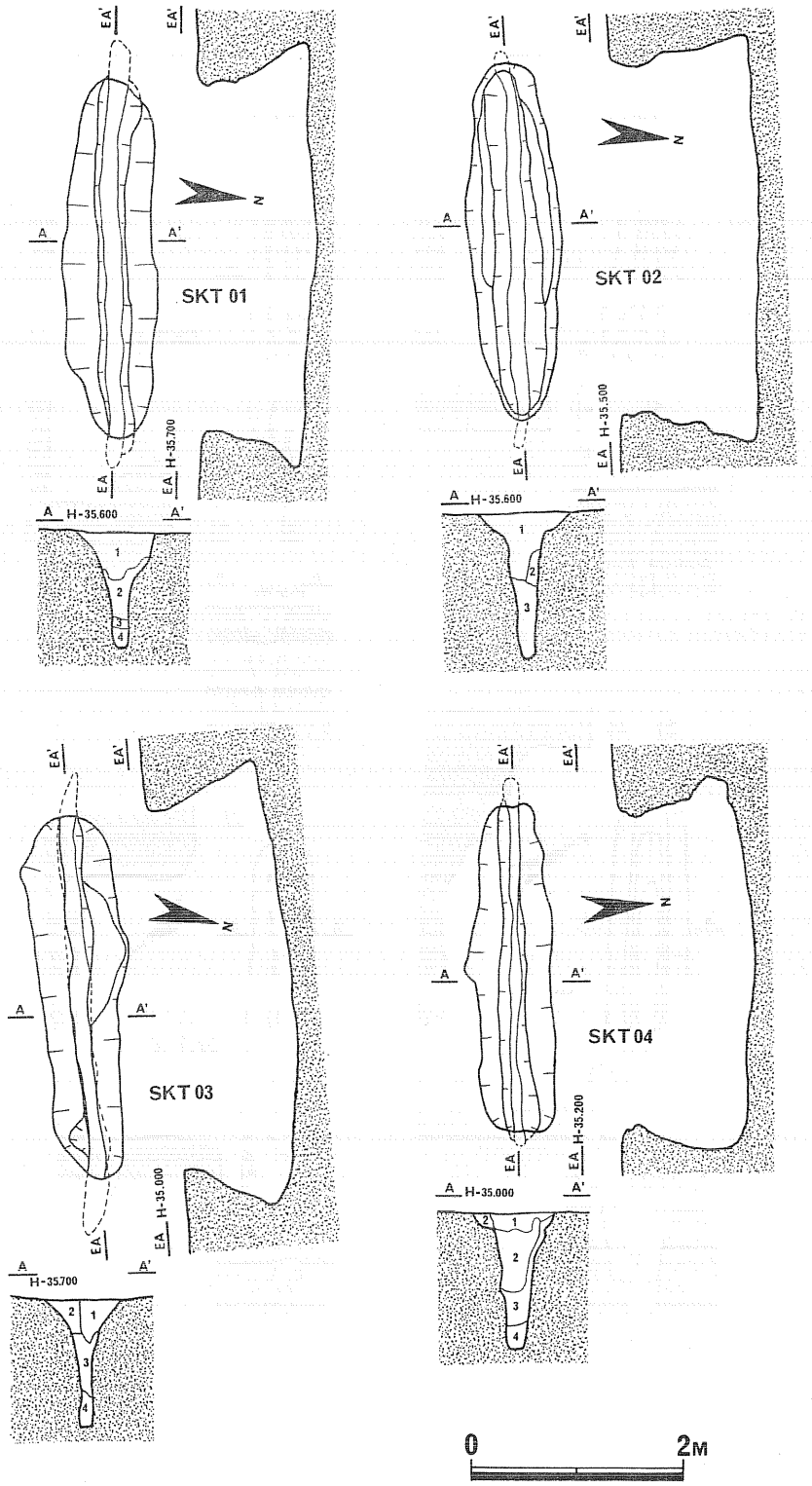
第５図　ＳＩ03実測図


EE
H-35.000
EE'
EE
EB
EB'
H-34.900
2
40
5
P2
P3
EE'
12
P1
ED'
62
P4
P8
18
EA
EA'
H-35.100
ED
ED'
P5
12
P6
12
P7
16
EB'
EB'
EA
H-34.900
EA'
N
0
2M

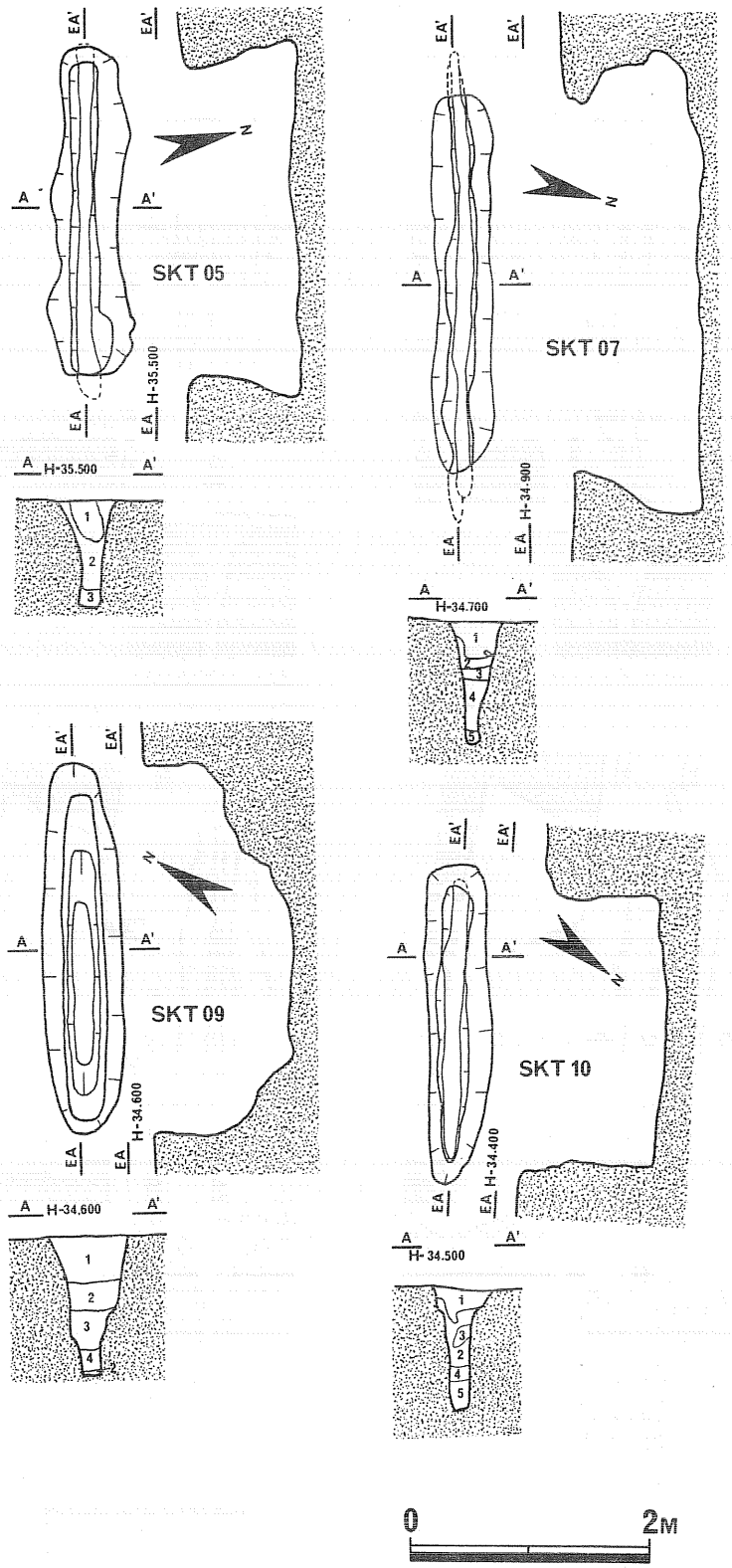
第6図　S I 04実測図



第７図　ＳＢ01掘立柱建物跡



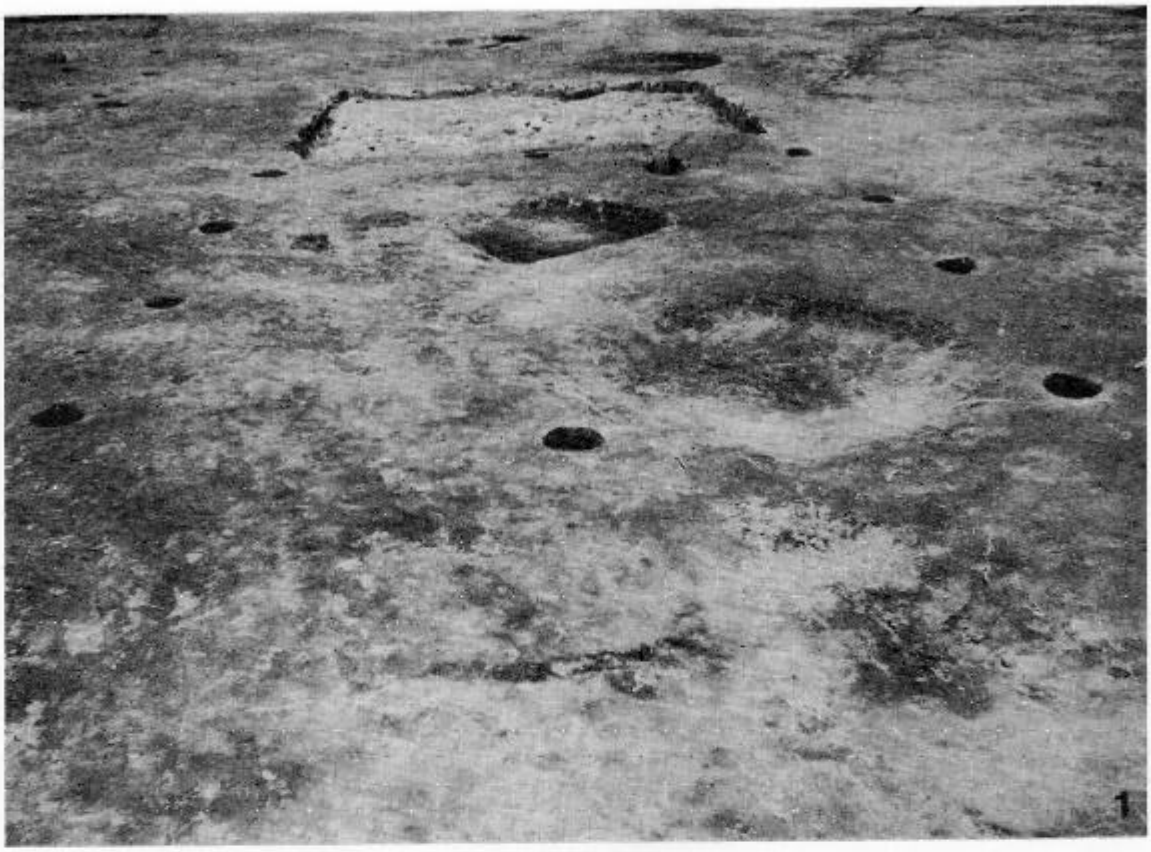
第８図　ＳＫＴ01～04実測図

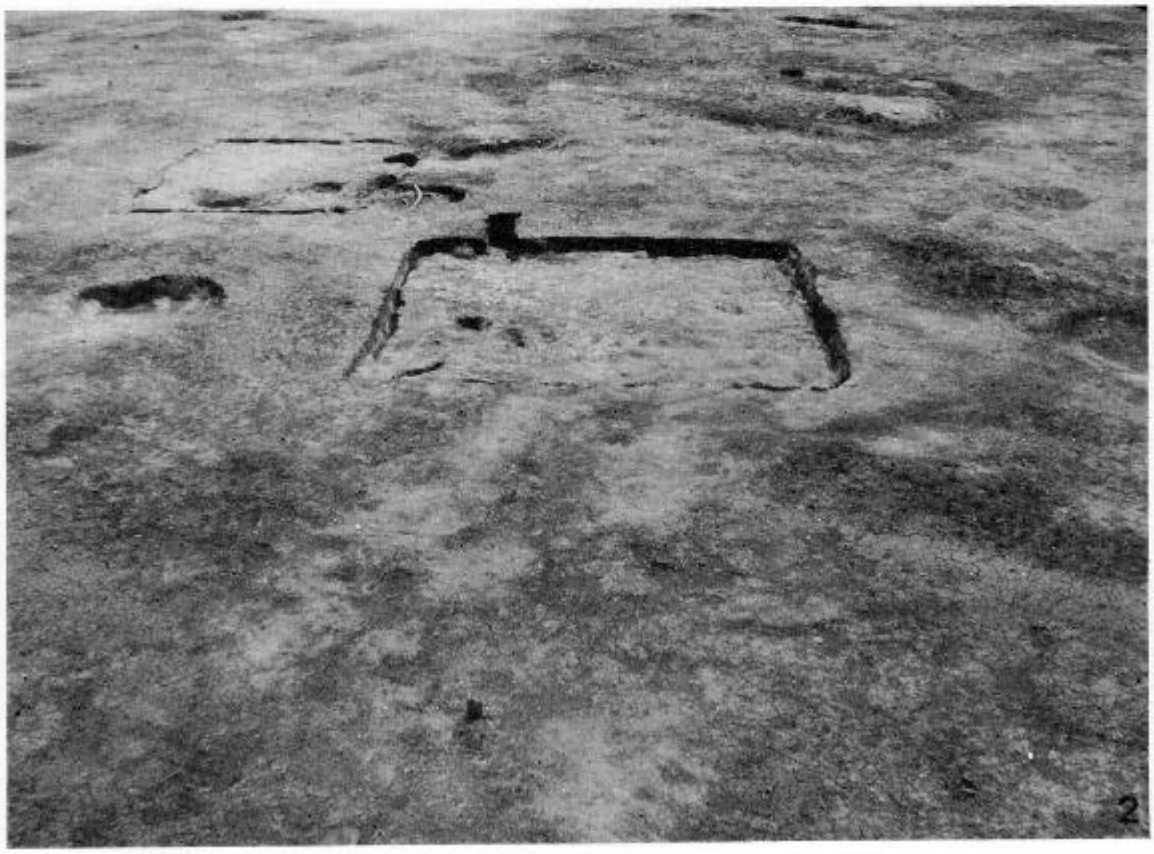


第９図　ＳＫＴ05・07・09・10実測図

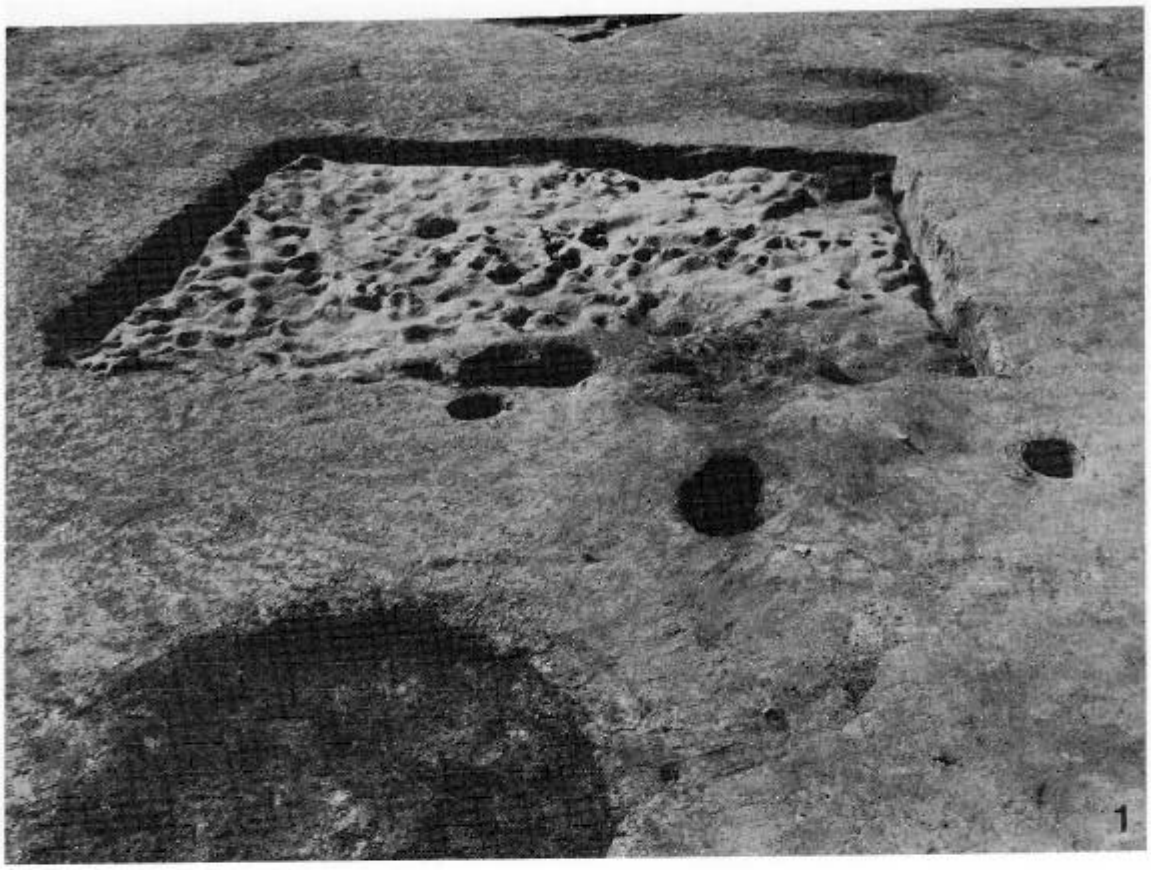
図版 1　(1)発掘調査前（北－南）　(2)発掘調査区（東－西）

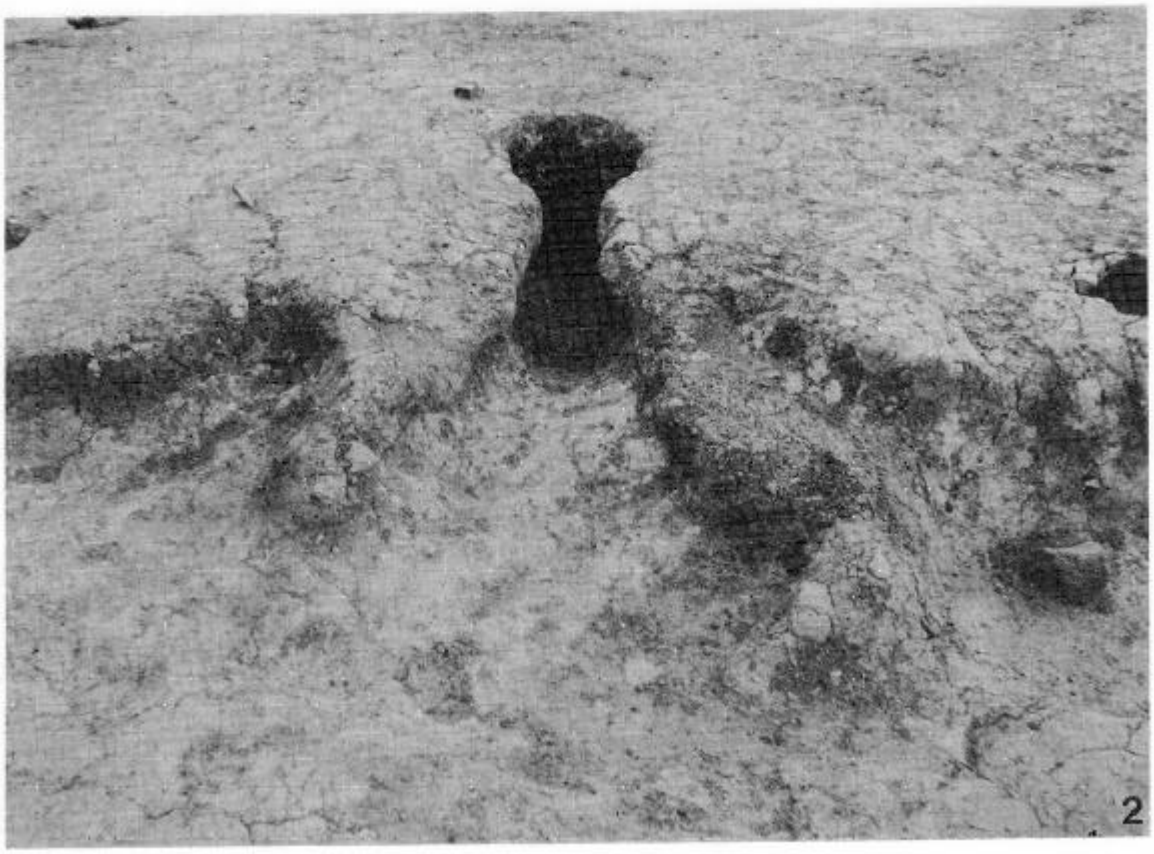
図版 2　発掘調査風景



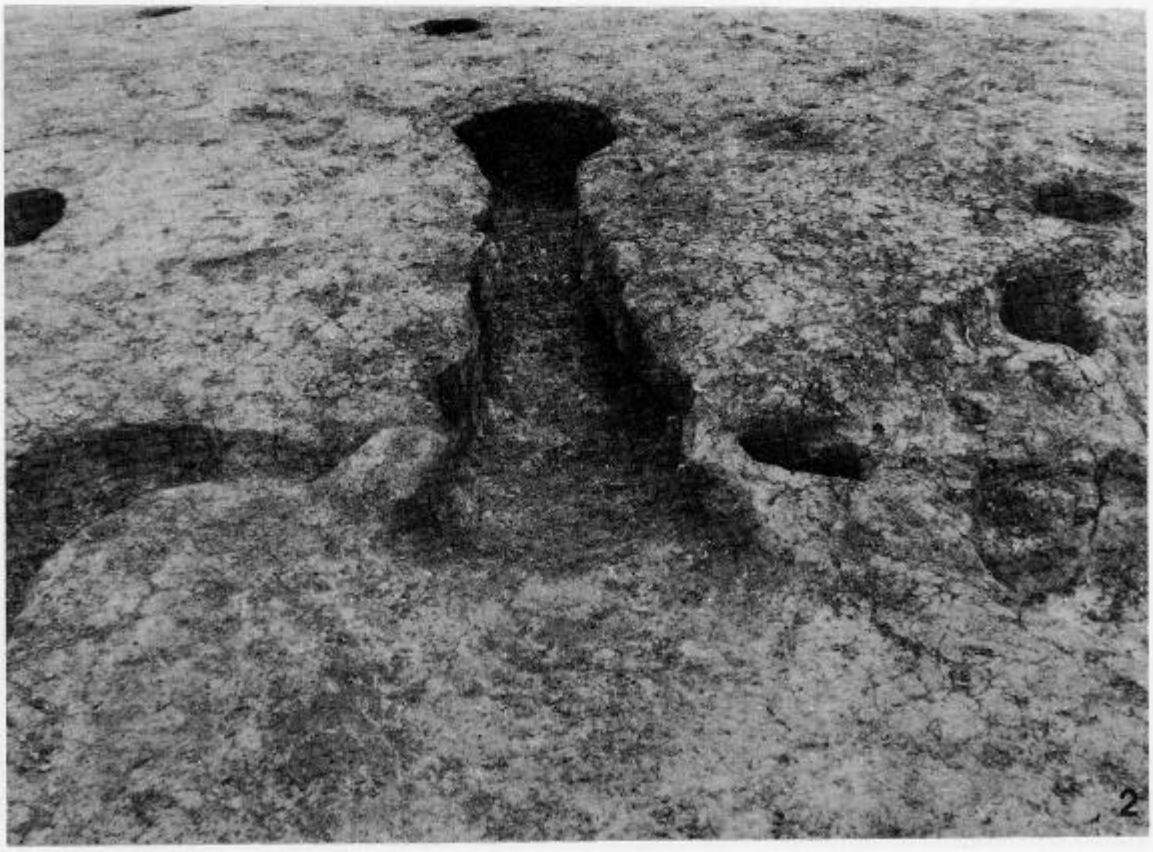


図版 3　(1)ＳＢ01・ＳＩ01（西－東）　(2)ＳＩ04・ＳＩ03（東－西）

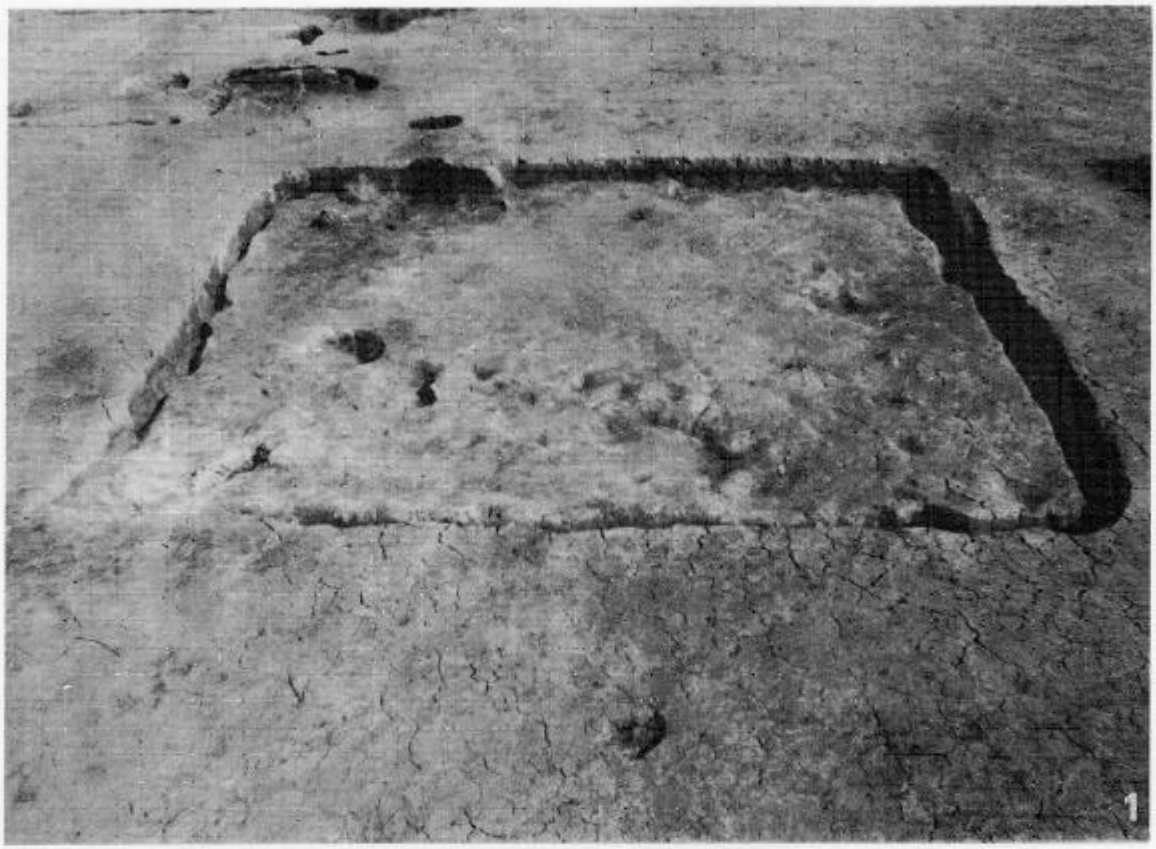


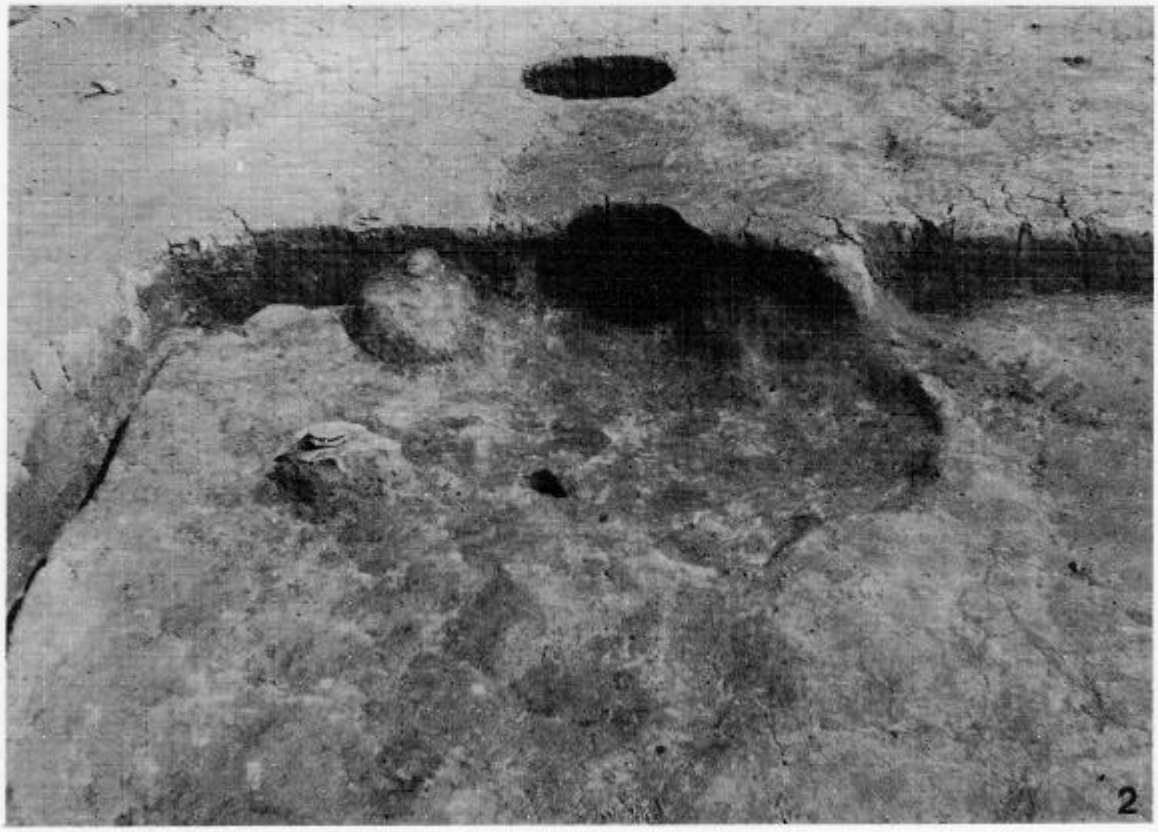


図版4　(1)ＳＩ01（西－東）　(2)ＳＩ01カマド

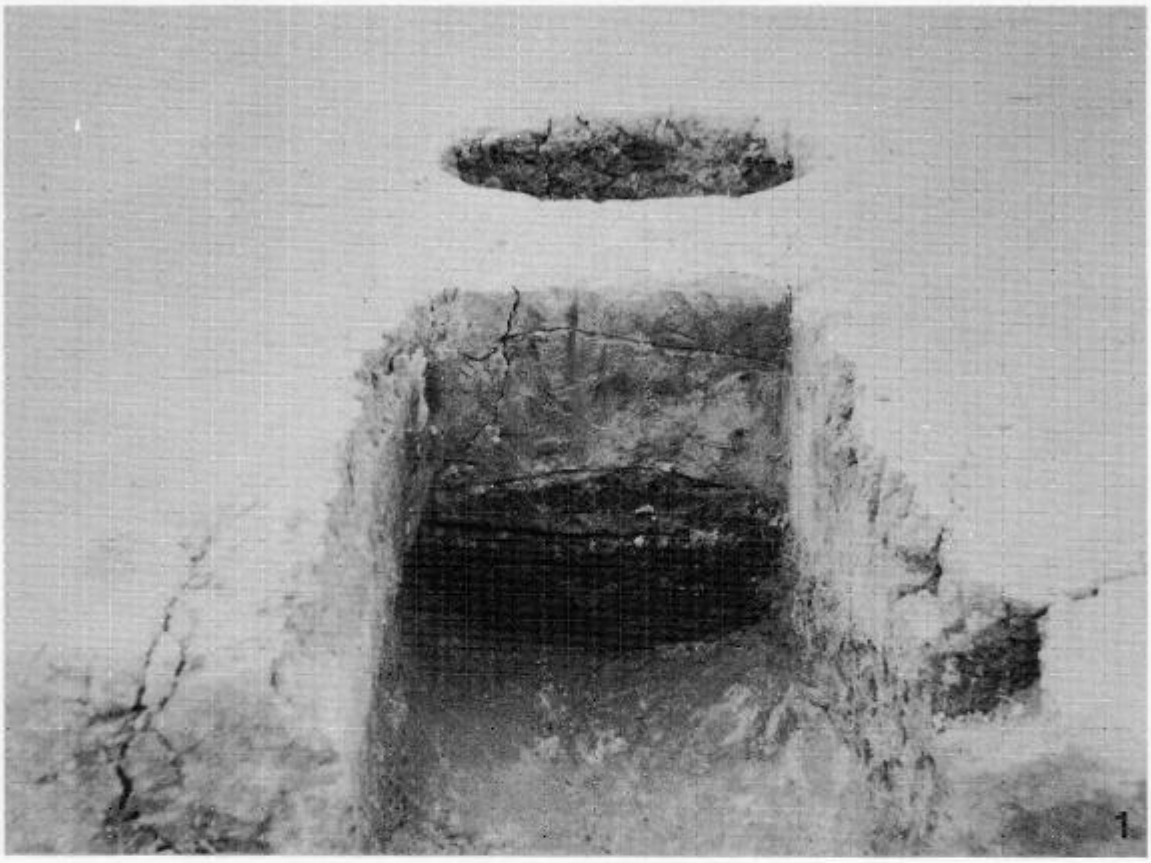


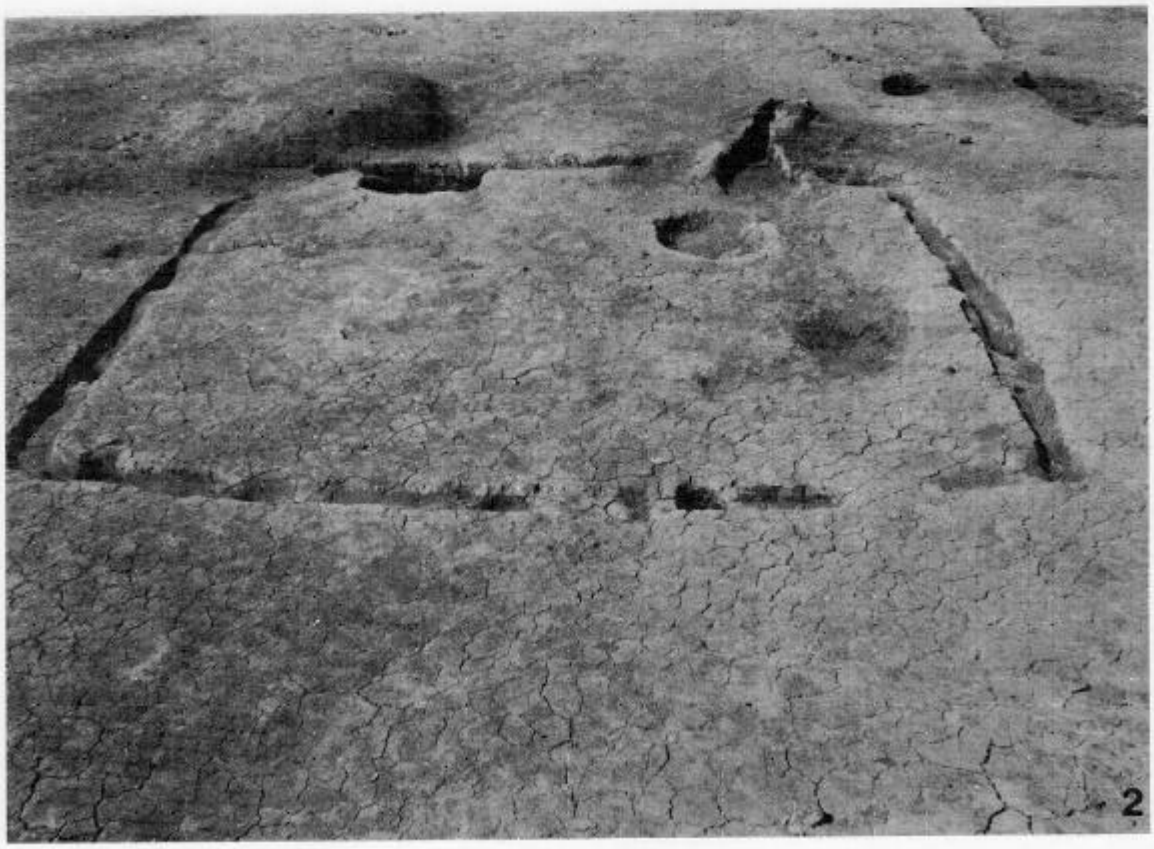
図版 5　(1)ＳＩ02（東－西）　(2)ＳＩ02カマド



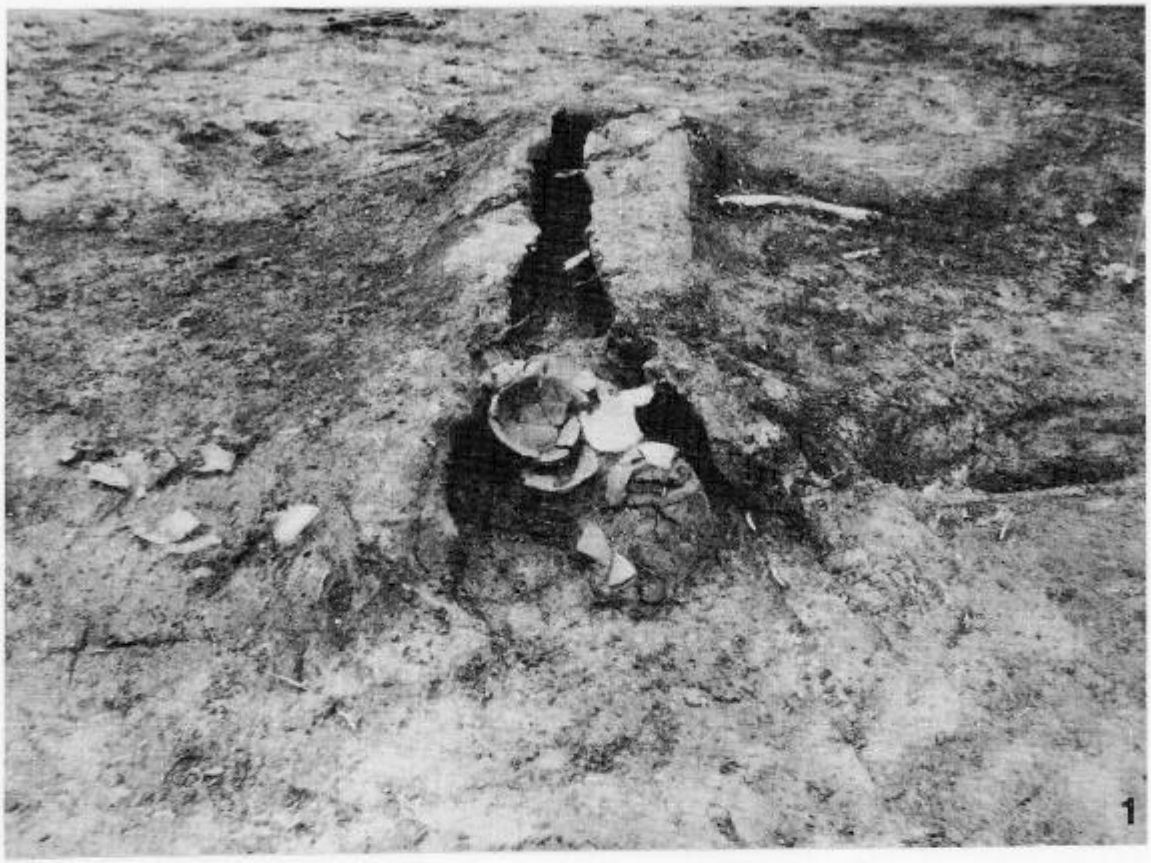


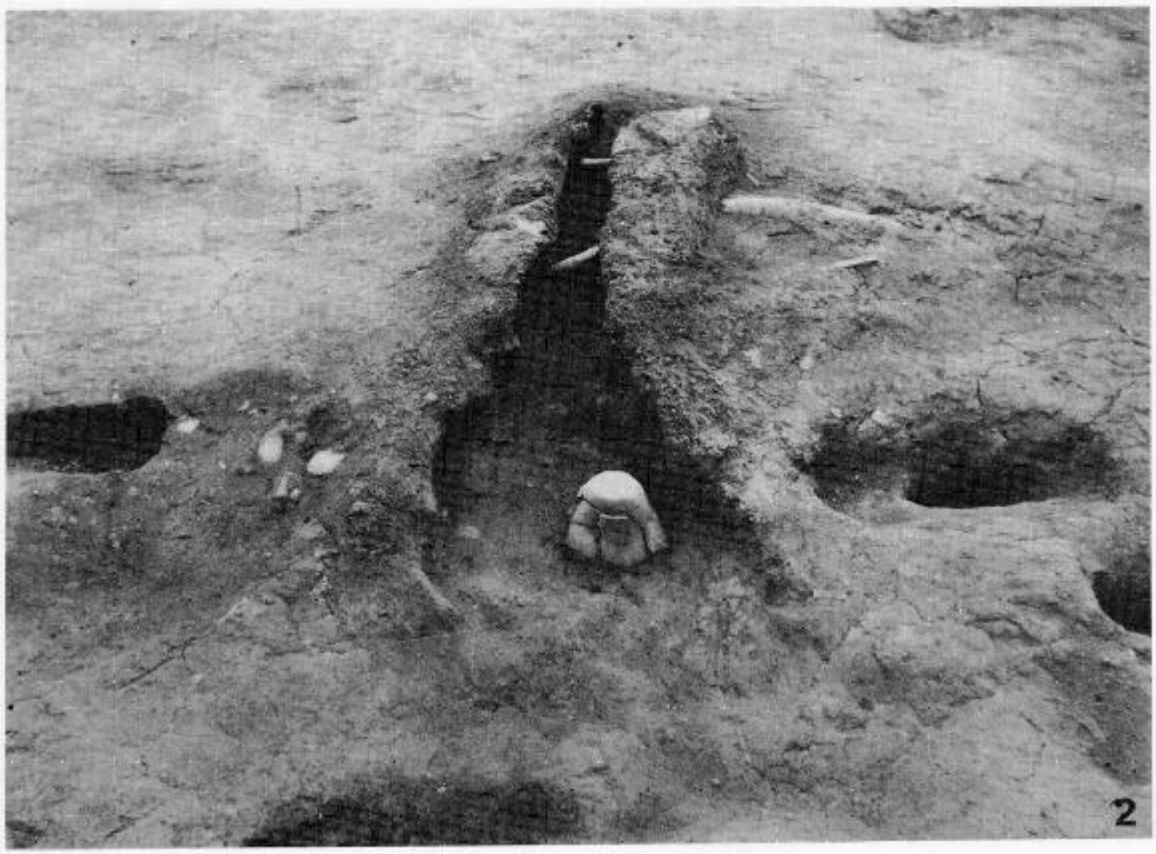
図版 6　(1)ＳＩ03（東－西）　(2)ＳＩ03カマド



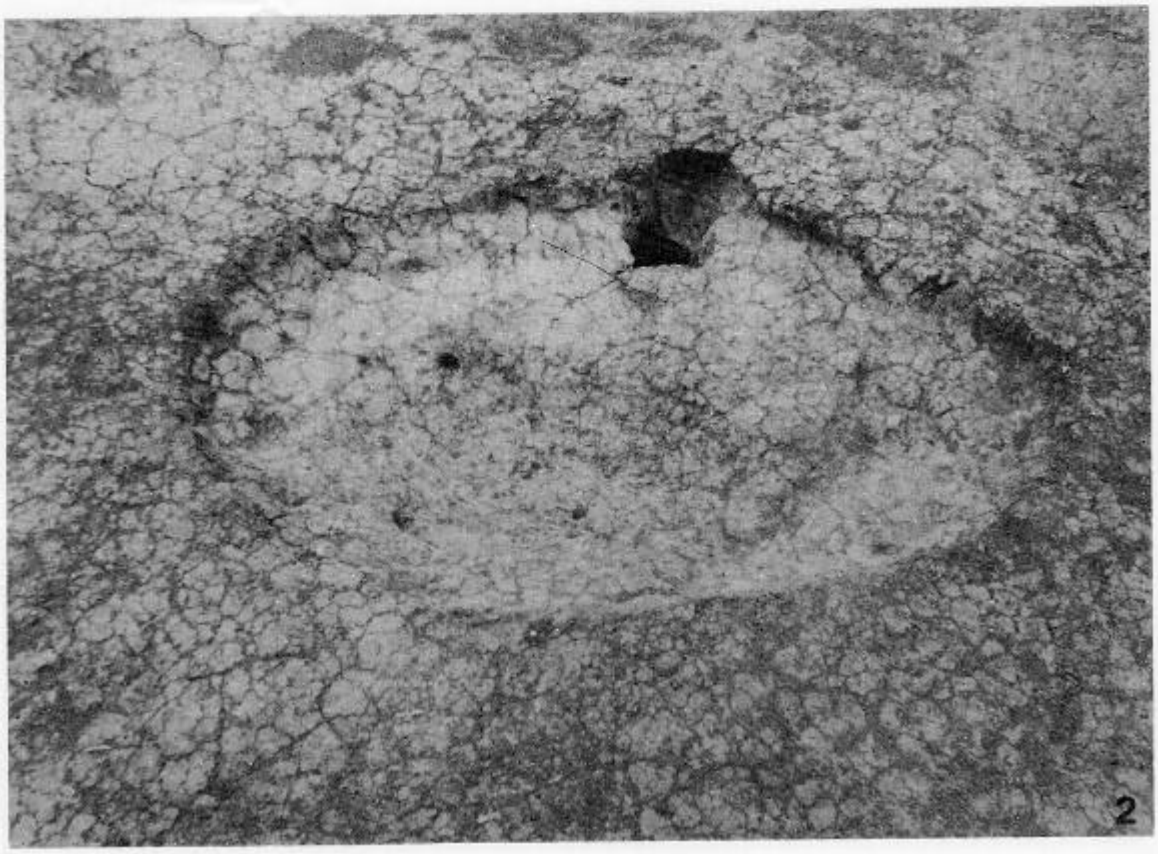


図版 7　(1)ＳＩ03カマド煙道部断面　(2)ＳＩ04（南ー北）

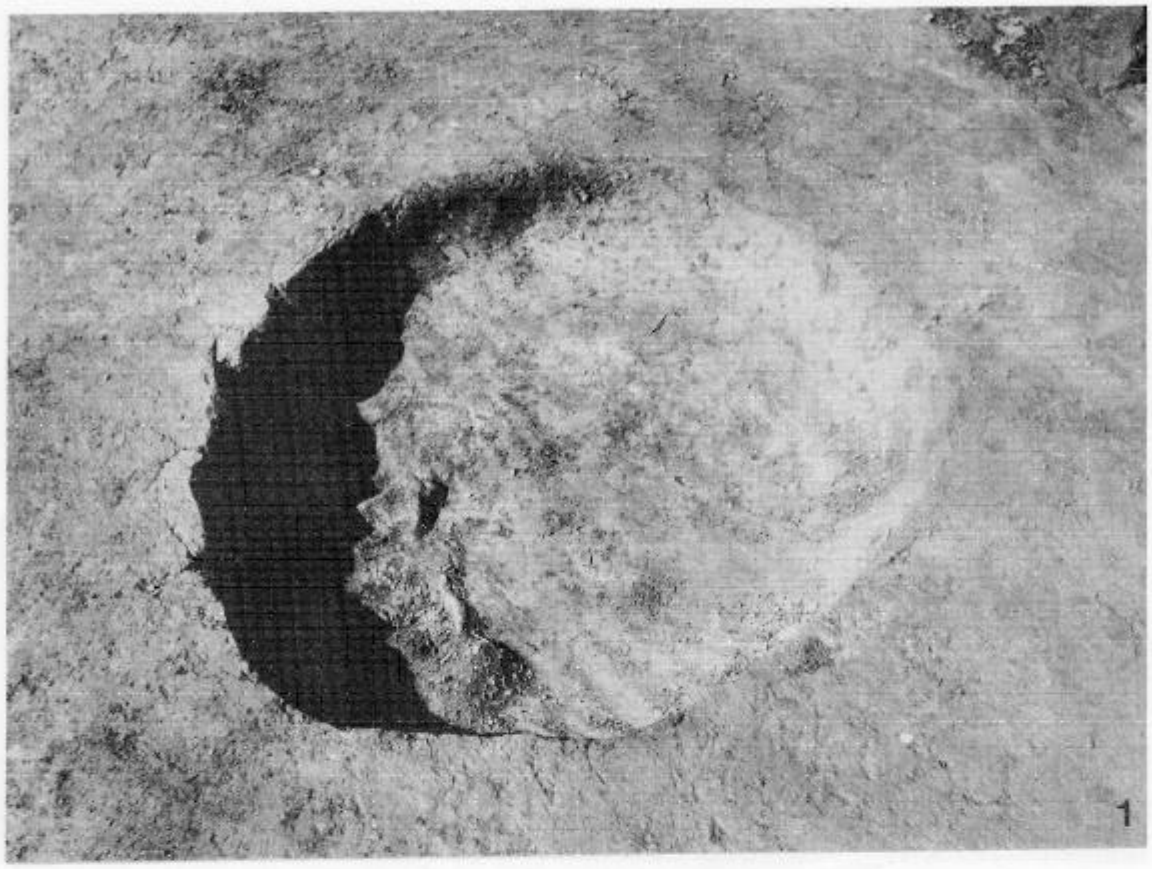


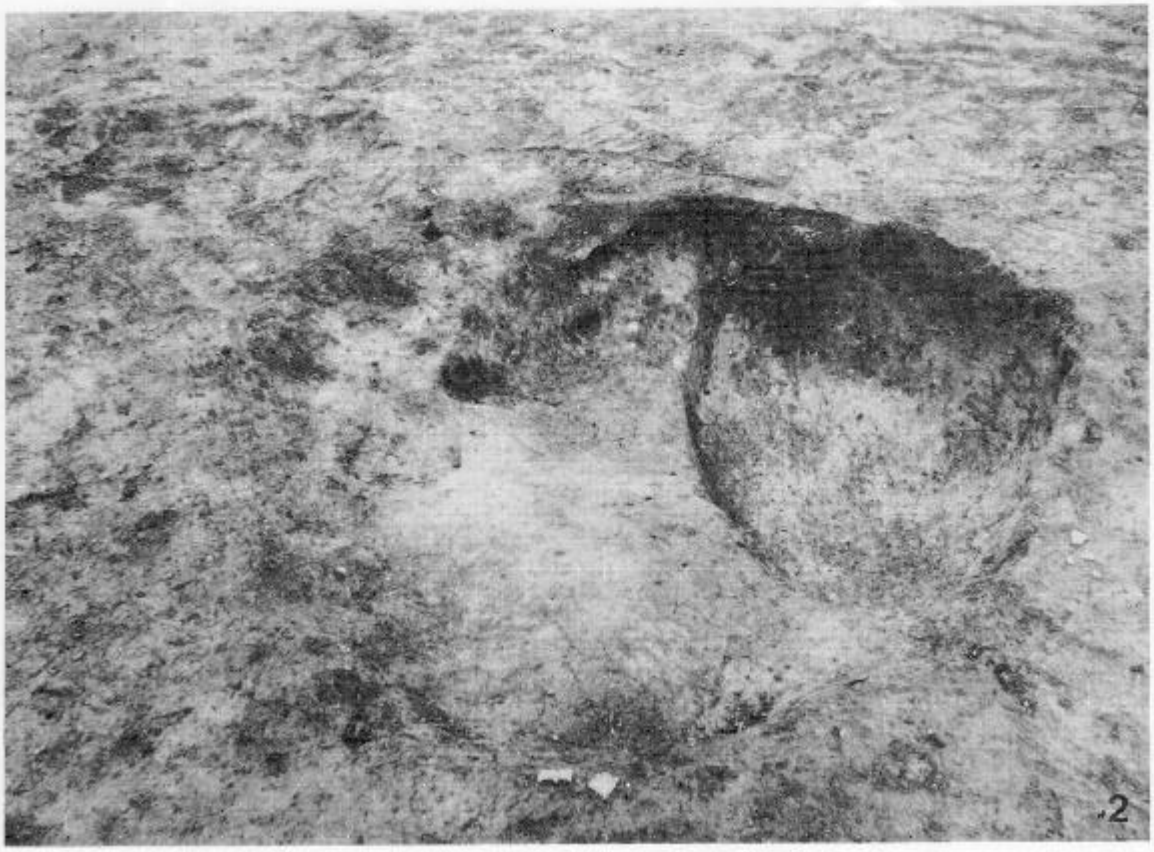


図版 8　(1)(2)ＳＩ04カマド

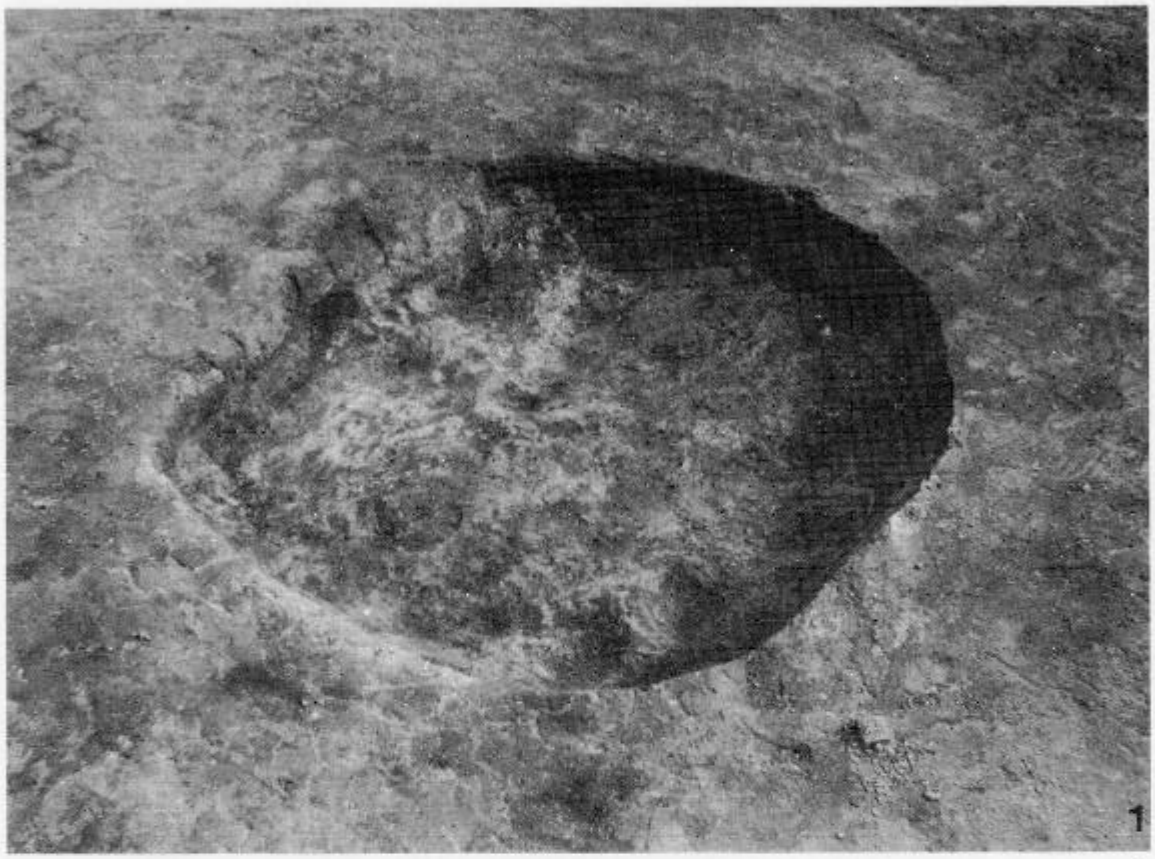


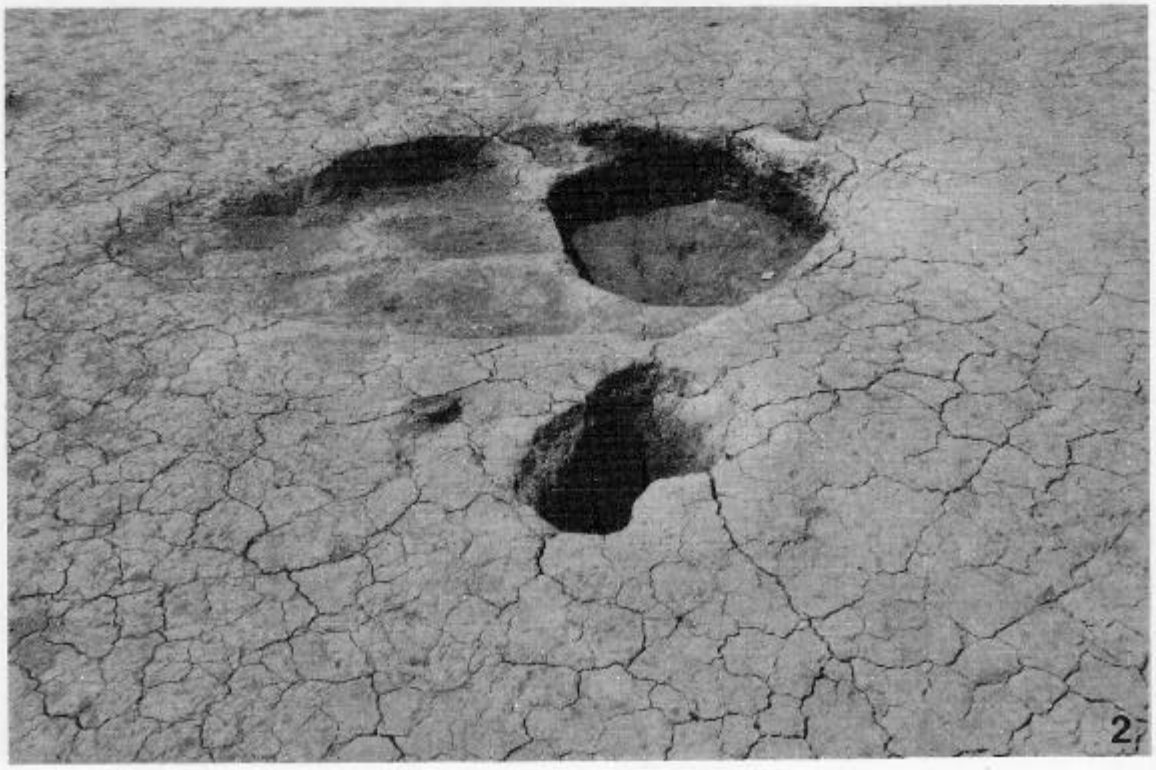
図版 9　(1)S K01炭化物出土状況　(2)S K01（南－北）



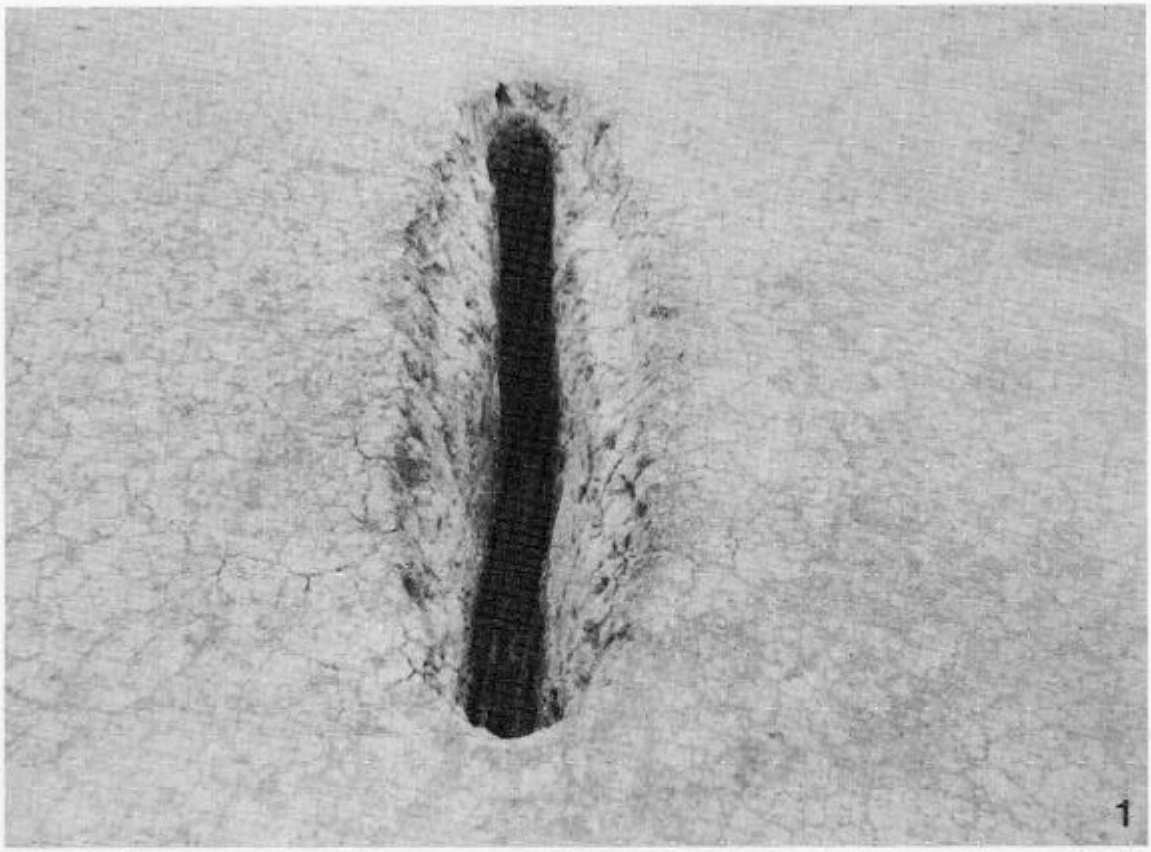


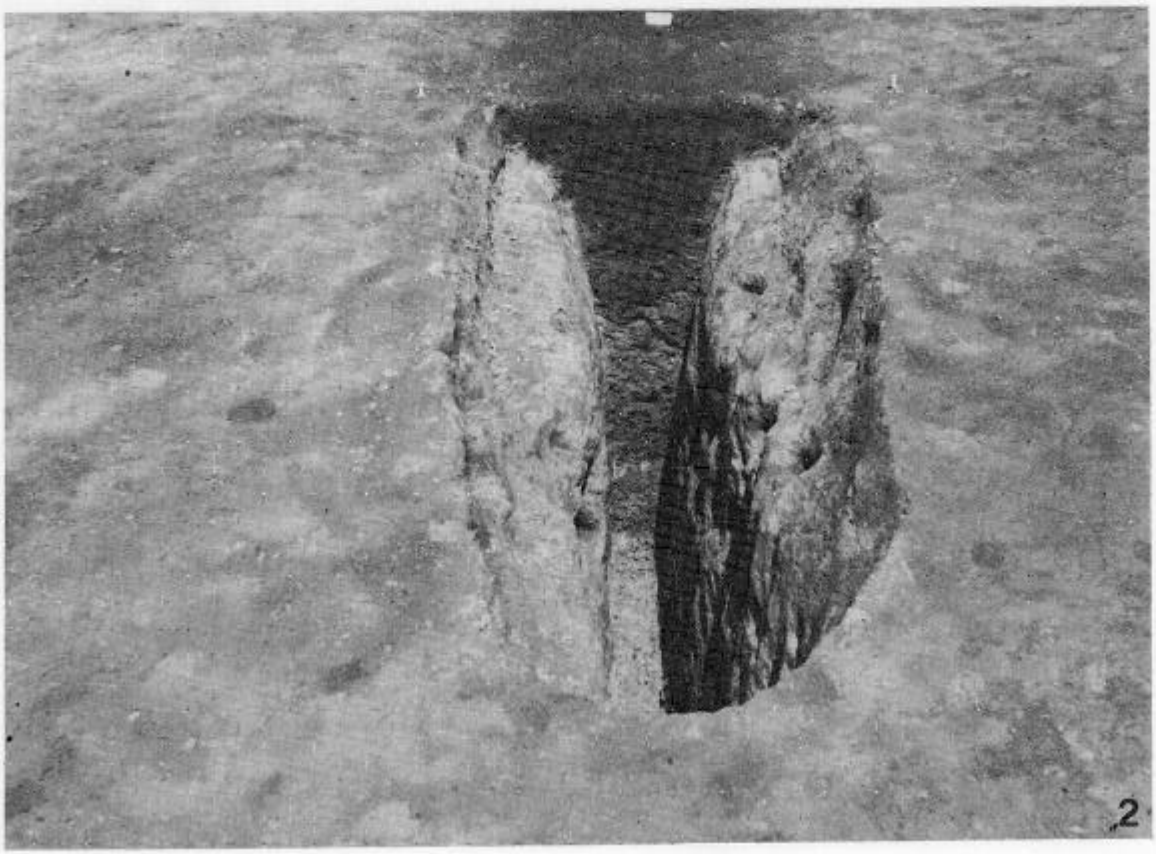
図版10 (1)S K04（西－東） (2)S K05（北－南）



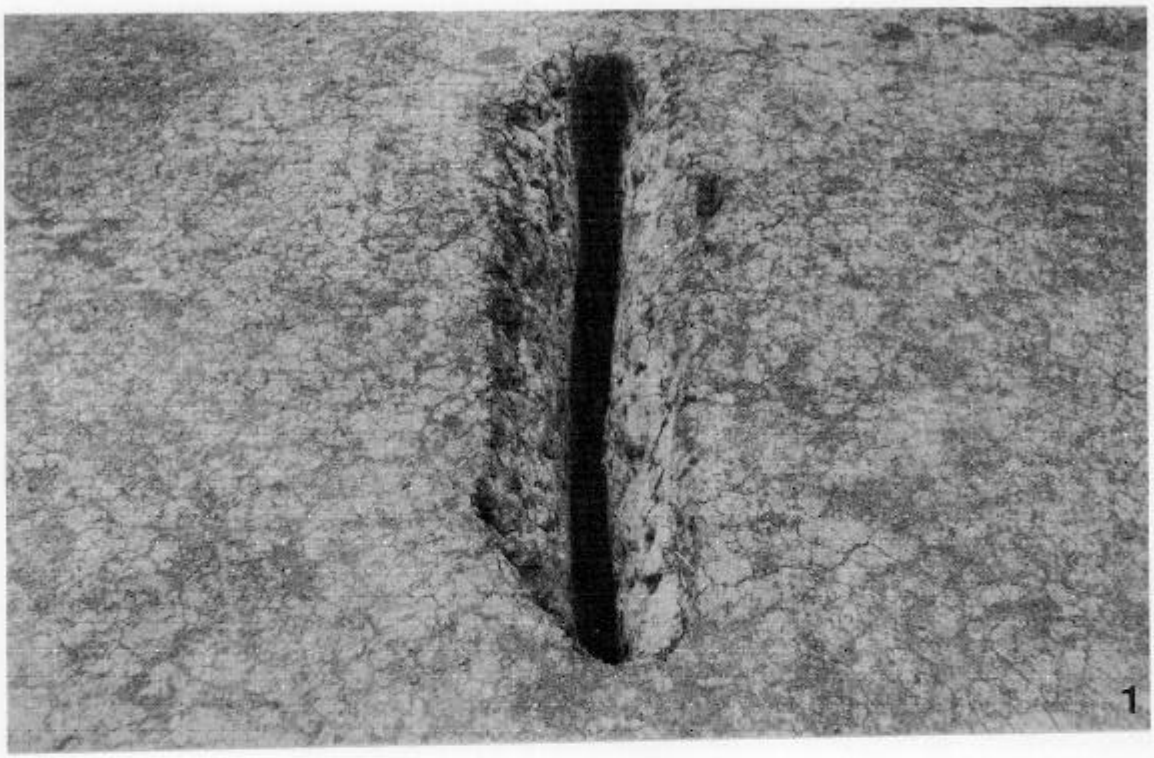


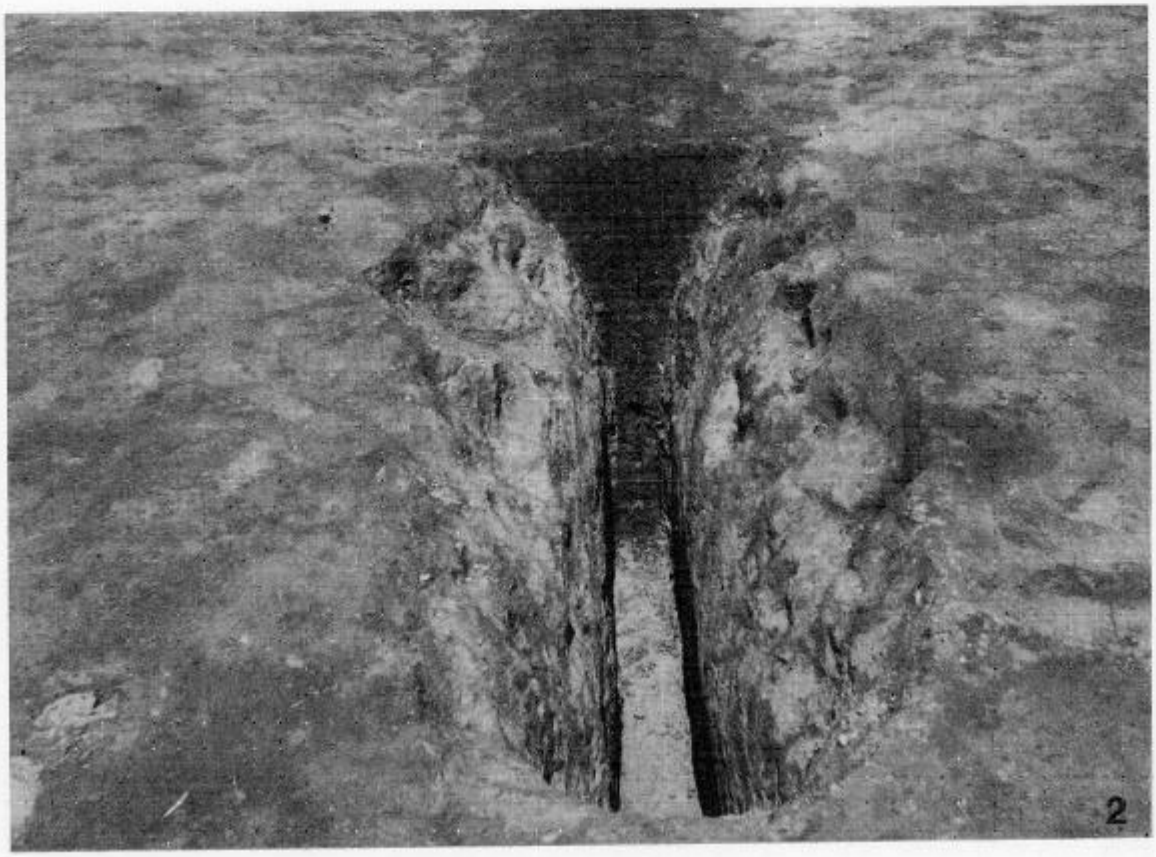
図版11　(1)S K09（西－東）　(2)S K10・13（西－東）



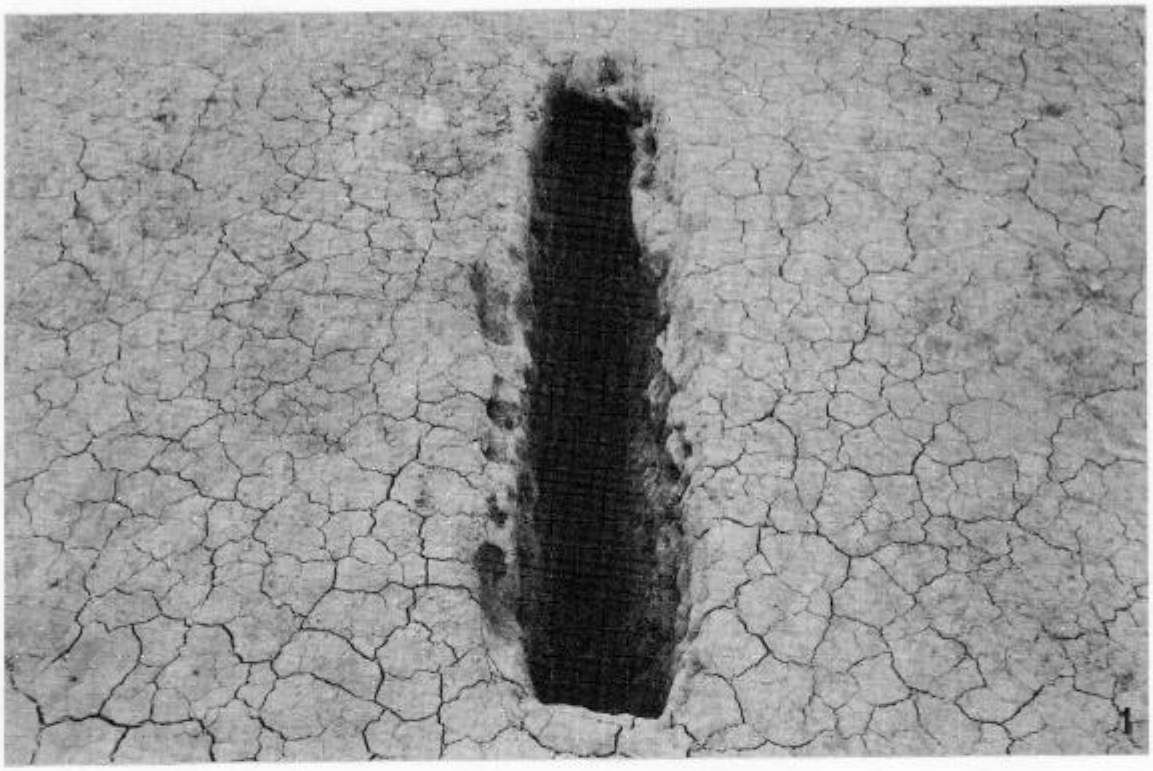


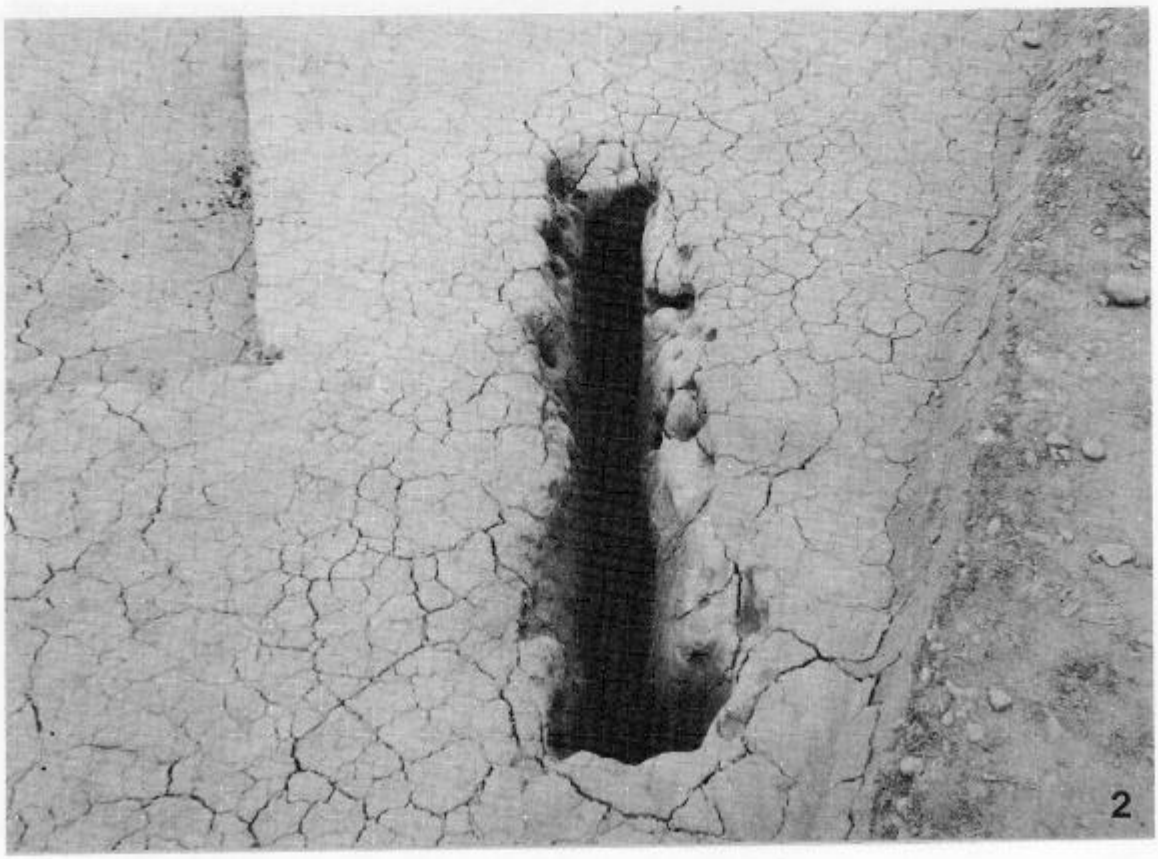
図版12　(1)ＳＫＴ02（南－北）　(2)ＳＫＴ02遺構断面



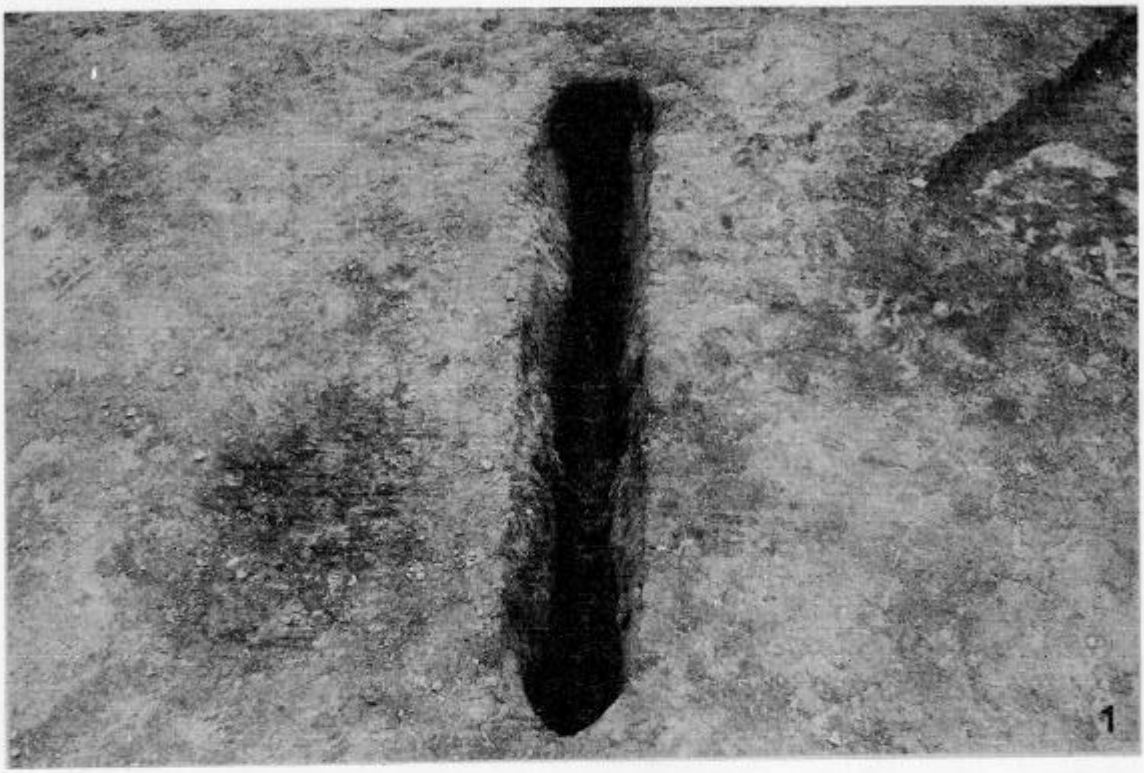


図版13 (1)ＳＫＴ03（北－南）　(2)ＳＫＴ03遺構断面

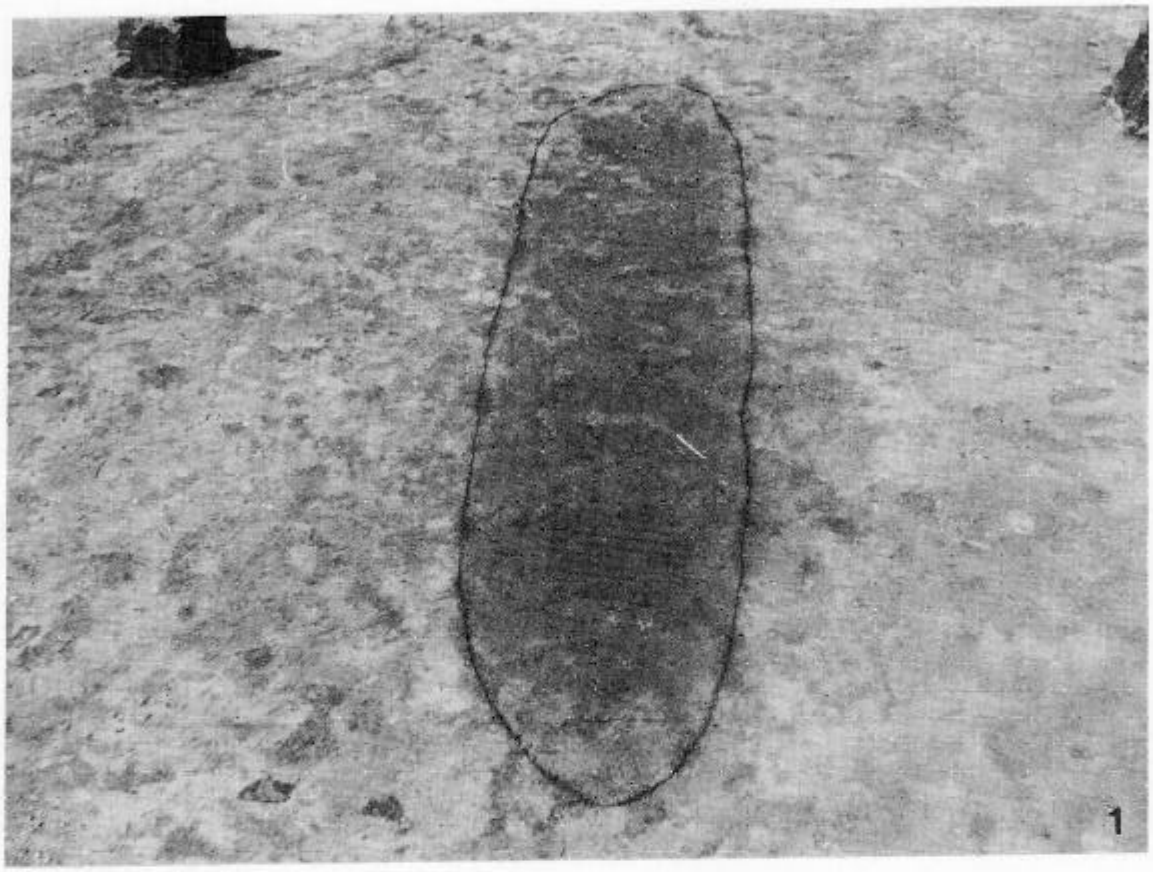


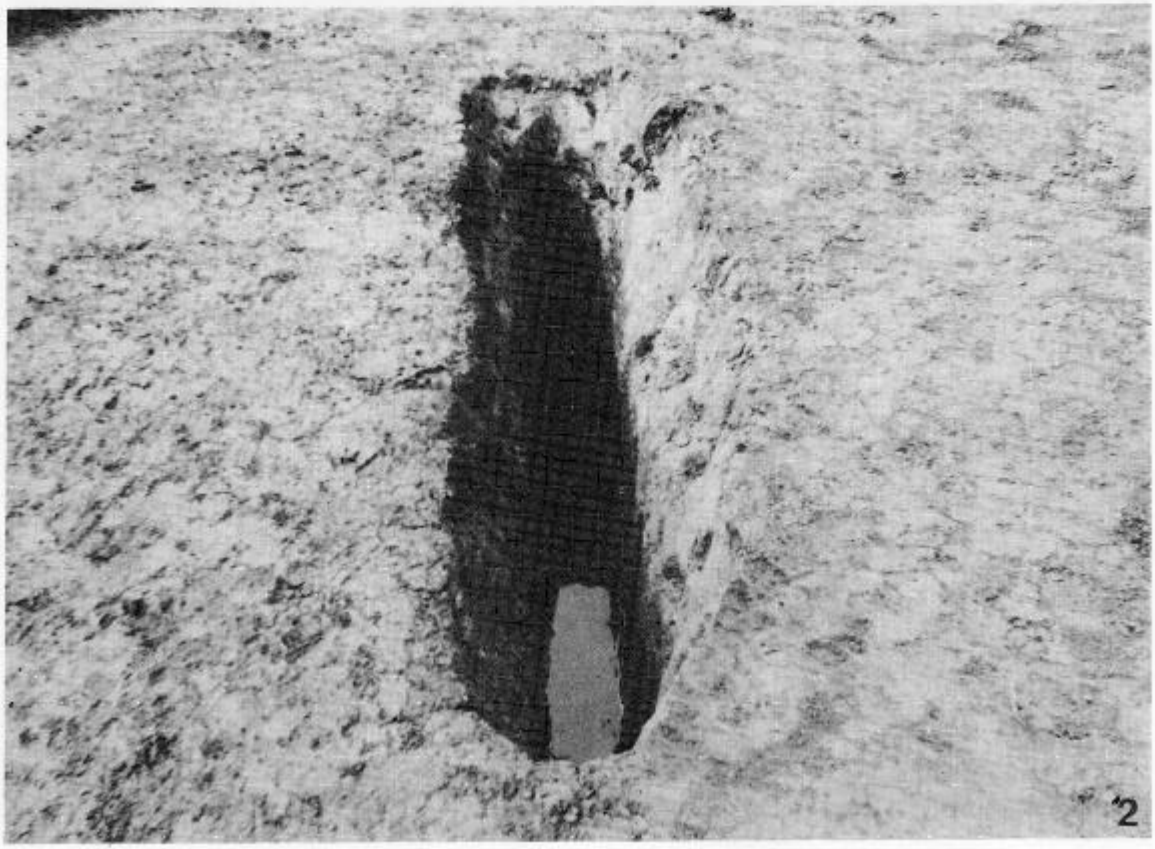


図版14 (1)ＳＫＴ04（北－南）　(2)ＳＫＴ05（西－東）

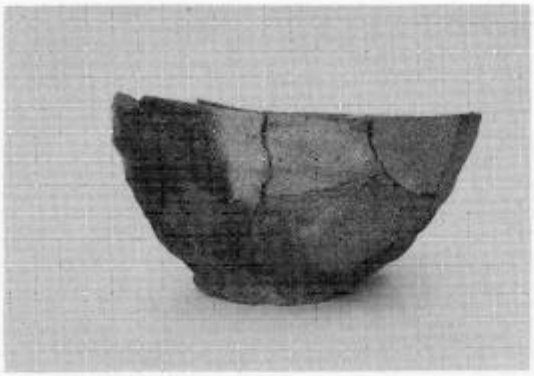
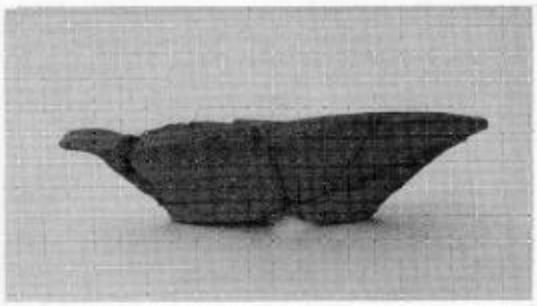
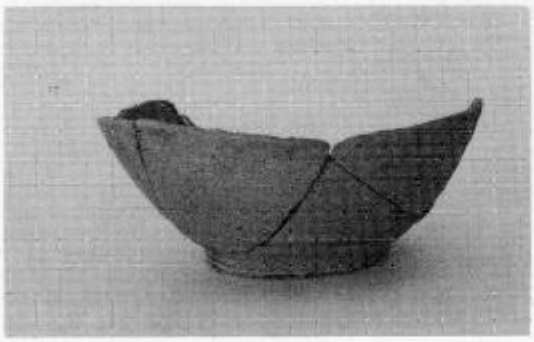
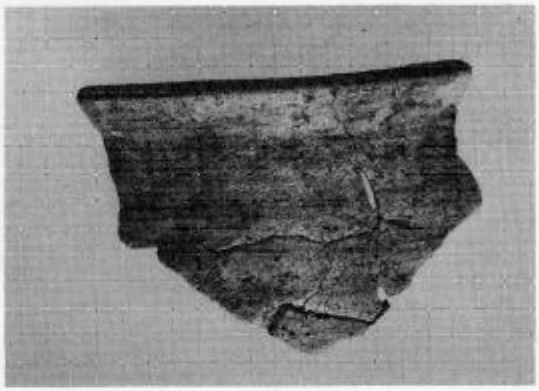


図版15 (1)ＳＫＴ08（北－南）　(2)ＳＫＴ09（北－南）

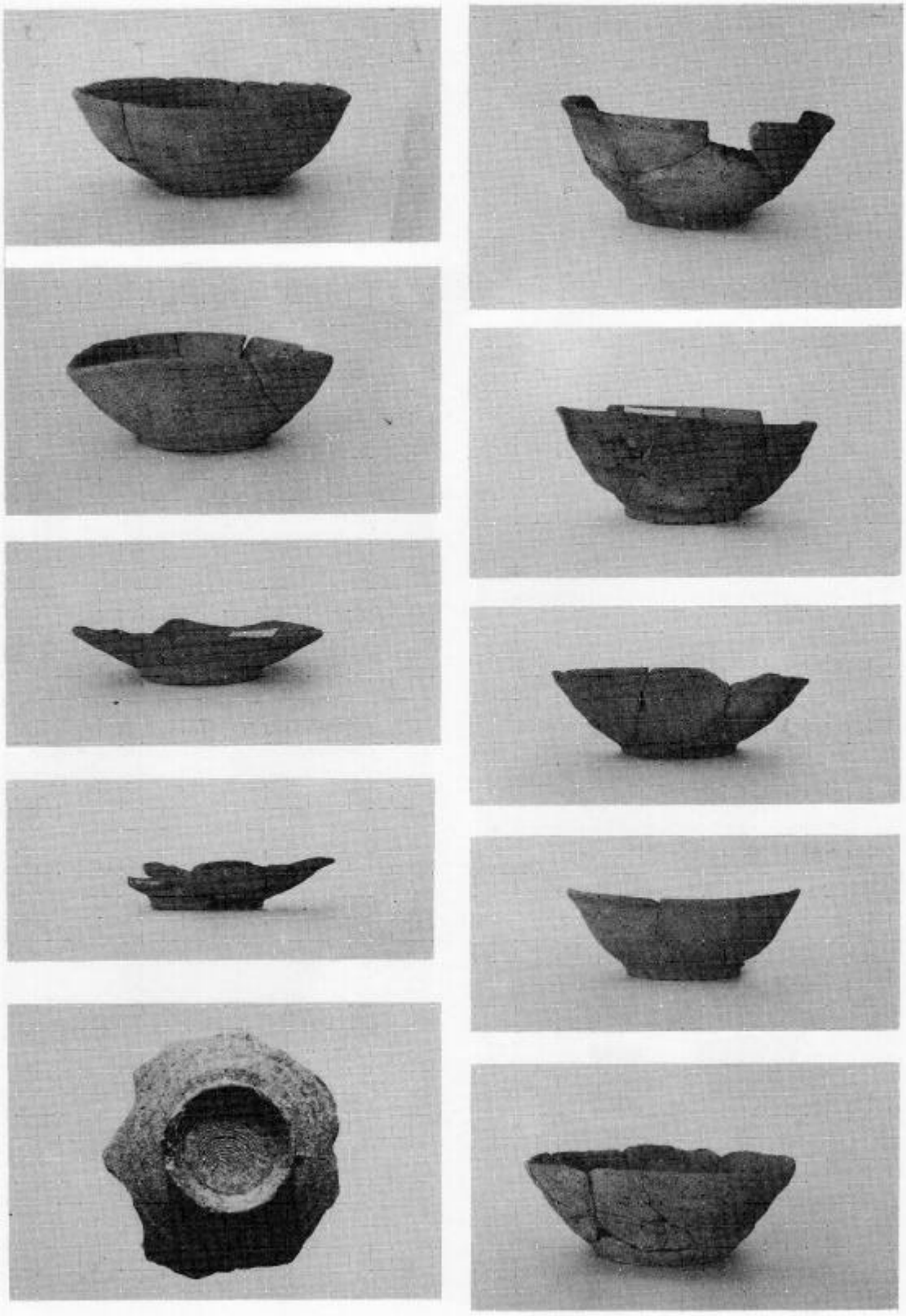




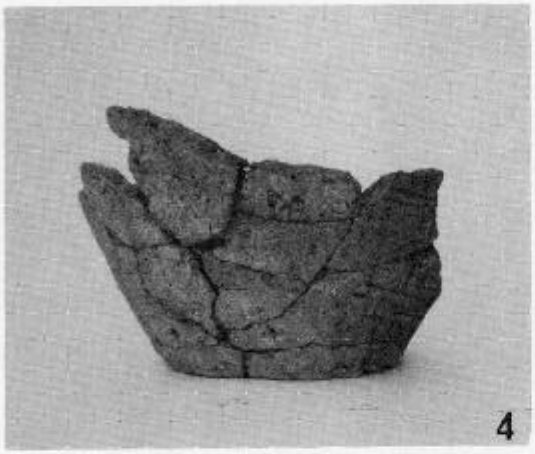
図版16 (1)(2) S K T 10（南－北）

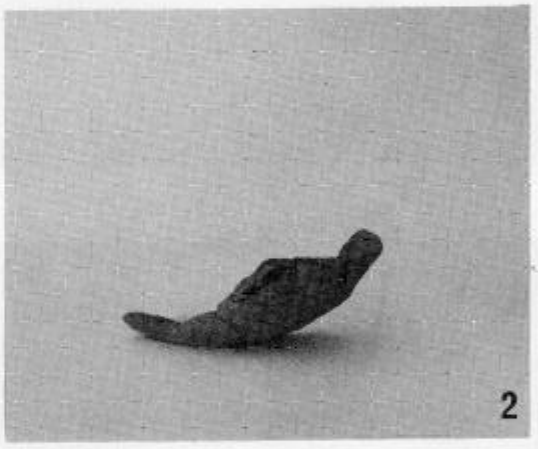





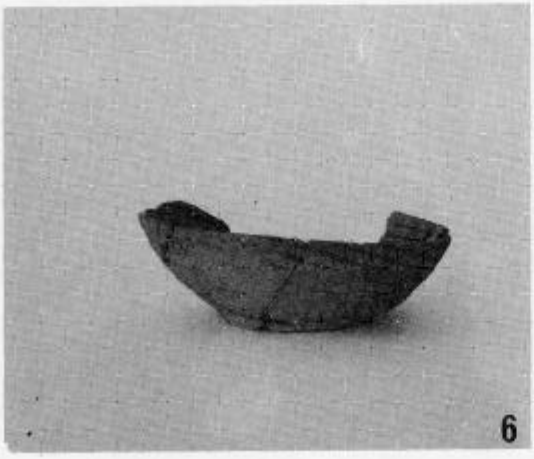
図版17　ＳＩ01出土遺物

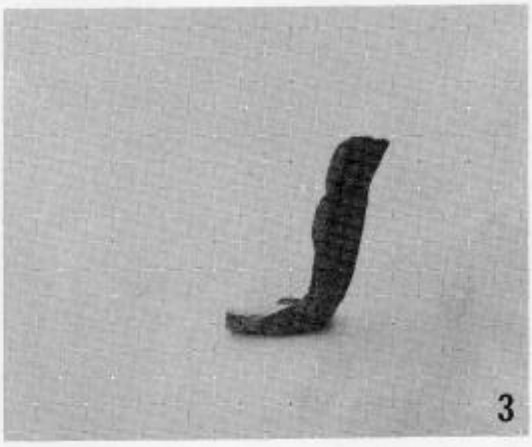


図版18　ＳＩ02出土遺物

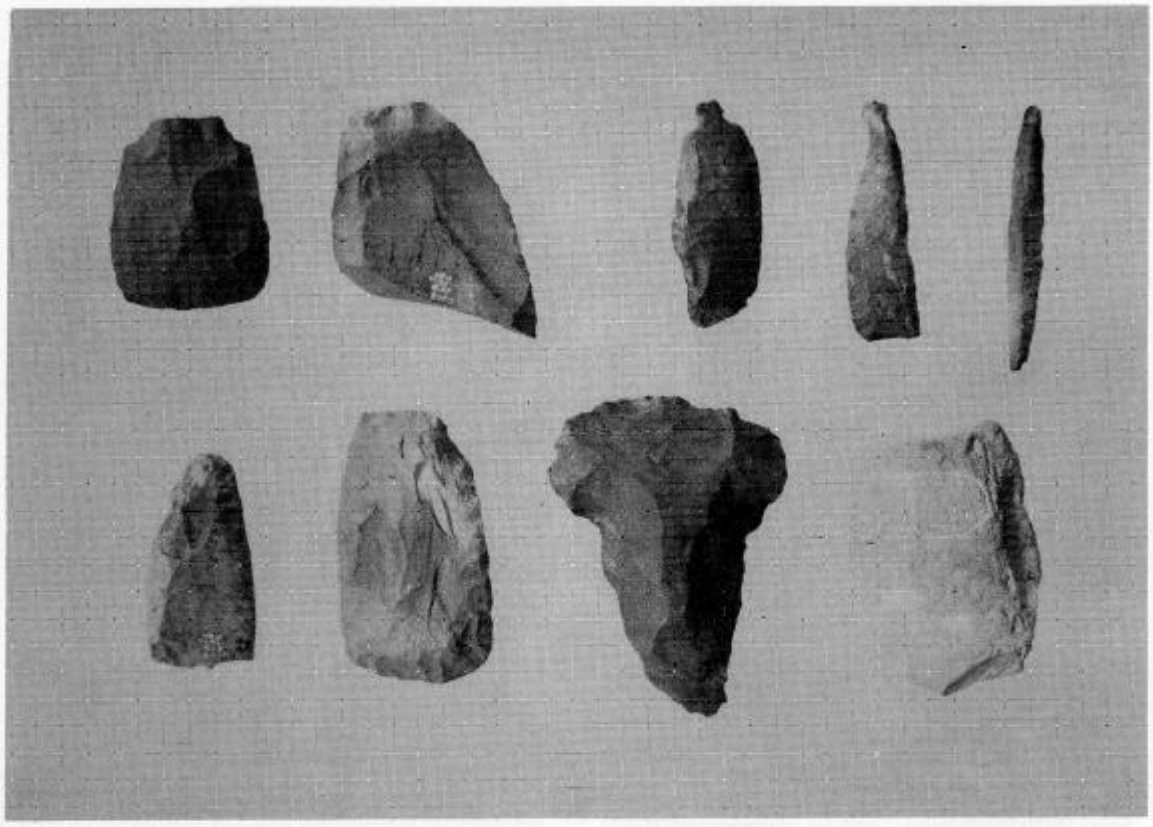


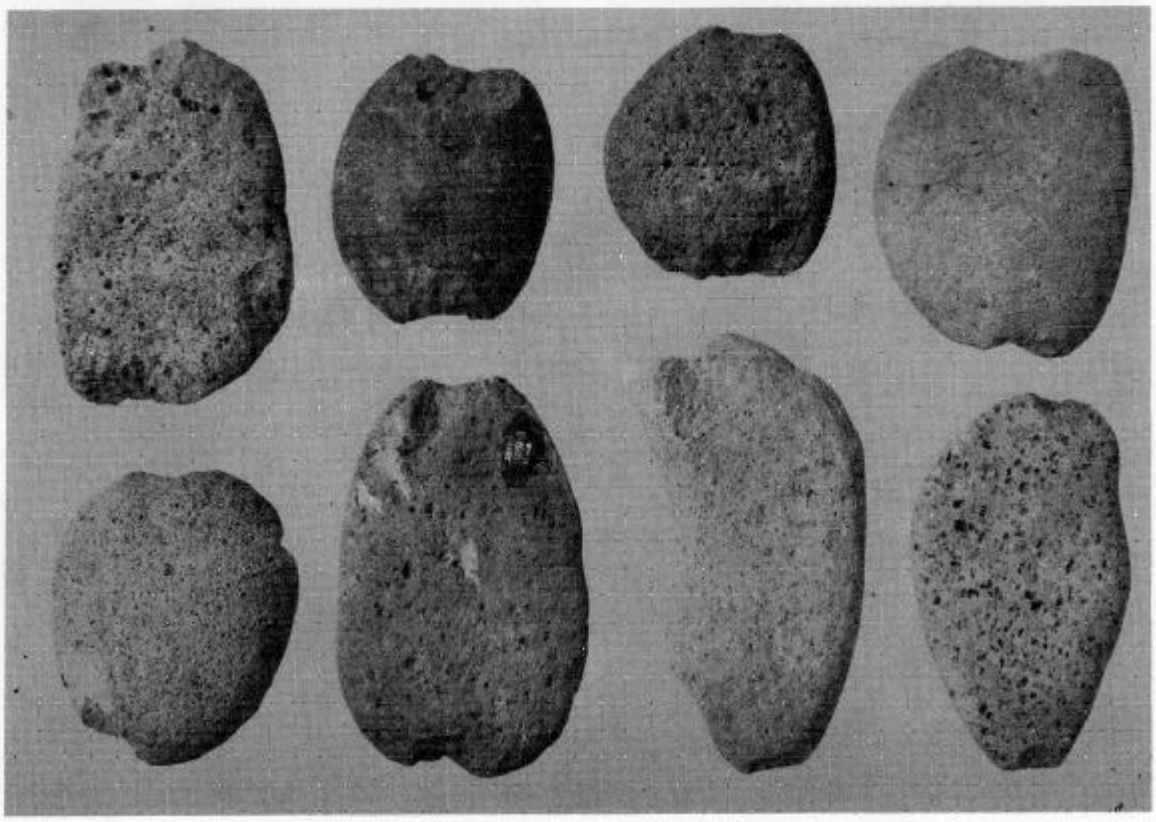






図版19　(1)～(5) S I 04出土遺物　(6) S K07出土遺物





図版20　遺構外の出土遺物

桐木田遺跡

第1章　はじめに

第1節　調査に至るまで

雄勝郡雄勝町に所在するいわゆる「桐木田井戸」は平安時代の歌人小野小町の使用した井戸跡と，古くから言い伝えられていた。昭和47年の山本博士の井戸跡鑑定でも，平安時代から見られる型式のものであるとされ，井戸跡の周囲に古代等の遺構の存在が予想されていた。しかし，この地域が昭和53年度より実施されている県営ほ場整備事業地域内にはいるため，秋田県教育委員会では昭和54年10月22日～11月1日，遺跡の性格及び範囲を確認する調査を行った。その結果，堀跡，柱穴などの遺構，中世末～江戸期に属する陶器，染付などの遺物が発見された。

遺跡周辺の水田は小さく入り組んでおり，周囲の用排水路との関連からも遺跡全面に対するほ場整備事業は不可欠のものであった。このため，秋田県教育委員会では，工事に先立ち発掘調査を実施し，記録保存をはかり，今後の資料に資するものとした。

なお，発掘調査は工事主体側との協議で遺跡の推定面積約8,000㎡に対して55,56年の2ヶ年にわたって行い，55年度はⅠ区2,900㎡だけとするという計画であったが，その後の状況の変化に伴い，55年度はⅡ区の一部（1,600㎡）も加え4,500㎡となった。そして，水路部分を除く，Ⅱ区の残り2,600㎡を56年度に発掘調査した。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名	桐木田遺跡
遺跡所在地	秋田県雄勝郡雄勝町小野字飯塚
調査期間	昭和55年度　7月28日～10月31日
	昭和56年度　4月13日～5月13日
調査対象面積	昭和55年度　4,500㎡
	昭和56年度　2,600㎡
調査面積	昭和55年度　4,500㎡
	昭和56年度　2,600㎡
調査主体	秋田県教育委員会
調査担当者	畠山憲司（秋田県教育庁文化課）

調査員　山田貞吉（55年度，平鹿町教育委員会）

調査補佐員　昭和55年度　佐藤和弘

昭和56年度　三嶋隆儀，栗沢光男，池田洋一

調査補助員　昭和55年度　三嶋隆儀，桑原隆

事務補助員　昭和55年度　佐々木恭子

昭和56年度　門脇澄子

調査協力機関　秋田県雄勝農林事務所土地改良課

雄勝町教育委員会

発掘調査参加者　昭和55年度

小野田久孝，藤原和則，今幸太郎，太田三郎，今修三，築瀬善清，今貞助築瀬清一，渡辺良市，今勝蔵，多田野庄蔵，竹内源次郎，柴田勝美，柴田進，樋口隆，小野田良子，小野田静子，佐々木葉子，藤原アチ，藤原ミネ子，藤原ミエ，藤原ミヤ，藤原雪子，小野垣キエ子，築瀬シズエ，小野垣リエ，小野垣トキ，渡辺イヨ，金ユウ子，菅原さだ子，高橋サツ，東海林ミサ，金子恵美

昭和56年度

小野田久孝，太田三郎，築瀬清一，柴田勝美，小島晴人，姉崎義一，小野田良子，小野田静子，藤原雪子，小野垣キエ，藤原アチ，渡辺友子，多田野優美子，築瀬瑶子，今ナミ子，太田登美子，井川哲，太田ヨシ子，今チヨ子

整理作業参加者　杉原啓子，佐藤真智子，石上尚子，松本淳子，松本千秋，小林弘，進藤滋茂木淳子，高橋美紀，越後谷晴美，武田美智子，藤井智子，池田リュウ子佐藤せい子，高山比奈子，小松睦子

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境（第１図）

横手盆地の最南端は雄物川の開析によってできた，東西1.5～2.0km，南北約10kmの細長い平地となっている。この平地の東と西にはそれぞれ奥羽山脈，出羽丘陵の300～800ｍの山地がせまり，その西裾を雄物川が北流し，東裾はかつての役内川の跡と言われる低地が走る。

桐木田遺跡は平地中央部に雄物川と役内川にはさまれてできた自然堤防上に立地する。現況は水田と一部畑地で，雄物川からは東１km，国鉄奥羽本線横堀駅の北東1.1kmの地点である。

第２節　歴史的環境

遺跡の所在する小野地区は，平安朝六歌仙の一人小野小町生誕の地の１つといわれ，これにまつわる多くの伝説が残っている。遺跡名ともなった桐木田井戸跡もその１つで，小町の庵の側にあり，小町が日常使用したものであるといわれ，地元有志により保存されている。そして昭和47年には井戸の研究者として知られる山本博氏に井戸の鑑定を依頼し，以下のような結果を得ている。(「雄勝町の歴史散歩より)。

井戸構造年代鑑定書

１．秋田県雄勝郡雄勝町小野所在，石井年代について，その創掘を次の通り鑑定する。

イ．自然石（凝灰岩），乱石積，円形井筒

ロ．口径50～55cm

ハ．口縁部より水面まで1.6ｍ

ニ．総深3.9ｍ

ホ．口縁部より約30～40cm下において，直径を増し，径70～80cmとなり，そのままで底部にいたる。

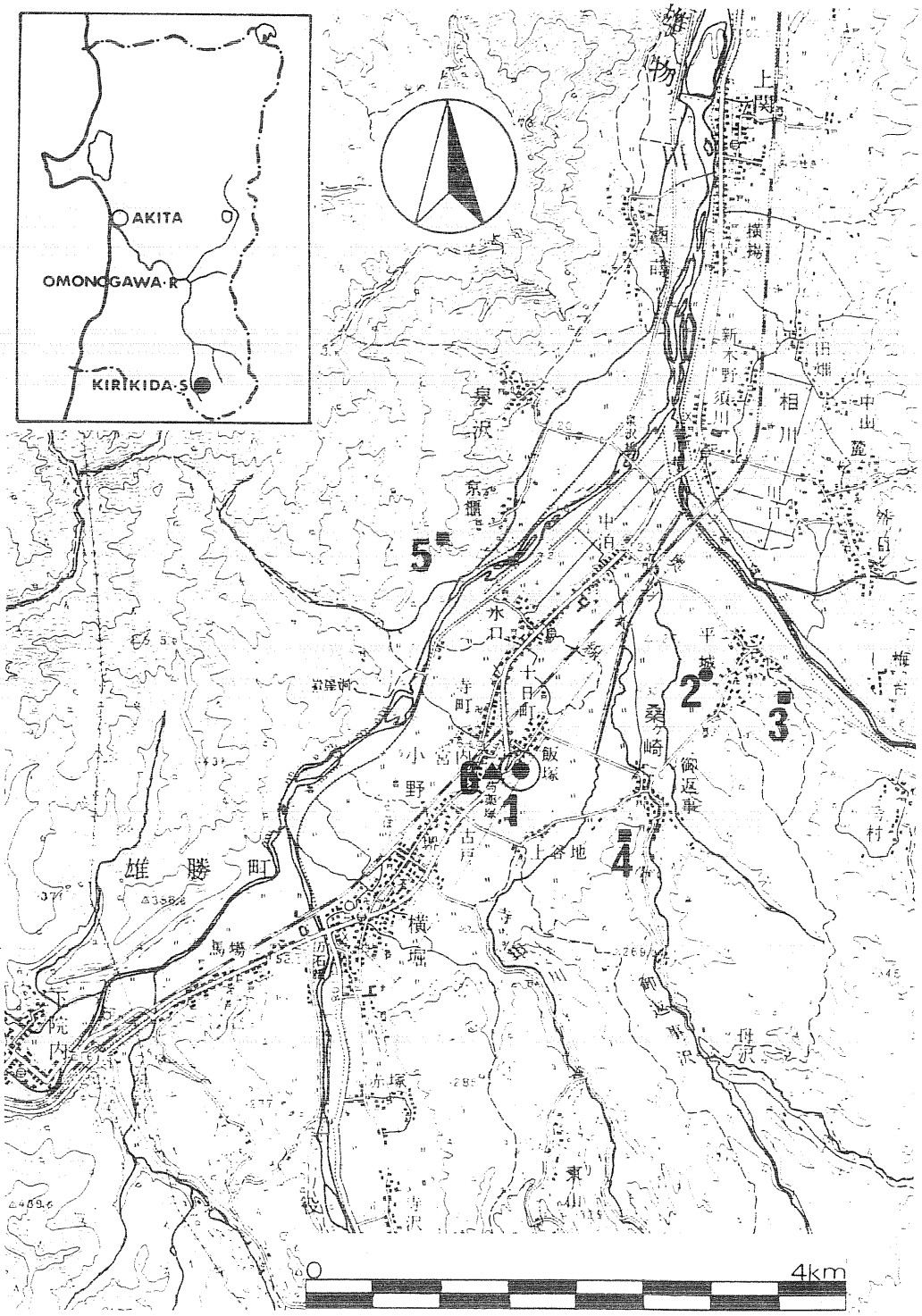
ヘ．井壁の石積みは創掘当時のままと認める。

２．右の井筒構造は平安初期より現われたもので，小野の石積み井筒もその一つに当るものであると認める。

右の通り鑑定する。

昭和47年８月28日

大阪学院大学教授


AKITA
OMONOGAWA·R
KIRIKIDA·S
1
2
3
4
5
6
雄勝町
泉沢
小野
横堀
飯塚
桑ノ崎
上谷地
0
4km

第１図　遺跡の位置

文学博士　山本　博
秋田県雄勝郡雄勝町小野遺跡　　保存会　御中

第３節　周辺遺跡

本遺跡の周辺に存在する遺跡のうち，中世に属すると思われるものは比較的多い。半径２km以内の城館では山城である小野城跡（１図５），御返事城跡（１図４），館跡（１図３）の他平城である鵜沼城跡（１図２）があり，役内川下流から奥羽山脈西麓沿いには多くの板碑群が存在する。

縄文時代の遺跡では，１図６の小野Ⅱ遺跡があり，縄文時代前期の遺物が採集されている。

しかし，近世に入ると調査例もほとんどなく，わずかに鵜沼城跡において，江戸時代前半のものと思われる掘立柱建物群や，井戸跡などが知られているにすぎない。

第３章　　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

明治時代初期の地籍図（図版19）を見ると，井戸跡の東方約50ｍに，長さ約50～60ｍで西に開くコの字形の堀跡らしきものがあるのがわかる。この堀跡はそのまま西に延びて遺跡全体を長方形に囲むようにも見えるが，中央部を南北に走る水路などによりかき消されている。遺跡はこの地籍図が作成された段階で概に水田であり，現在は水田と一部畑地となっている。

遺跡全体での高低差はほとんどないが，南西側がわずかに高く，中心部の標高は約136 ｍを測る。

遺跡の層序は，第１層黒褐色耕作土（15～20cm），第２層黒褐色土（10～15cm），第３層暗褐色土（10～20cm），第４層褐色地山土となる。このうち，遺物は２，３層中にあり，遺構の明確なプランは，地山直上でわかる。

遺物は総じて少なく，主に各遺構の覆土中から発見される物が多い。
これは後世の耕作等によるためと思われる。

遺構の分布は大きく見て２つに分けられる。１つは一辺50～60ｍの略方形の堀に囲まれたその中央部にある柱穴群，他の１つはこの堀が埋まった後のものと考えられる柱穴群で，これは堀の西辺を中心とする地域のものである。この２つの他に方形，長方形の竪穴群があるが，これらが堀の存在した時期とどのように係わるのかは明確にし得なかった。

第２節　調査の方法

発掘にあたり，４ｍ×４ｍグリッドによる調査方法をとることとし，座標軸にあたる東西の基線は２桁の数字，南北の基線はアルファベット２文字の組み合わせを用いた。すなわち，東西の場合，西に４ｍ行くごとに数字が１つずつ増す。（……38，39，40，41……）。南北の場合は南から北に４ｍ行くごとにアルファベット２文字のうち１桁目の文字がＡ～Ｈまで変わり，（……ＭＡ，ＭＢ，ＭＣ，ＭＧ，ＭＨ，……），32ｍ行くと２桁目の文字が変わる（……ＭＧ，ＭＨ，ＮＡ，ＮＢ，……ＮＨ，ＯＡ……）。

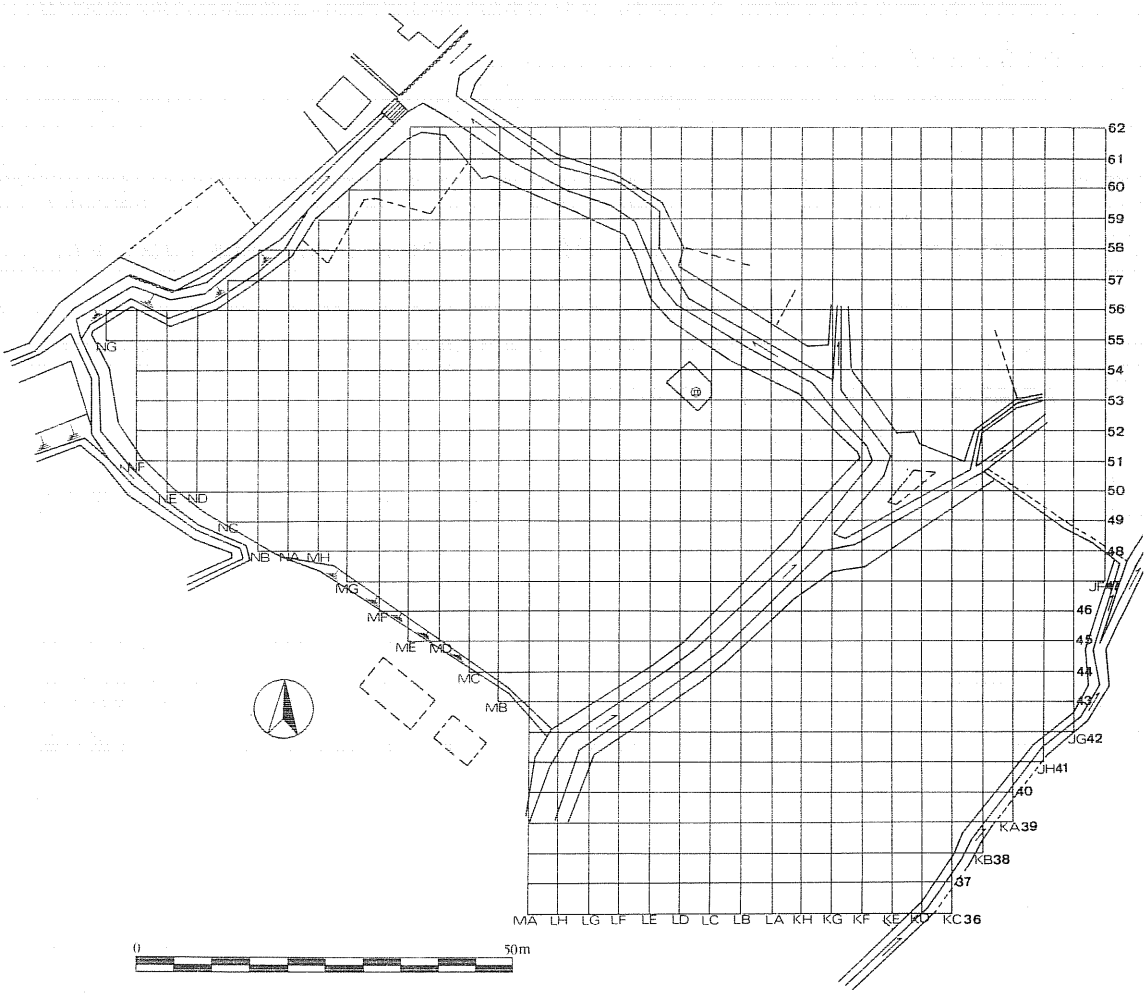
Ｉ区ほぼ中央部に任意の基準杭を打ち，これをＭＡ50とし，東西，南北の基線はこの点で磁北を求め，これに従った。それぞれのグリッドの名称は４ｍ×４ｍグリッドの南東隅の交点座標名をそのまま使用した（ＭＢ51，ＬＧ45……）。（第２図）

第３節　調査経過

調査区は南東一北西に長い略長方形を呈し，この中央東寄りを幅約３ｍの水路が流れており，調査年次等の関係からもこの水路の東側をＩ区，西側をII区として調査を行った。また，発掘調査は第１章第１節で述べたようなことで，２ヶ年にわたるものとなった。

Ｉ区の発掘調査は，昭和55年７月28日から９月22日まで実施した。

調査区はあらかじめ重機で表土を除去していたが，柱穴等の遺構が明確でないため，結局は地山直上まで全面を掘り下げることにした。７月30日，調査区中央部で方3.5ｍ前後の竪穴状落ち込み，また東部で幅４ｍの堀を検出，堀（ＳＤ16）はほぼ直線で，北北東－南南西の方向で



第２図　グリッド配置図

続いている。8月1日，調査区北部でＳＫ01，02の土壙を検出。これらの土壙は，不定円形～楕円形を呈し，埋土中に拳大～半人頭大の河原石を多く含んでいたが，それほどまとまりのないものであった。2日からＳＸ03，06，ＳＫ07～09等の遺構を検出。ＳＸ03，06は集石遺構であった。4日ごろから調査区西部を中心にして径30cm前後の柱穴が現われ始めたが，これらは切り合いが激しい上に，東側ほどプランの確認が困難な状況にあった。

8月8日までに，ＳＤ16の北辺及び東辺を検出。ＳＤ16は北東部で直角に曲がっており，東辺は50m以上続くことがわかった。また，調査区南部では，幅約2mの溝（ＳＤ15）がＳＤ16の東辺に直交するようにあり，ＳＤ16の手前約8mで北に直角に折れ曲っていることも判明した。このＳＤ15は断面の精査等で新旧2時期あることもわかった。19日からＳＤ15，16や柱穴土壙等の覆土除去作業を開始。その結果，ＳＤ16東辺のほぼ中央部に上面幅約3.5mの土橋が存在することがわかった。

8月29日から残っている調査区南側の表土剥ぎ及び遺構の検出を行ない，ＳＤ16が，調査区東北隅屈折部から約60m南南西で，西北西に直角に曲がることを確かめた。

9月に入り，柱穴の掘り上げ，堀，溝等の断面の実測，写真撮影を行なったが，作業の途中で，雄勝農林事務所から，9月いっぱいの調査を10月まで伸ばし，水路の西側（Ⅱ区）をも，1,600㎡ほど調査してほしい旨の衣頼があり，協議の結果，原因者負担分のみでこれを行うことになった。このため，9月10日からはⅡ区の遺構検出も併行して行うこととし，Ⅰ区の実測と写真撮影を完全に終了したのは9月20日であった。

Ⅱ区も第1，2層は重機によって除去したが，第3層の暗褐色土には予想以上に鉄分が含まれており，これがため遺構の検出ははかどらず，結局，第4層地山直上まで全面を表わすこととした。

Ⅰ区の精査等と併行しながら10月1日までにⅡ区の東側約1,600㎡について地山直上まで表わした。その結果，Ⅰ区で発見した堀跡（ＳＤ15）は全体の形としては矩形ではなく，北辺が長く，南辺が短い略台形を呈することがわかった。そして，西辺にはやはりその中央に東辺が同じ土橋があるが，これは東辺のそれとは異なり，やや外側に張り出している。また，Ⅰ区の堀の内側にある溝跡（ＳＤ15）はⅡ区にも続いており，やはり堀の内側で，北辺までには達しておらず，全体としては，北に開くコの字形を呈していることもわかった。

柱穴はⅡ区の東端でⅠ区の柱穴群に連続すると思われるようなものも発見されたが，これとはやや間をおいて，堀の西辺あたりを中心とするような柱穴群が発見された。これらの柱穴群は精査すればする程その数を増し，切り合いも激しく，その後の現場作業を大いに繁雑なものにせしめた。

このようにしながらも，ＳＢ100，ＳＢ154，ＳＢ303，等の建物跡を確認しつつ，堀跡の断面

LH60
LE58
LB55
KG53
MC61
MF61
MH59
NC57
NE56
NG56
NH54
NG52
NE50
NB48
MG46
MD44
MA42
LG41
LD44
LA47
KE51
KB51
JG49
JE48
JF46
JG44
KA40
KC38
KD36
KG34
LA36
LC38
LE40
SD 140
SD 141
SD 142
SD 111
SD 300
SD 301
SD 16
SD 15
SD 17
SD 18
SD 134
SD 135
SK 118
SK 143
SK 148
SK 147
SK 139
SK 146
SK 116
SK 101
SK 112
SK 114
SK 110
SI 108
SK 107
SK 136
SK 137
SK 144
SK 149
SK 154
SK 157
SK 156
SK 155
SK 158
SK 128
SK 127
SK 124
SK 233
SK 241
SK 242
SK 211
SK 234
SK 243
SK 246
SK 237
SK 208
SK 209
SK 206
SK 202
SK 227
SK 228
SK 225
SK 230
SK 231
SK 232
SK 329
SK 328
SK 322
SK 321
SK 320
SK 324
SK 325
SK 326
SK 327
SB 310
SB 302
SB 303
SB 304
SB 305
SB 100
SK 06
SK 02
SK 01
SK 09
SK 03
SK 13
SK 24
SK 12
SK 23
SI 20
SI 11
SI 10
SA 314
SA 315
SB 311
0
16m

第 3 図　発見遺構全体図

図，各遺構の平面図などの精査の済んだ遺構の実測を10月29日までに行ない，その後，レベルの確認を同30日までに終えて，同31日，プレハブをそのままにし，次春の調査計画を胸に一まず遺跡を離れた。

昭和56年度の調査は工事の日程等の都合で，周囲の雪解を待たずして，４月13日から開始した。一冬越しに遺跡は，精査の済んでいない遺構などにその侘しさをたたえていた。

４月21日までにII区の残り，2,600m²の遺構検出に努める。その結果，ＳＤ140堀跡の西側部分には数回にわたって切り合いの見られる矩形の土壙や，小さな柱穴が密集しているが，II区の西部には遺構がまばらで，西端部にＳＤ300，301とした堀跡様の遺構のあることがわかった。４月15日，II区中央東寄りにＳＩ203，204，205とした重複する竪穴住居跡様の遺構を発見。精査したところ縄文時代の竪穴住居跡のように粘土で貼床をしたカマドを持たない方形の竪穴住居跡であることを確認した。ＳＩ203の埋土中から珠洲系擂鉢の破片が出土しており，中世後半の竪穴住居跡と考えられた。

調査期間があらかじめ５月13日までと決っていたため，この間，かなりの強雨でも実測等の作業は休まずに行なった。５月11日までに全ての遺構の掘り下げと実測，写真撮影を終えたが遺構の精査，掘立柱建物跡の発見等についてはとても満足のいくものとはなり得なかった。５月13日プレハブの解体，機械の積み込み等を行ない、緊急発掘調査の中味と，遺跡への責任という課題を抱えつつ，美田と化するであろう遺跡を後にした。

第４章　　調査の記録

２ヶ年にわたる桐木田遺跡発掘調査で発見した遺構は全て中世中半から近世初期のものである遺物は前述の時期の他に縄文時代のものが若干出土している。

発見された遺構は堀跡３条，土橋２基，溝跡11条，掘立柱建物跡12棟，竪穴住居跡９軒，方形竪穴状遺構32基，長方形竪穴状遺構33基，土壙16基，集石遺構５基，などである。これらの遺構はその構造，覆土中からの出土遺物などによって全て中世中半～近世初期の所産と考えられるものである。

本概報ではこのうち出土陶磁器についてのみ報告したい。

1．　中世中半から近世初期の出土陶磁器

1）　遺構内出土陶磁器

各遺構の埋土中，あるいは柱掘方から出土した陶磁器類を（図版20～36）に一括した。これらの遺物は柱掘方内のものを除いてほとんどがその埋土中からのもので，床面から出土したものはない。以下各遺構別に記述する。

ＳＤ16，140堀跡出土遺物（図版20～23の１～24）

堀跡出土遺物のうち，Ｉ区（ＳＤ16）から出土して図示したのは23，24だけである。７，９11，14，15，16，17，20，22は堀跡北辺埋土中，堀底面から約20cmの高さのところに黒灰色の灰の分布があり，そこから一括して出土した。

１，２，３，４，５は明白磁染付皿。特に１，２は明青花と言われるものであろう。純白の素地に鮮明な藍色の染付，淡い青味がかった透明感のある乳白色釉が底部を除いて全体を覆う高台は深いケズリ高台である。見込みには重ね焼きの痕が明瞭に残っている。３，４はややくすんだ素地に浅黄がかった透明感のない灰白色釉が全面にかけられている。高台は低い。３，４内面の染付文様は解網目文とでもいうようなもの。５は素地釉ともに１，２に似ているが，口縁部内側に暗文風の草花文が施されている。

６，７は明白磁染付碗

８はいわゆる青緑釉の小鉢か。外面は緑釉の下地に萌青色の釉がかかっており，内面は灰橙色を呈する。

９は初期伊万里碗である。

10～17は初期伊万里染付皿。いづれも低い高台で，畳付に砂の付着が見られるものもある。10，12は内面に藍色の釉の染付。13～17は淡い暗緑色がかった色の染付。口縁部下に波状の凹

凸が縦に並ぶ。

18は初期伊万里碗。畳付に砂の付着があり，底面に「大明年成」の文字が見える。

19は小型の壺であろう，備前か。肩部と短い口頸部を接合する際の粘土端が内面に波状となって残っている。外面の色調は赤褐色部分と暗青灰色部分とがよくバランスを保っている。

20は唐津系の浅鉢。第38図95とほぼ同じものである。二次的な火熱によるものか内面の一部がうす黒く焦げたようになっている。

21は唐津系の壺。外面と内面口頸部にはやわらかい感じのする乳黄色の釉が厚くかけられている。

22～24は片口鉢。唐津系のものであろうか。幅広の櫛歯工具によるおろし目がある。

ＳＤ111出土遺物（図版24の25）

明青磁鉢，外面の底部を除く部分と内面に乳灰色の釉がかかり，内外面ともに貫乳が主に縦方向に入っている。

ＳＤ300出土遺物（図版24の26）

青緑釉陶器。器形は碗であろうか。内面に緑釉を下地に青乳色の釉がかかっている。外面は淡い緑釉で青味は少ない。重ね焼きの痕が明瞭である。

ＳＢ100出土遺物（図版24の27，28）

27はＳＢ100掘立柱建物跡のＰ11埋土中から出土。明白磁染付碗。28はＰ１埋土中出土の片口鉢。内外面とも明灰橙色。胎土の中層とおろし目部分は橙色を呈する。櫛歯工具でのおろし目の１単位は８条か。全体に軟質で地元窯産のものであろうか。

ＳＩ203出土遺物（図版24の29）

珠洲系の片口鉢。口径は約31.5cm。胴部がやや丸味を帯びる器形になるものであろうか。口縁部内面が粘土紐貼付によって肥厚している。内面には櫛歯工具による１単位８～10条のおろし目がていねいに施されている。

ＳＩ11出土遺物（図版24の30，31，25の32～34）

30は内外面に鉄釉をかけた天目碗であろうか。31は初期伊万里瓶か。32は唐津系の皿で，内面の底面ではその下に２本の弧線を対面に描く。33は初期伊万里碗。34は明白磁染付皿と思われる。

ＳＫ125出土遺物（図版25の35）

産地不明。瓶か長頸壺か。外面には細かく流れるような鉄釉，内面には黒っぽい朱と思われる付着物がある。内面に成形痕が残っている。それによると底部を造った後に幅１～３cmの粘土紐を巻き上げ，指頭でおさえ，ロクロ回転による調整を行っているが，胴部上半には指頭痕が明瞭に残っている。

ＳＫ157出土遺物（図版25の36）

越前と思われる中型甕。口縁から肩部にかけ灰釉が流下している。胎土は暗青灰色のいわゆる須恵器色。内面は赤褐色を呈するが，多分外面の胴中央以下も同様の色調と思われる。

ＳＸ211出土遺物（図版26の37）

珠洲系片口鉢の胴部下半破片。頸部で若干薄くなる器形と思われ，胴部でわずかに厚くなる部分から櫛歯工具による１単位12条以上のおろし目が施されている。

ＳＫ154出土遺物（図版26の38）

珠洲系片口鉢の胴部下半破片。１単位７条以上のおろし目が施されている。

ＳＫ06出土遺物（図版26の39・41）

39は唐津系の壺か瓶の破片。内外面には光沢のない暗褐色釉がかけられ，外面には灰釉の流下がある。41は唐津系の皿。

ＳＫ09出土遺物（図版26の40・42，図版27の35）

40は唐津系の皿。明赤橙色の素地にオリーブがかった灰色の釉がかけられている。削出高台のカブトが明瞭に残っている。42は33図54と同じ形態の明白磁染付皿。43は片口鉢。唐津系のものであろうか。底面，内面は赤褐色，外面は暗青灰色を呈する。内面の特に底面はおろし目がすりへってツルツルしており使用の激しかったことを示している。底部は回転糸切離し，かたくて，よくしまり焼成良好。

ＳＫ112出土遺物（図版27の44）

片口鉢。地元窯産であろうか。外面は浅黄橙色，内面はにぶい橙色を呈し，軟質。胎土に石英等の砂粒を多く含む。おろし目は１単位８条の櫛歯工具による。28，46などと同類である。

ＳＸ160出土遺物（図版27の45・46）

45，46は片口鉢。45は唐津系のものであろうか。46は地元窯の産か。丸味を持つ口縁部直下からおろし目が施されている。

ＳＫ101出土遺物（図版27の47）

地元窯のものであろうか。大甕の胴部破片，内外面ともににぶい橙色。胎土中央部は火熱がとどかなかったか青灰色を呈する。外面は粗いヘラケズリの後植物性繊維束のようなものでナデている。やや軟質。

ＳＫ110出土遺物（図版28の48）

越前であろうか。甕の底部。内外面ともにぶい赤褐色で，胎土は暗青灰色。外面胴部下半はヘラ状工具でていねいにおさえられている。内面底部ではいわゆる灰かぶりの状況が見られる全体にかたく，よくしまっている。

ＳＫ118出土遺物（図版36の49）

唐津系の高杯であろうか。外面はにぶく，黒い。鉄釉か。杯部内面にはやわらかい感じの乳白色釉がかけられている。

2）　その他の遺構外出土陶磁器

遺構外出土の陶磁器の破片が大部分で，以下に掲げるもの以外はほとんどが，細破片である。

青磁（図版29の50，31の68）

68は明の青磁かと思われるオロシ皿。皿底面に櫛歯状工具を斜に刺しオロシ目としている。オロシ目は数列が同一方向からつき刺されて並び，隣りにはそれが逆方向から施されている。

50は内外面とも透明感のある淡緑青色の釉。内面底に暗文風の文様がある。碗になるのであろうか。

天目（図版29の51，52）

内外面ともに黒い天目釉。51は碗，52は瓶の口縁部であろうか。

青緑釉（図版29の53）

碗か。内外面とも灰白色釉の下地に，外面は全面，内面は口縁部にのみ緑味の強い青緑釉がかけられている。

南方系染付（図版29の54）

皿。内外面ともにやわらかい乳白色釉。内面には焦げ茶色の染付が施され，外面頸下は縦に凹凸になっている。

明白磁染付（図版29の55～58，30の59～63）

55～61は皿であろう。62，63は碗か。55，56，57はあまり透明感のない浅黄がかった灰白色釉が全面にかけられている。内面胴部にはくすんだ灰緑色で，波状文的な解綱目文，底面には草花文を描く。

58～61は染皿の絵柄が前者とほぼ同じ。下地になる釉がやや青味のある乳白色釉。内外面ともに部分的に淡紅色の部分があり，畳付にわずかに砂が付着している。

62，63は底部のみの破片。胎土，釉などは図版20の１，２に同じ，高台はケズリ高台であるが，皿に比べ非常に高い。

黄瀬戸（輪花皿）（図版30～64）

底部を除いて淡黄緑色の灰釉がやわらかくかけられている。内面の胴部立ち上がり部に輪花様のケズリが施されている。

瀬戸系灰釉陶器（図版30の65，66）

65は碗か。66は皿。65は外面と内面のわずか，66は内外面ともに光沢のある灰釉がかけられている。両者とも細かい貫乳が入っている。

志野灰釉皿（図版30～67）

内外面ともにあまり光沢のない灰釉がかけられている。

唐津系陶器（図版31の69～74）（図版32の75～80）（図版33の95，97）

69，70，71，73，76，77，78，79，80は皿。低いケズリ高台からやや内向気味に立ち上がり口縁部で「く」の字形に開き口唇部で丸くおさめられ，口縁内側に一条の沈線をめぐらす器形の皿である。ケズリ高台部分にはいわゆるカブトやチリメン肌がよく残っている。見込み部には重ね焼き道具痕が77のように円形に残るものと，69，70，71，76，78のように３～４つの点となって残るものとがある。内外面にかけられた釉は71，77，79，80が淡緑色，69，70，73，89が灰白色，76が乳白色である。76は高台内面までも釉がかかっている。79，80はおろし皿。おろし目はヘラ状工具の先端を斜位して施したものである。

75は碗。内外面に青味がかった乳白色釉がかけられている。74，76ともに磁器であるかもしれない。

72，74は小鉢のようなものか，74の釉は75に酷似している。

95は大型の高台付浅鉢。内面には乳白色釉で波状文が描かれている。これは幅約５cmの櫛歯状を呈した工具を胴部と底面にそれぞれ一周させたものである。

97は壺か瓶になるものであろう。内面にはアテ道具痕がよく残っている。アテ道具は約3.5×2.5cmで外面に円形のイボイボ状の凸起が，６～８個で３～４段ついたもののようである。このため胴部内側は平坦面が横に全体として円形を描くように連続している。胴部外面は刷毛状工具による調整が行われている。

初期伊万里（図版33の81～86，図版34の87～94）

81はいわゆる伊万里青磁と呼ばれる碗。外面には青味がかった淡緑釉が，口唇部のみ茶色の釉がかけられている。内面には花蝶の染付がある。花は２対の蘭であろうか。高台内の文字は「福」であろうか。

82は図版21の10と全く同じ皿である。

84～92までは碗。90，91は胴部から口唇部に直向する。

93，94は徳利であろう。

珠洲系陶器（図版36の98～107）

107を除いて片口鉢である。

98は口径31cmで直向気味の胴部から口縁部でわずかに内向し，口唇部は光っている。おろし目は口唇部から5.5cm下でわずか１条だけ見える。99は丸味を持つ厚味のある胴部から口唇部が丸くおさめられている。櫛歯工具による１単位５～６条のおろし目が口縁部から施されている。100，101は薄手の器体で口縁部に特徴がある。103のおろし目は１単位が12条・105は10条，それ

ぞれ櫛歯工具で施されており，105のそれは条が深く，抉り取っていると言った方がいいような部分もある。106は図版27の44，46と同じ系統のもの。

107は小型壺であろうか。底部は静止糸切離しである。

第5章　まとめ

雄勝町桐木田遺跡の昭和55，56年，２ヶ年に渡る発掘調査の結果についてはこれまで述べて来たとおりである。検出遺構やその数，出土遺物量は予備調査（範囲確認調査—昭和54年実施）から予想された遺跡の内容とは大きく異なる内容であった。以下，今回の発掘調査結果についてまとめてみたい。

1）　出土陶磁器について

出土した遺物は縄文時代の土器を除けばいづれも中世～近世初期のもので，古代のものは一点もない。中世～近世の陶磁器は大きく分けて３期に分けられよう。①珠州系片口鉢を中心とする13世紀末～14世紀初のもの（注１）。②明青磁，黄瀬戸などを中心とする15世紀～16世紀中半のもの。③明染付，唐津系，初期伊万里を中心とする16世紀後半～17世紀のもの。

なお，上記の時期以外に江戸時代半ば以降の陶磁器も遺物中に含まれているようである。

2）　各遺構の年代について

遺物の出土状況の項でも述べたように，その遺構の時期を決定的にできるような形での資料は得られなかった。その中でも，いくつかの遺構についてはわずかに手懸りを得ることができたので略述する。

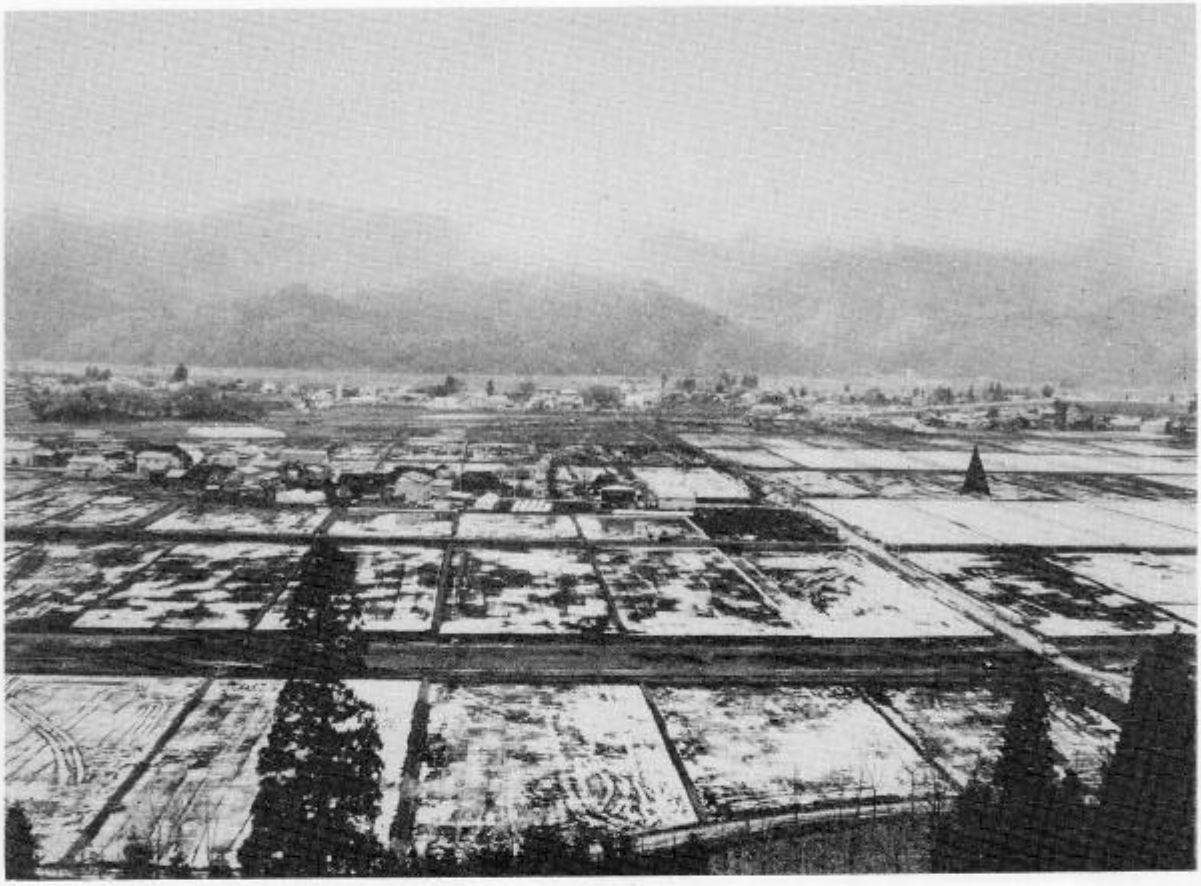
ＳＩ203竪穴住居跡埋土中出土の珠州系片口鉢は，その器形，おろし目などからして13世紀末～14世紀初めのものであろうと思われる（注２）。またＳＫ157方形竪穴状遺構の壙底近くの埋土中から出土した越前と思われるものも14世紀～15世紀の年代を与え得よう。ＳＢ100掘立柱建物跡柱掘方内から出土した明白磁染付碗と地元窯の産かと思われる片口鉢は16世紀のものであろうと思われる。

室町時代前後かと思われる竪穴住居跡などは明確な入口部としての掘り込みもなく，焼土それ自体も単にワラなどを焼いたという程度のものであるが，縄文時代の竪穴住居跡のようなていねいな貼床をして構築されているものもある（注３）。また方形竪穴状遺構や長方形竪穴状遺構の中にはワラ灰のような黒い灰が底面あるいは埋土途中に見られた。これらの遺構の具体的な機能については不明である。

注１：吉岡康暢　「加賀・珠州」『世界陶磁全集』３　１９７７　小学館　の珠州陶片口鉢の分類をもとにした。

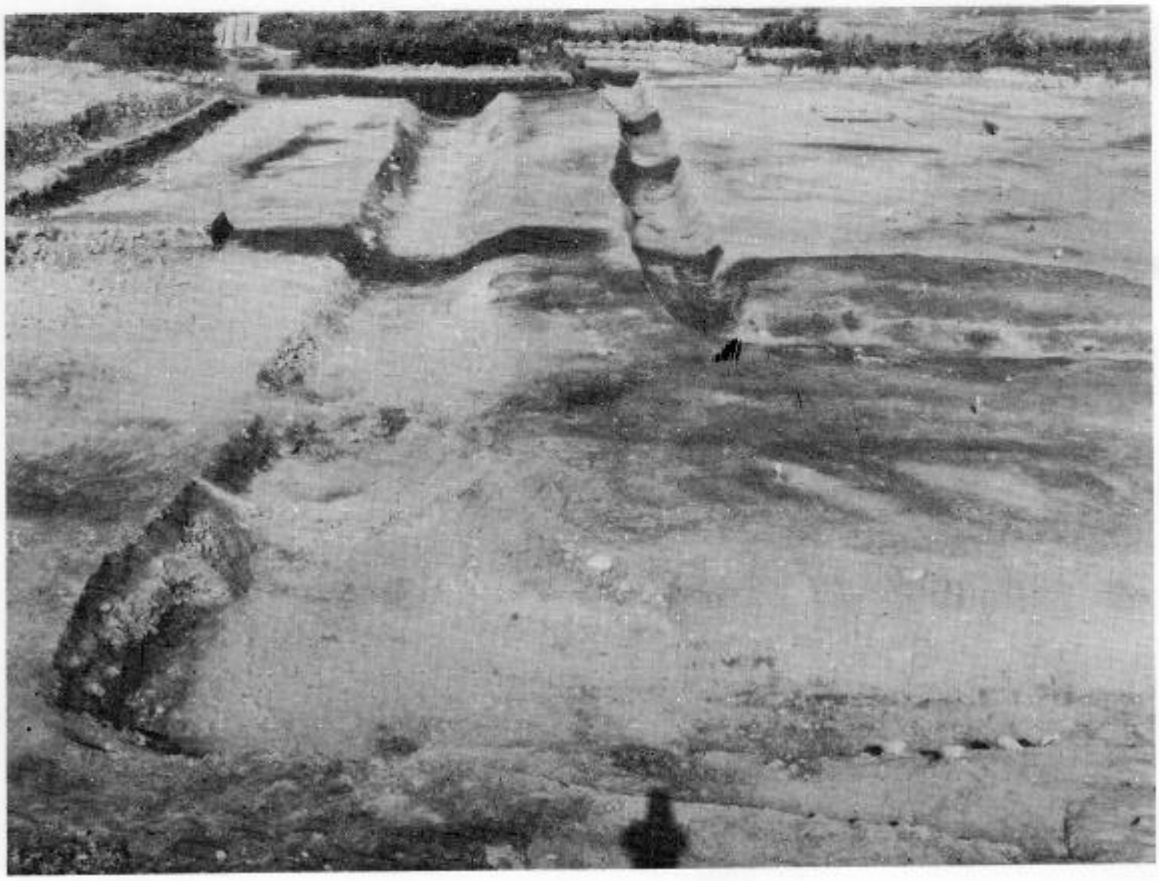
注２：注１に同じ。

注３：これら竪穴住居跡や竪穴状の遺構は，その埋土の土質，状況，出土遺物などから見ても縄文時代の遺構でないのは確実である。



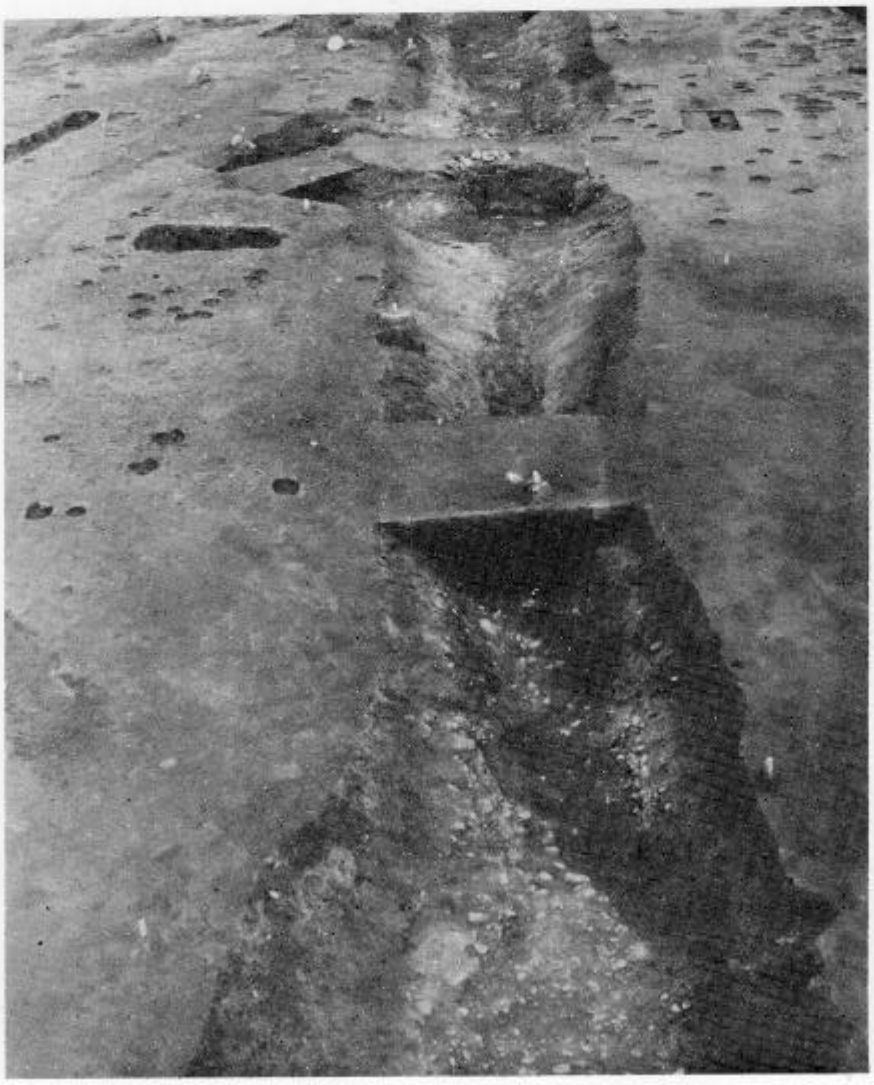
図版１　上　遺跡遠景（東▶）

下　同上



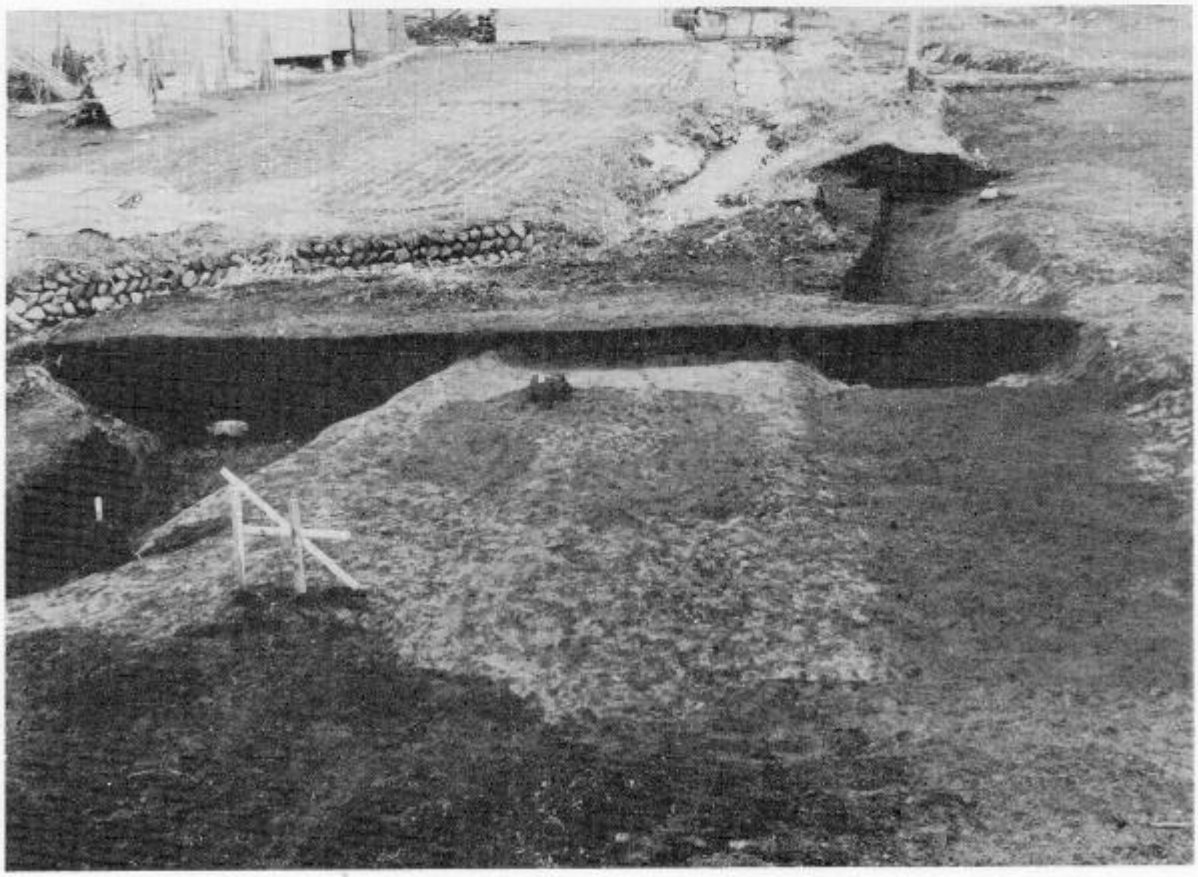
図版２　上　１区全景（南▶）

下　ＳＤ16堀跡南辺（東▶）



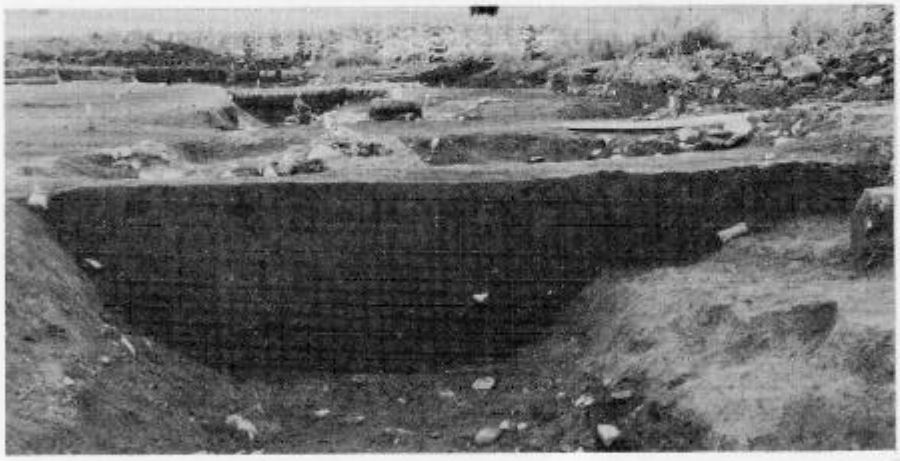
図版 3　上　ＳＤ16東辺（南▶）

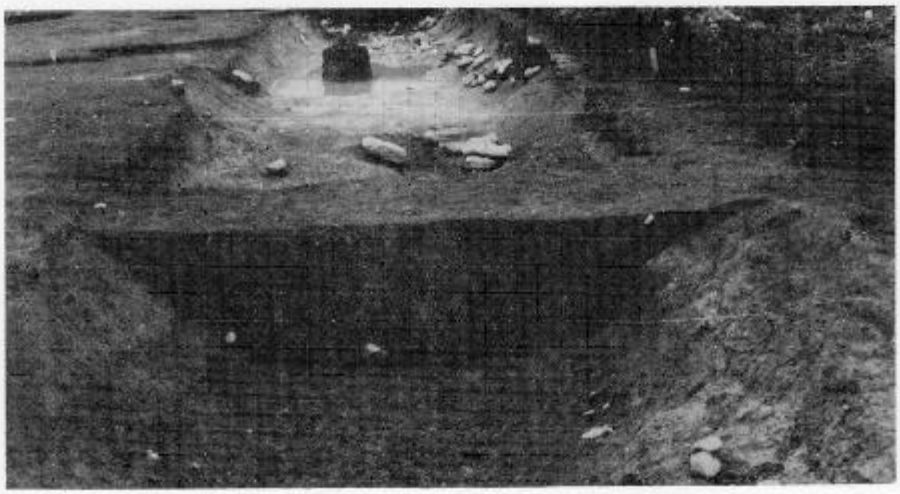
下　ＳＤ140堀跡西辺（南▶）



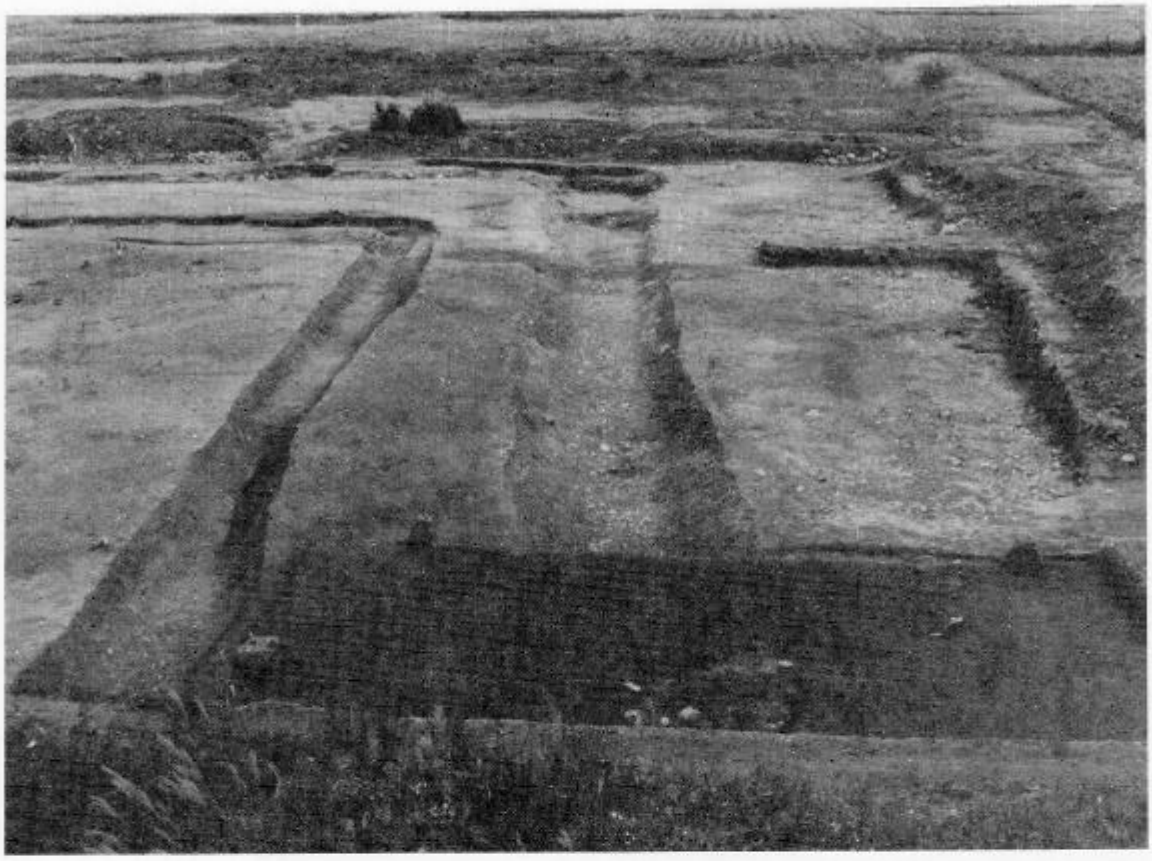
図版4　上　ＳＤ16堀跡東辺（北▶）

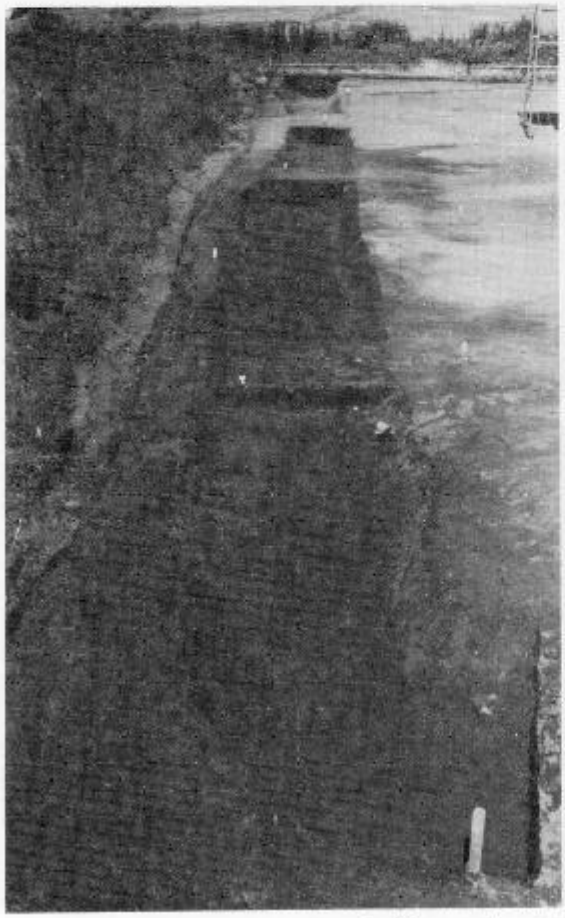
下　ＳＤ300･301堀跡（南▶）



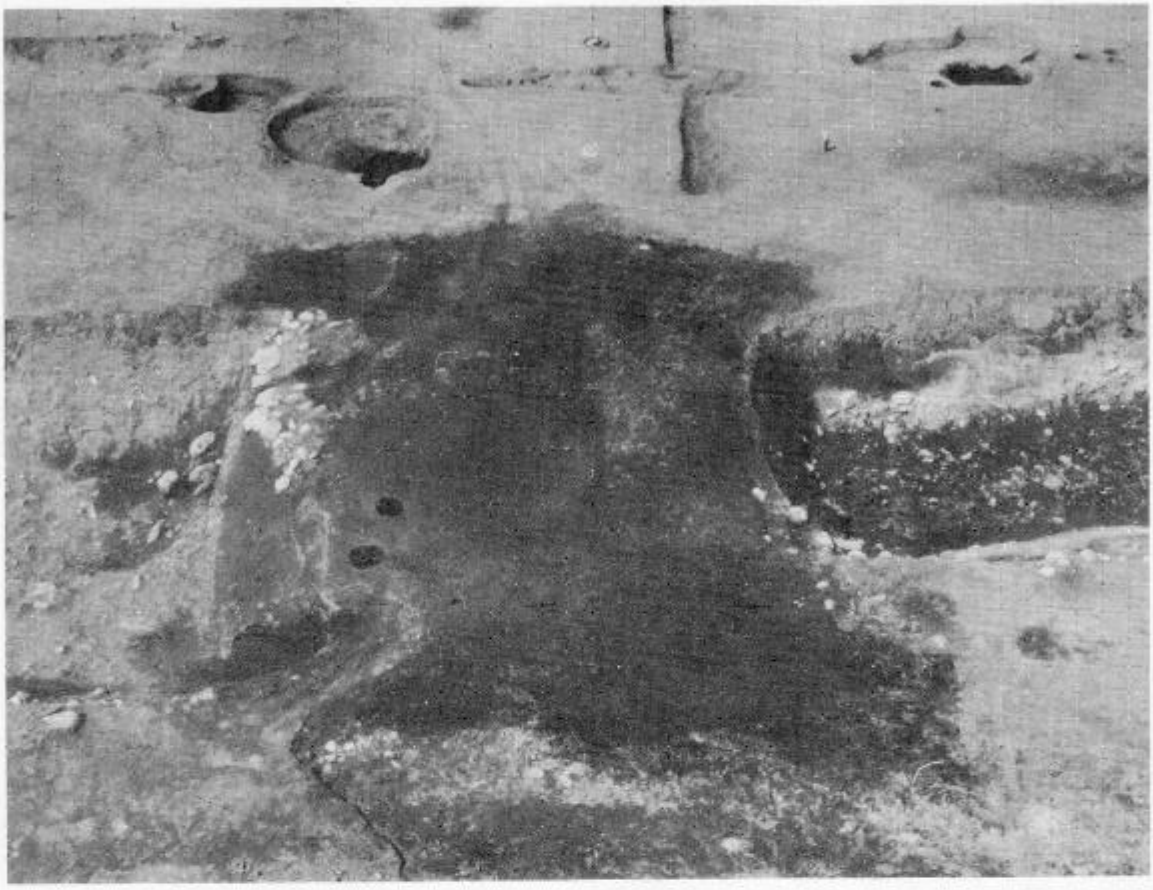


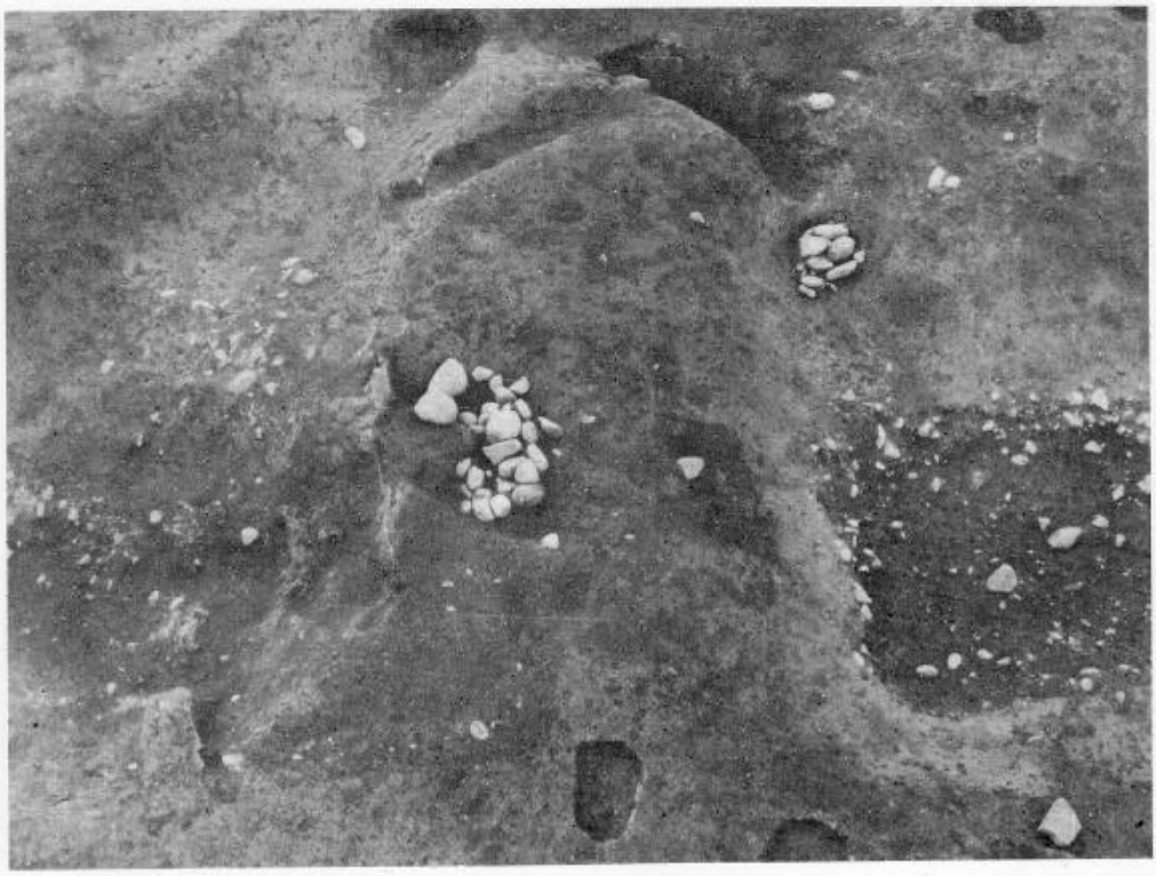
図版 5　上　ＳＤ16堀跡断面（南辺）
　　中　ＳＤ16堀跡断面（東辺）
　　下　ＳＤ16堀跡断面（北辺）





図版 6　上　ＳＤ15Ａ・Ｂ溝跡（西▶）
下左　ＳＤ15Ａ・Ｂ溝跡（東▶）
下右　ＳＤ15Ａ・Ｂ溝跡（東▶）





図版 7　上　ＳＸ24土橋（東▶）

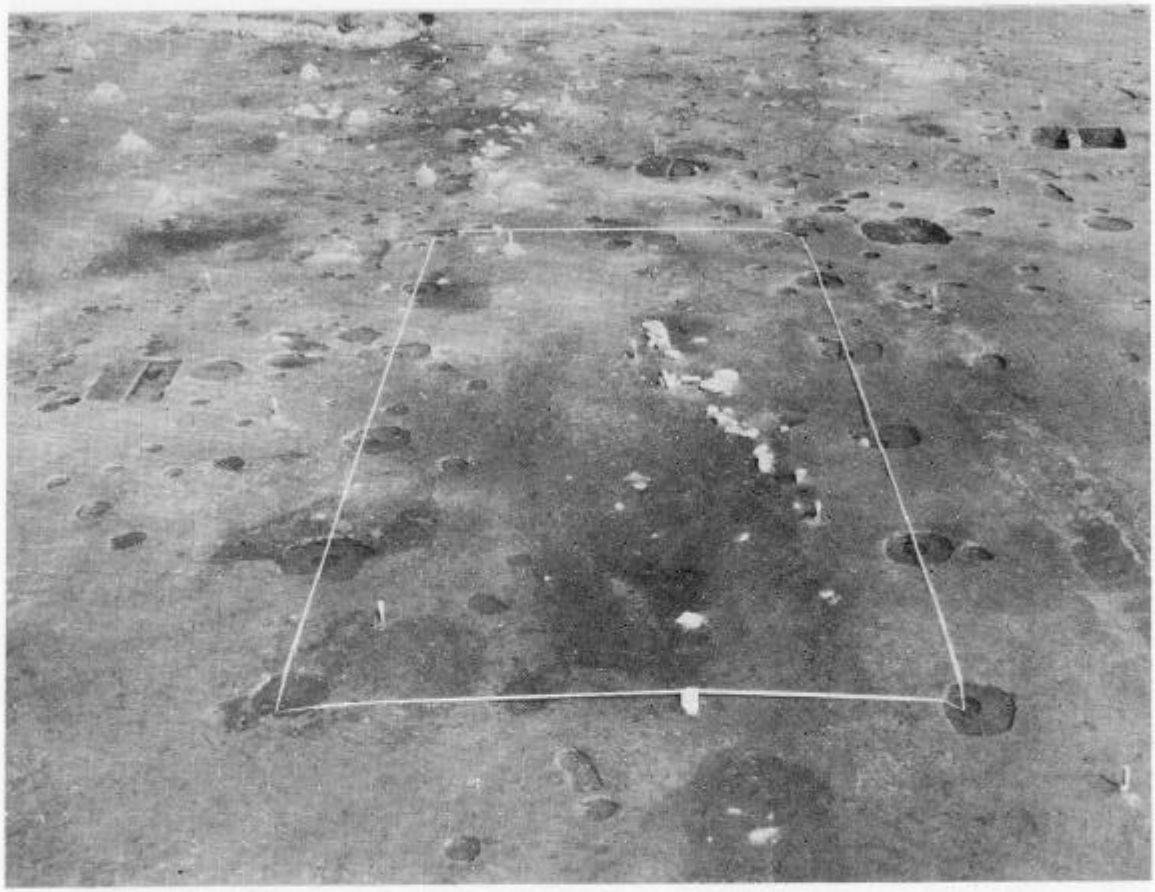
下　ＳＸ150土橋（東▶）

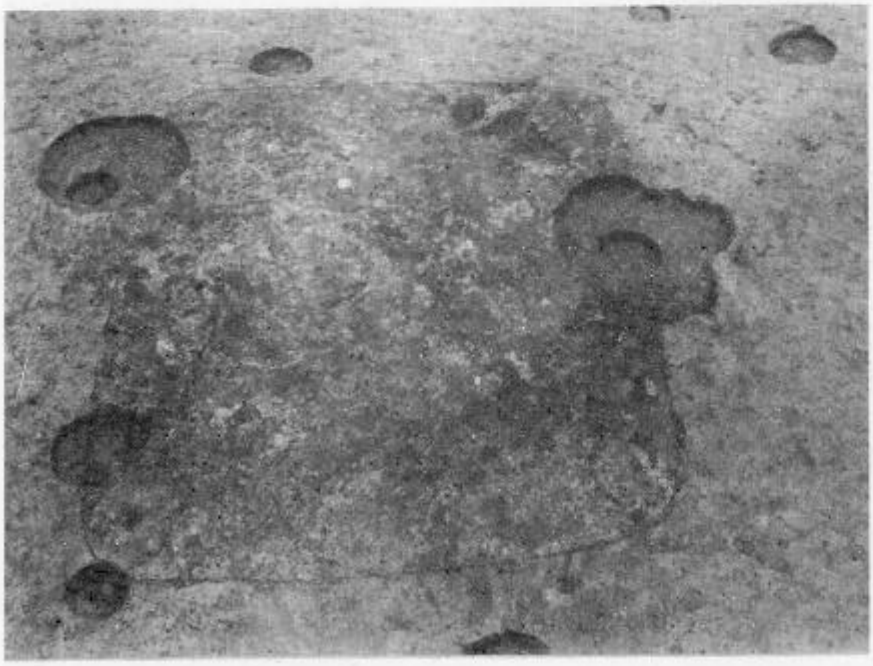
図版 8　上　1 区：中心部（南▶）

下　東部柱穴群（東▶）

図版 9　上　西部柱穴群 I（西▶）

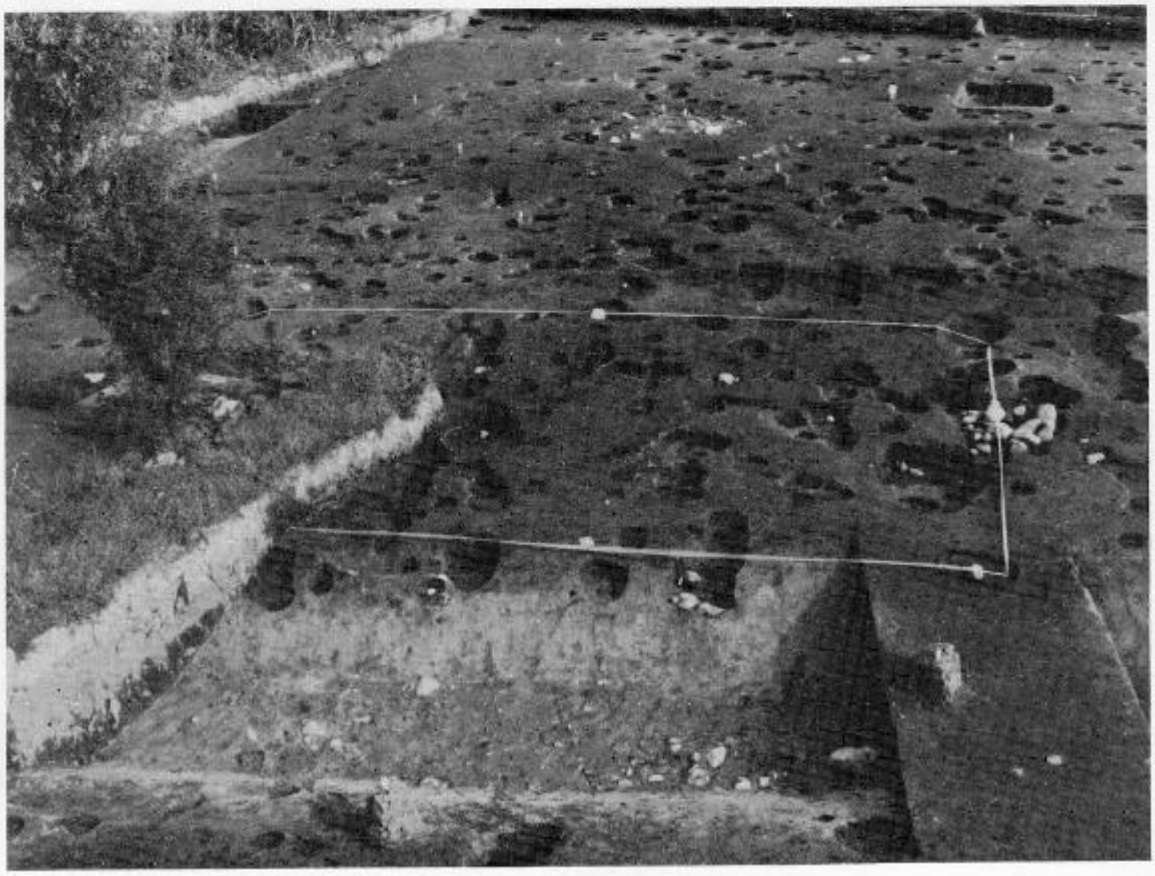
下　西部柱穴群 II（南▶）





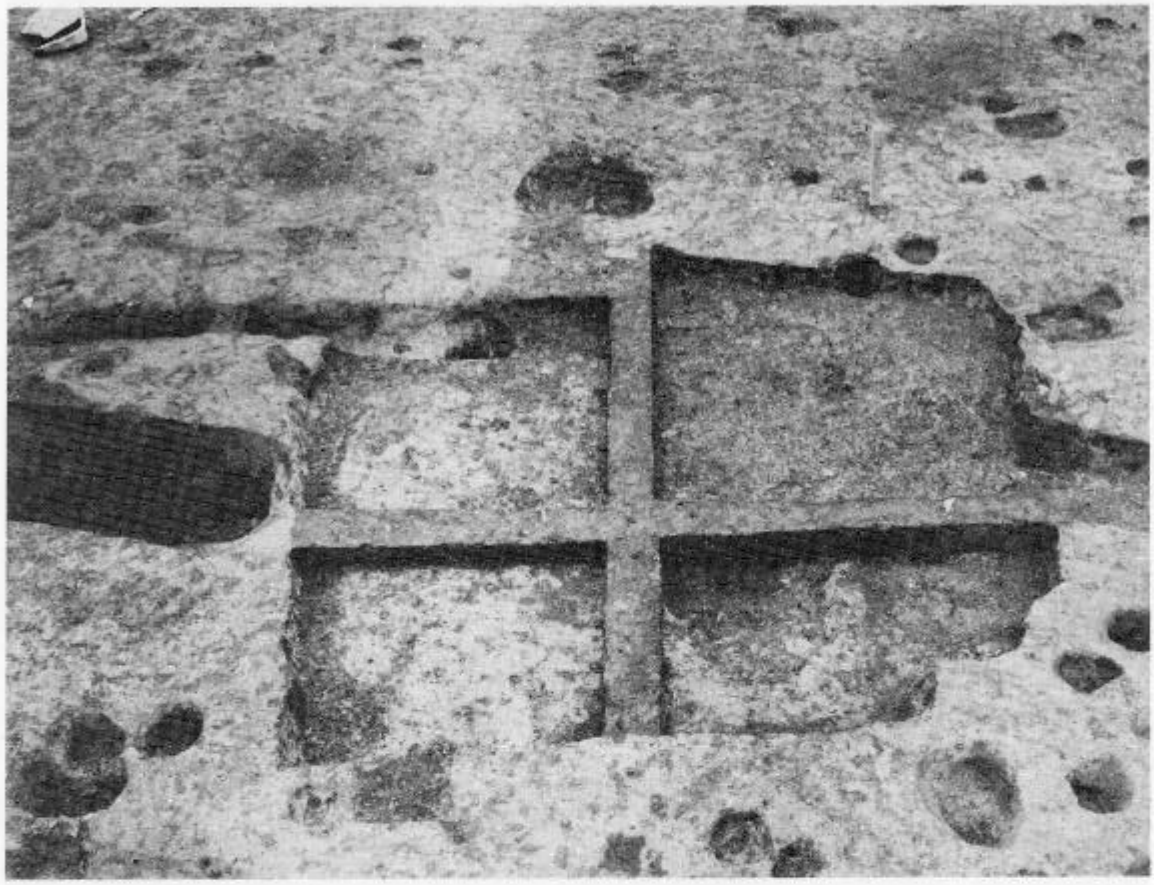
図版10　上　ＳＢ100掘立柱建物跡（南▶）

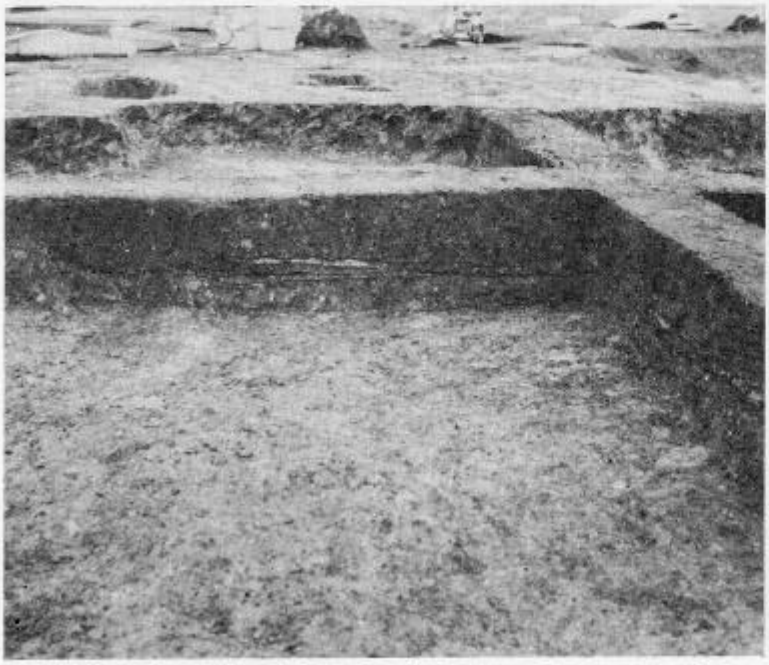
下　ＳＢ100掘立柱建物跡柱穴ＳＫ137(南▶)



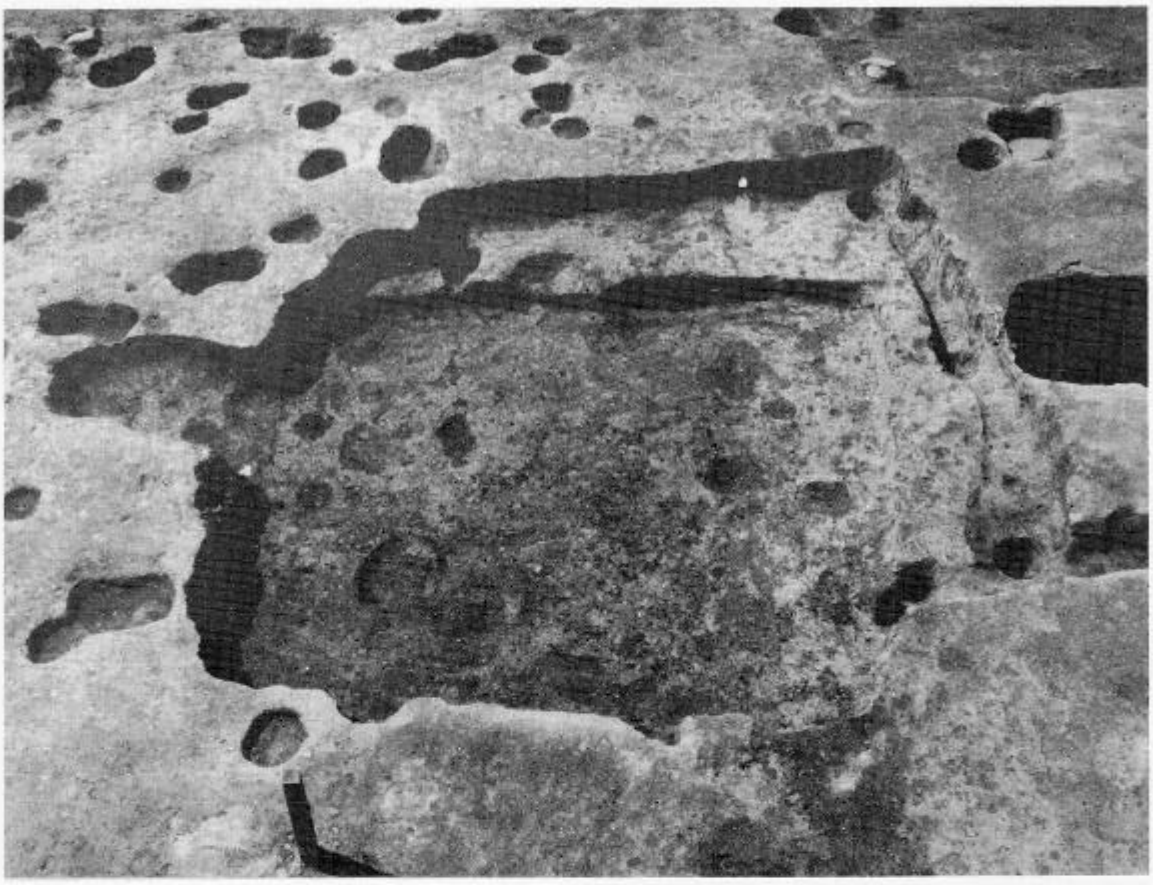
図版11　上　ＳＢ153掘立柱建物跡（西▶）

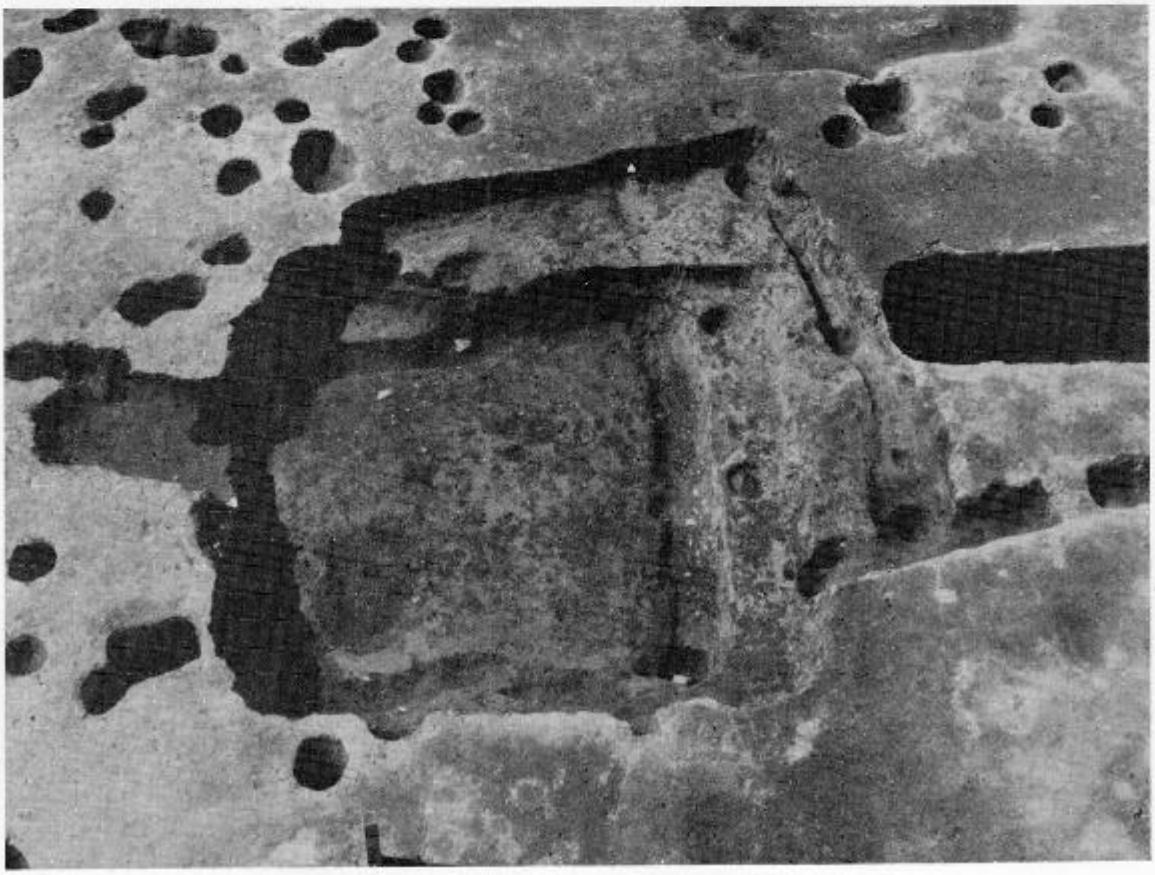
下　ＳＢ302掘立柱建物跡（西▶）





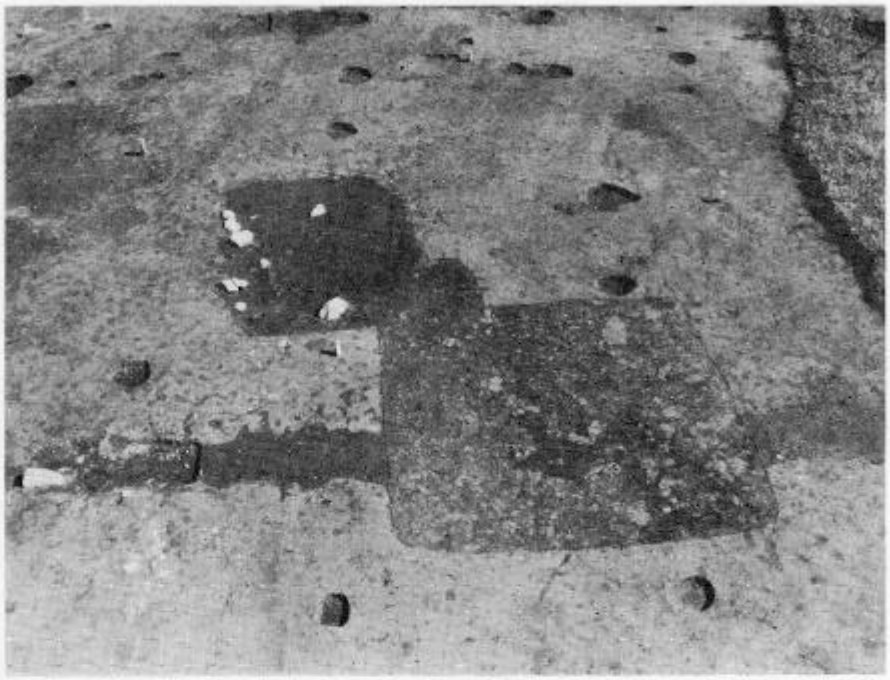
図版12　上　ＳＩ203･204･205竪穴住居跡（南▶）
下左　同上断面貼床状況
下右　遺物出土状況





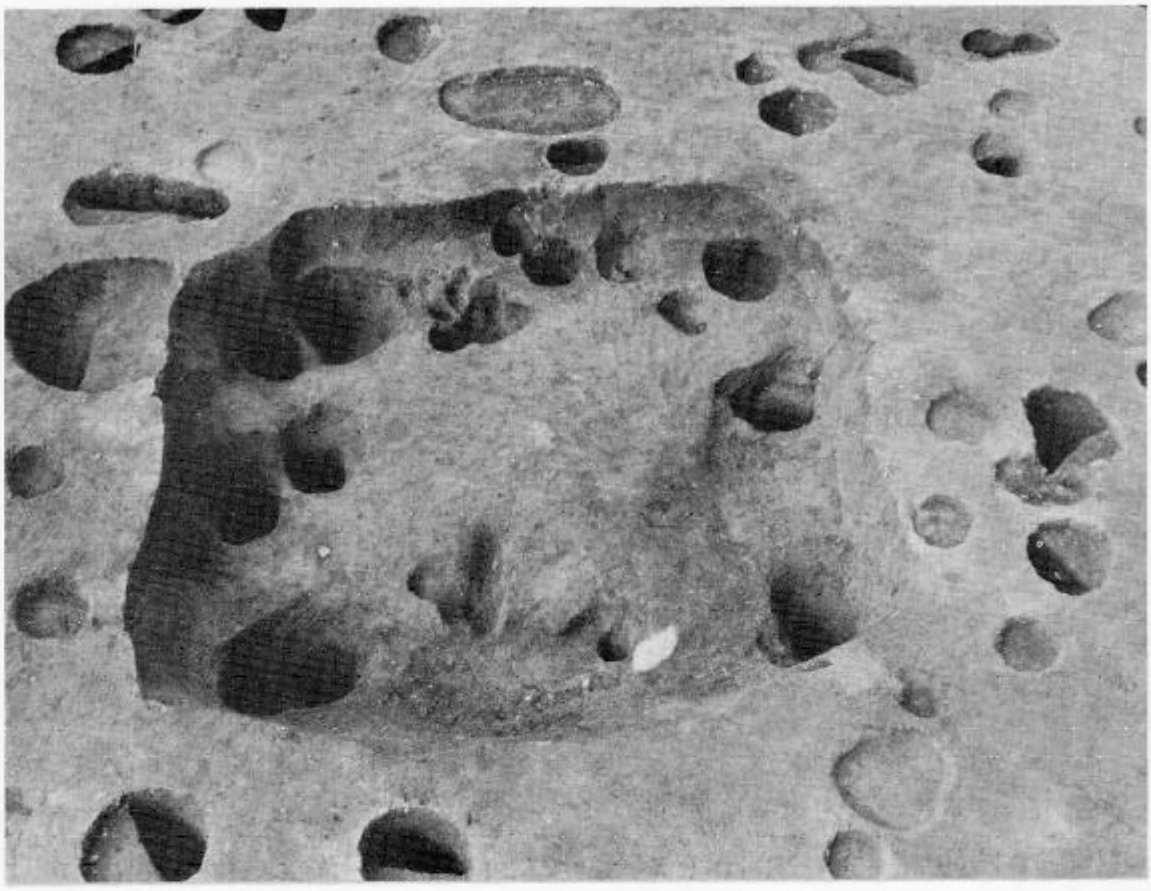
図版13　上　ＳＩ203･204竪穴住居跡（北▶）

下　ＳＩ203･204･205竪穴住居跡（北▶）



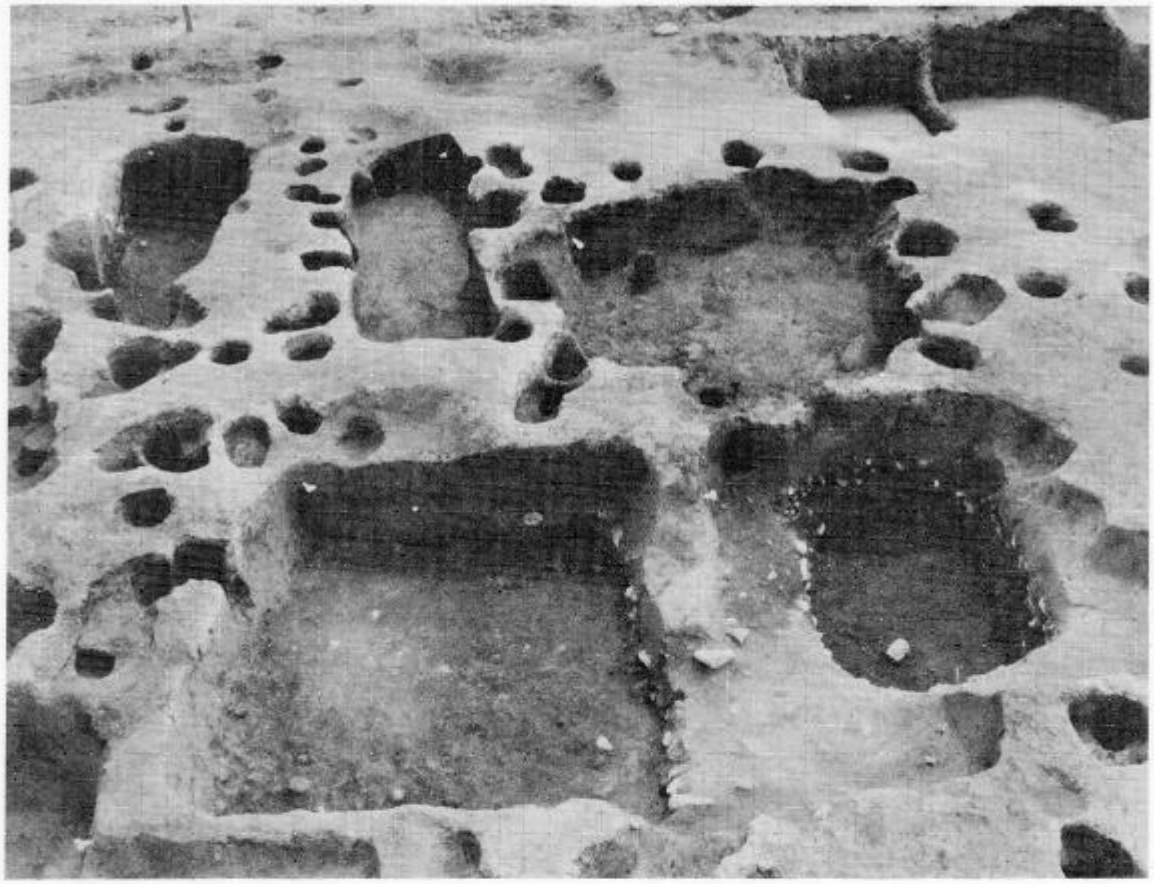
図版14　上　ＳＩ108竪穴住居跡（西▶）

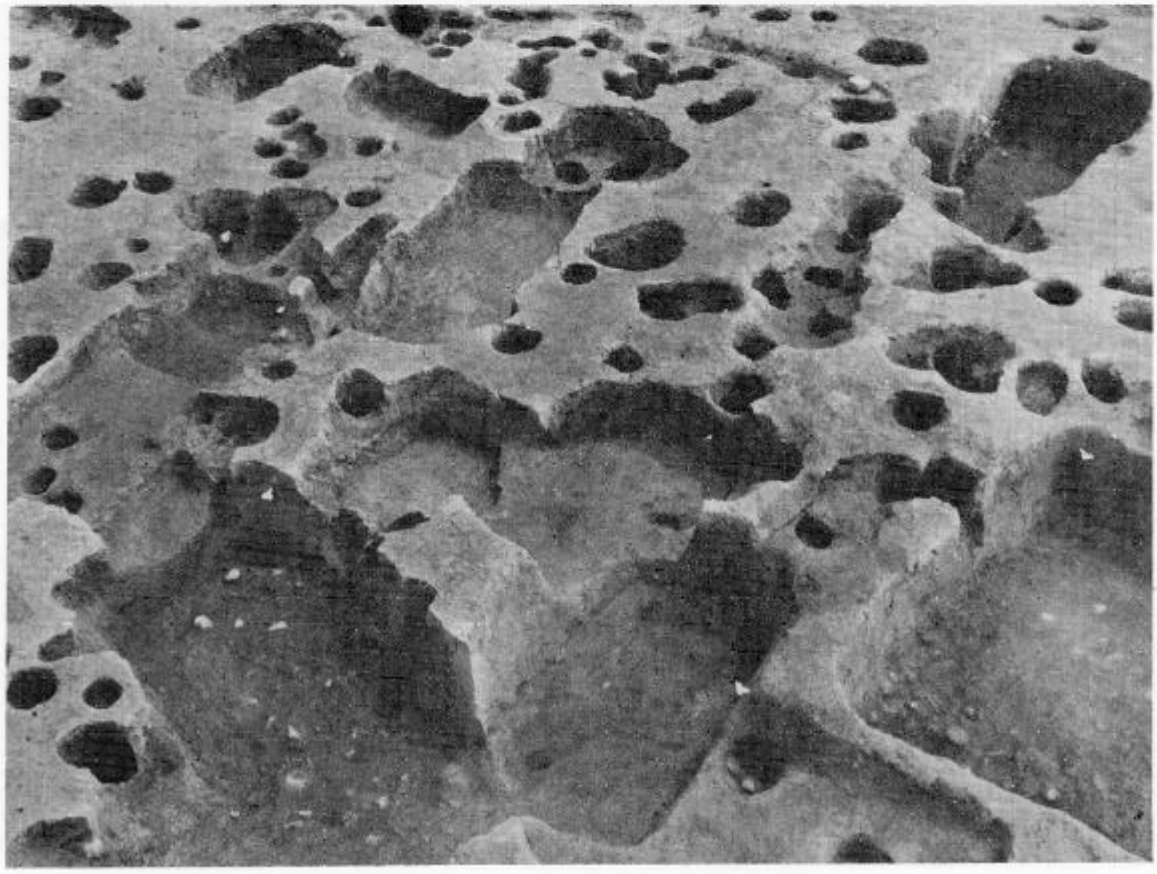
下　同上　　（西▶）



図版15　上　ＳＩ10竪穴住居跡（西▶）

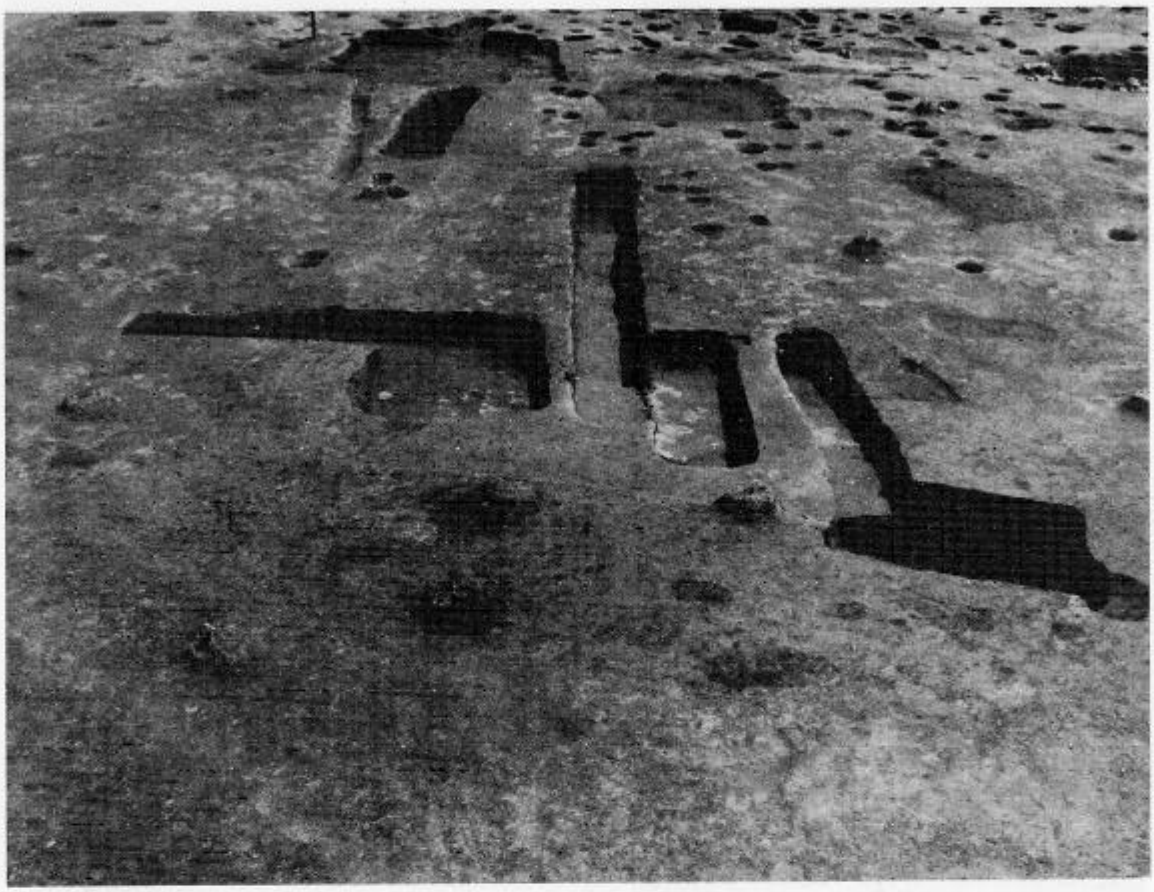
下　ＳＩ11竪穴住居跡（東▶）

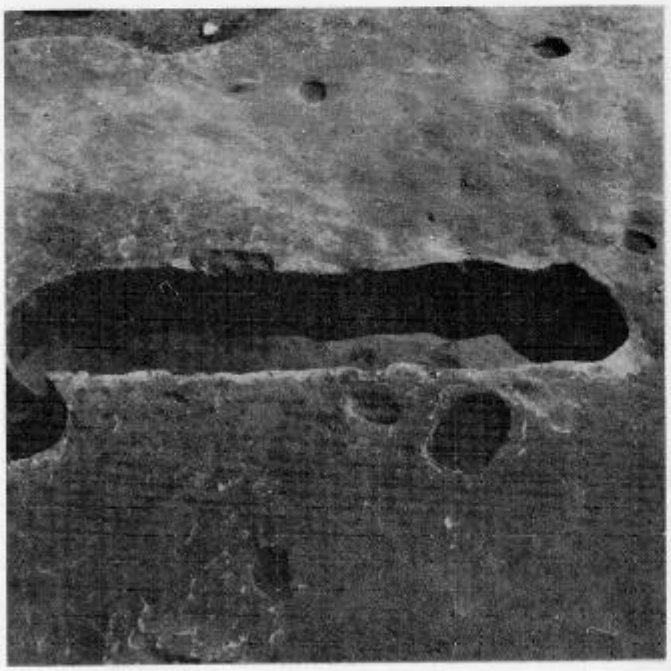




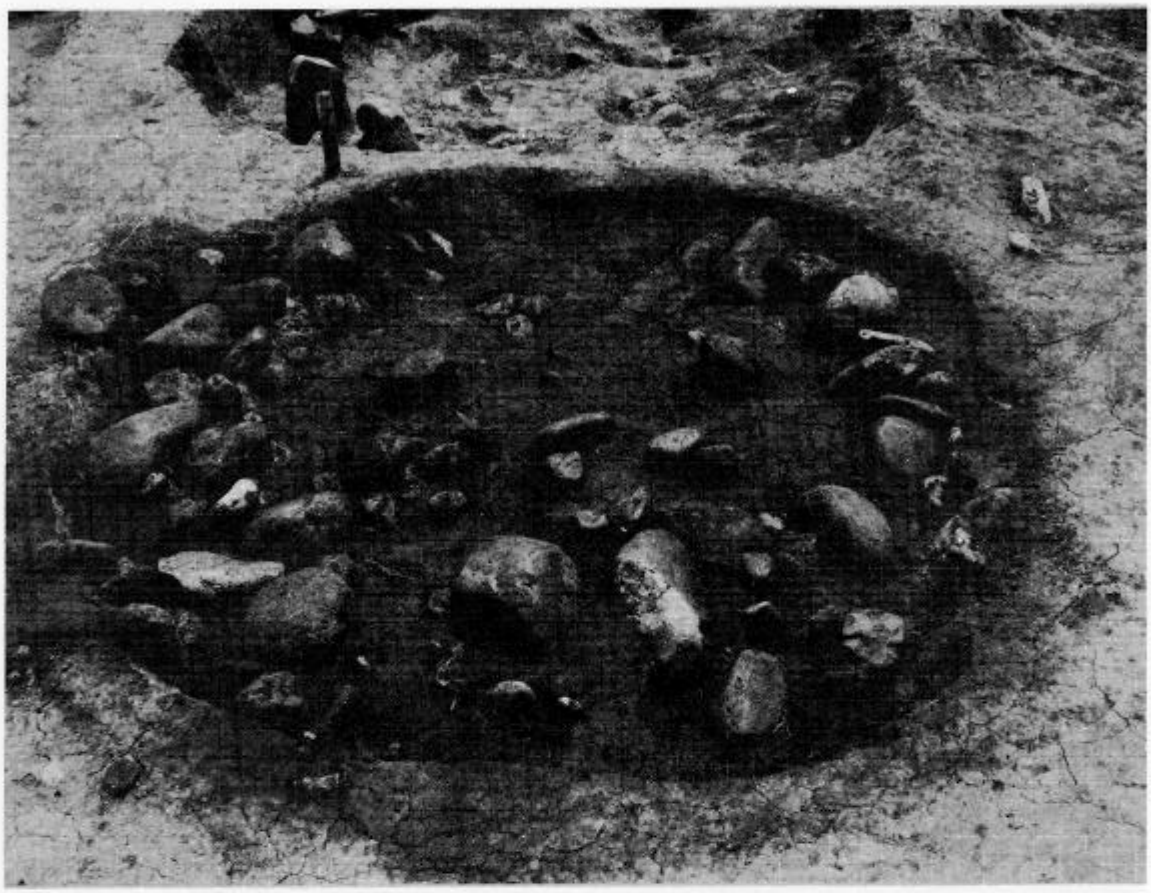
図版16　上　ＳＫ211・242・225など（西▶）

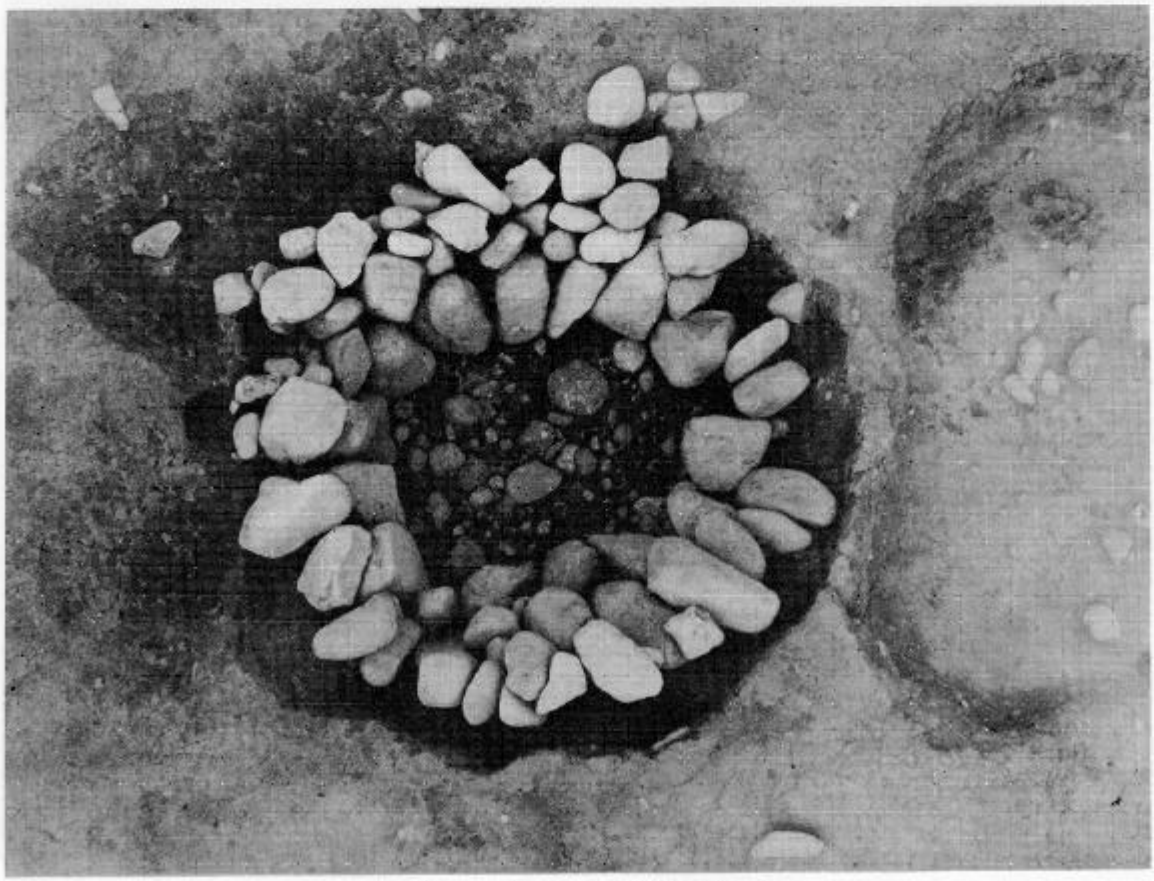
下　ＳＫ216・217・218・219など（南西▶）





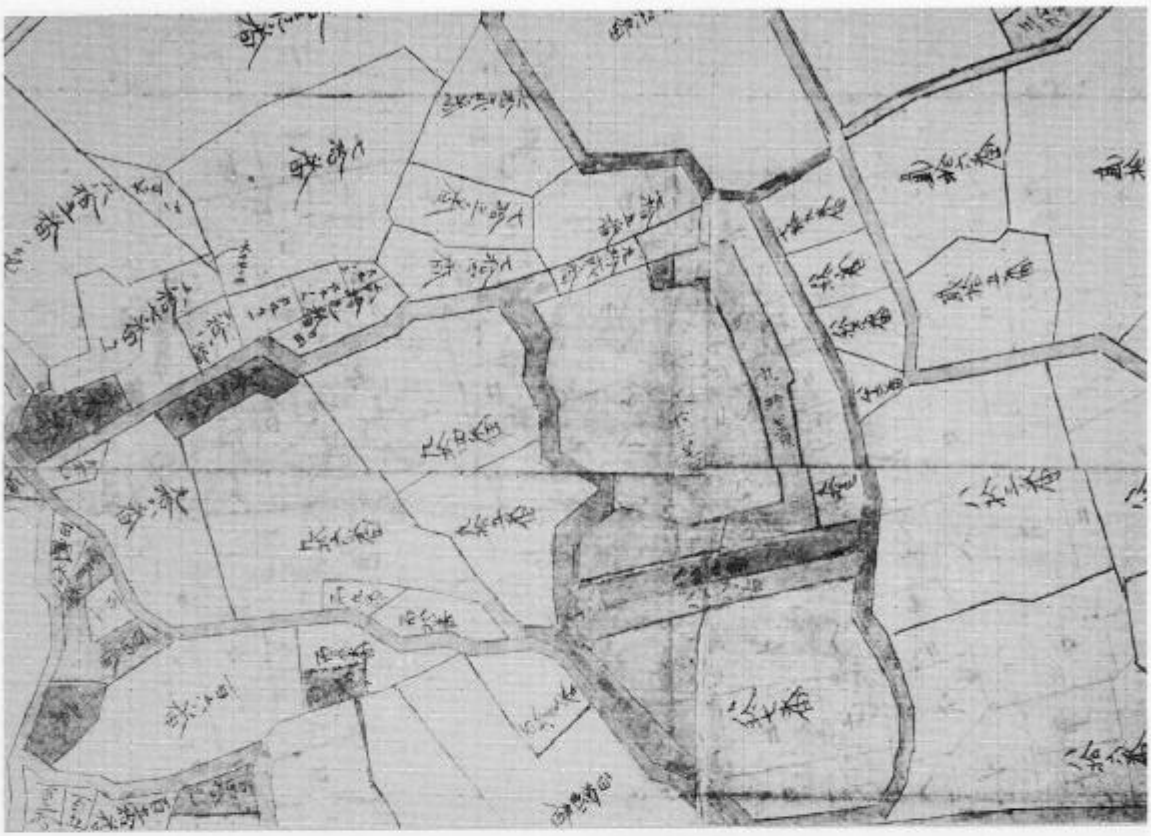
図版17　上　ＳＫ227･228･229･230など（西▶）
下左　ＳＫ147長方形竪穴状遺構（西▶）
下右　ＳＫ208（西▶）

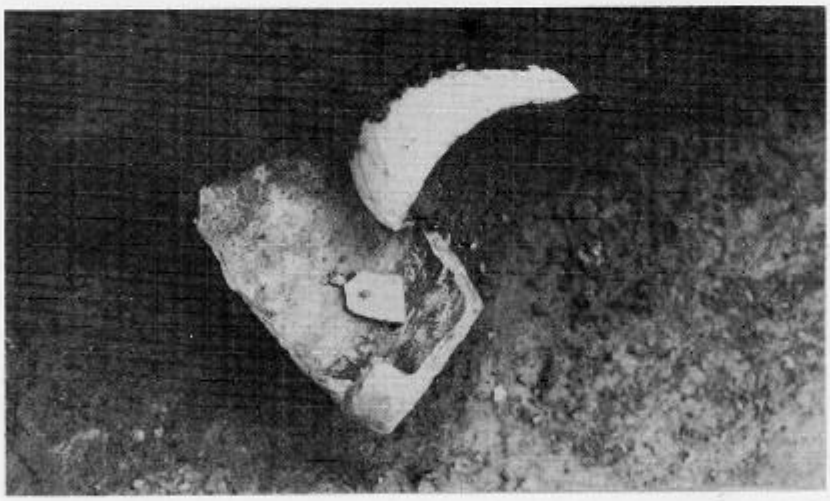




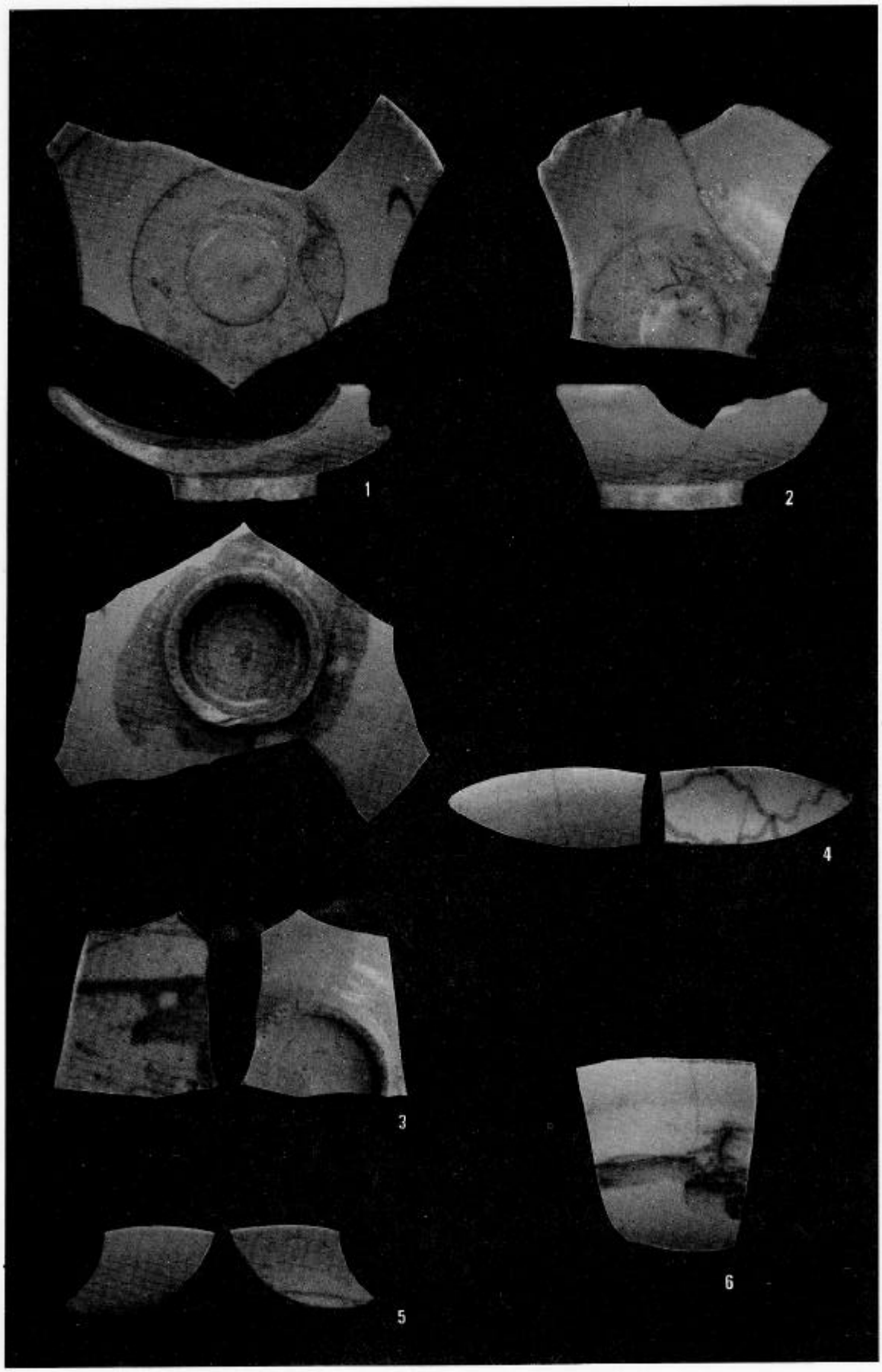
図版18　上　ＳＸ03集石遺構（西▶）

下　同上　　（西▶）

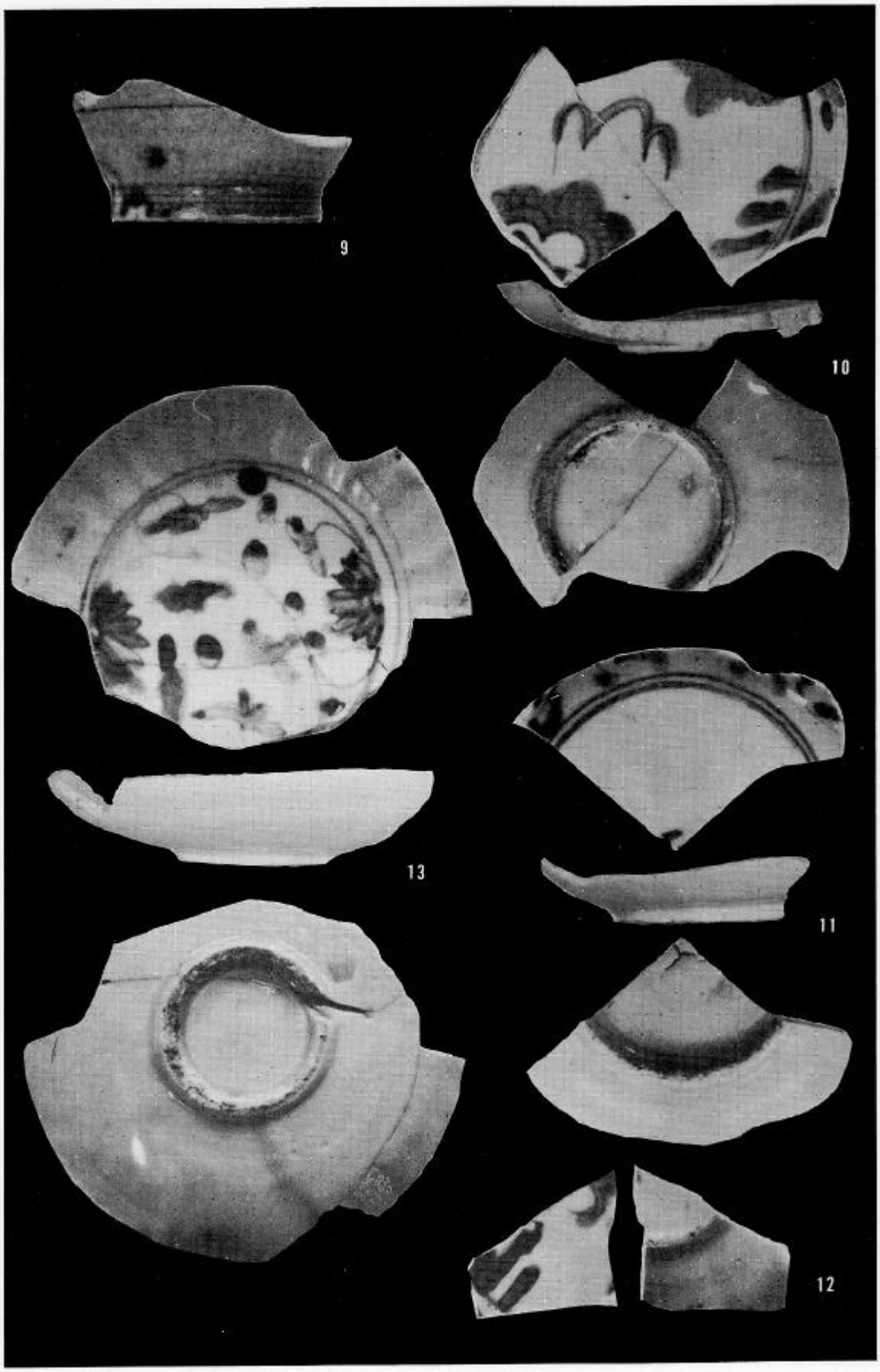




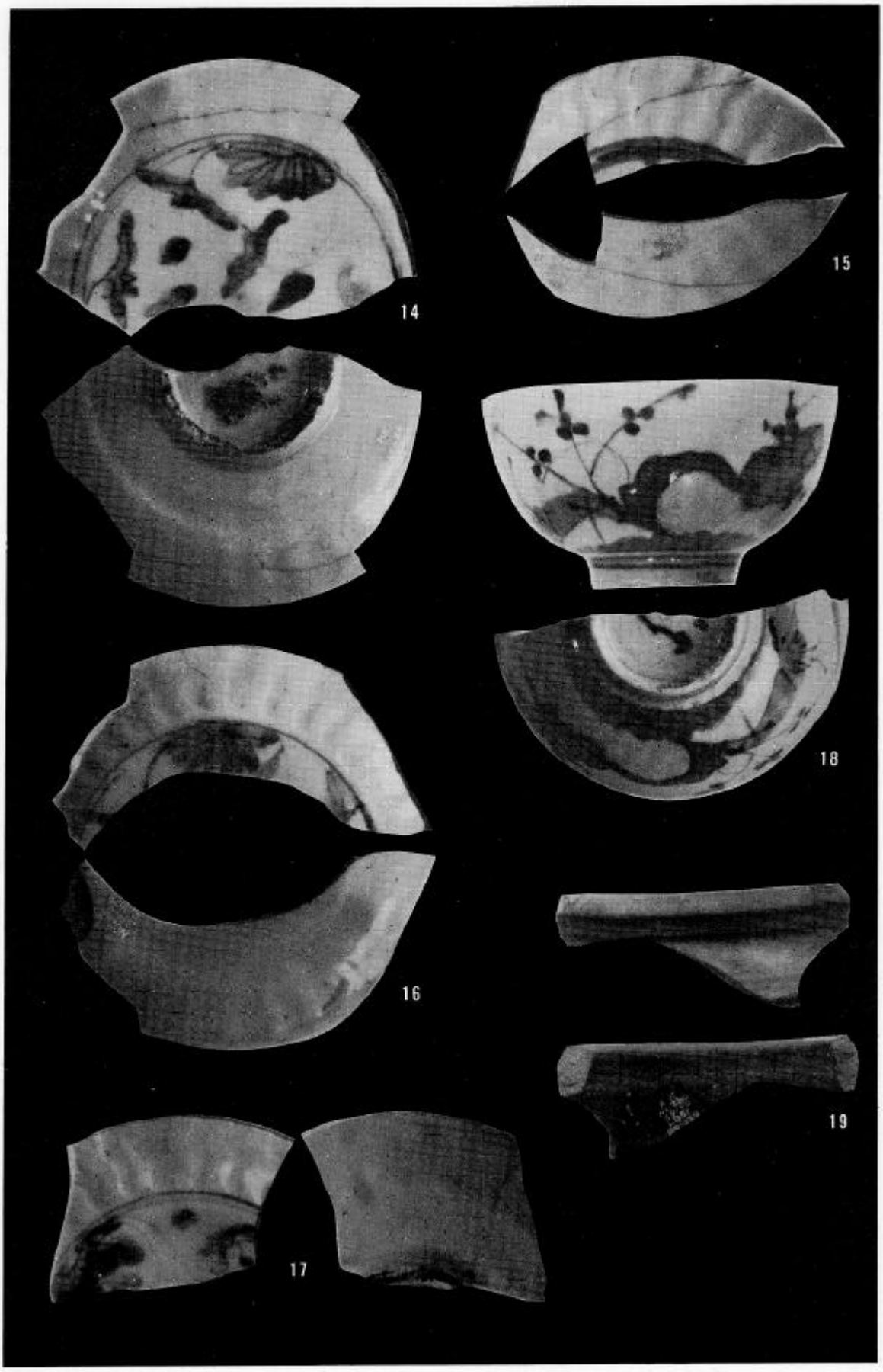
図版19　上　明治初期の地籍図（上が北）
中　遺物出土状況
下　同　上



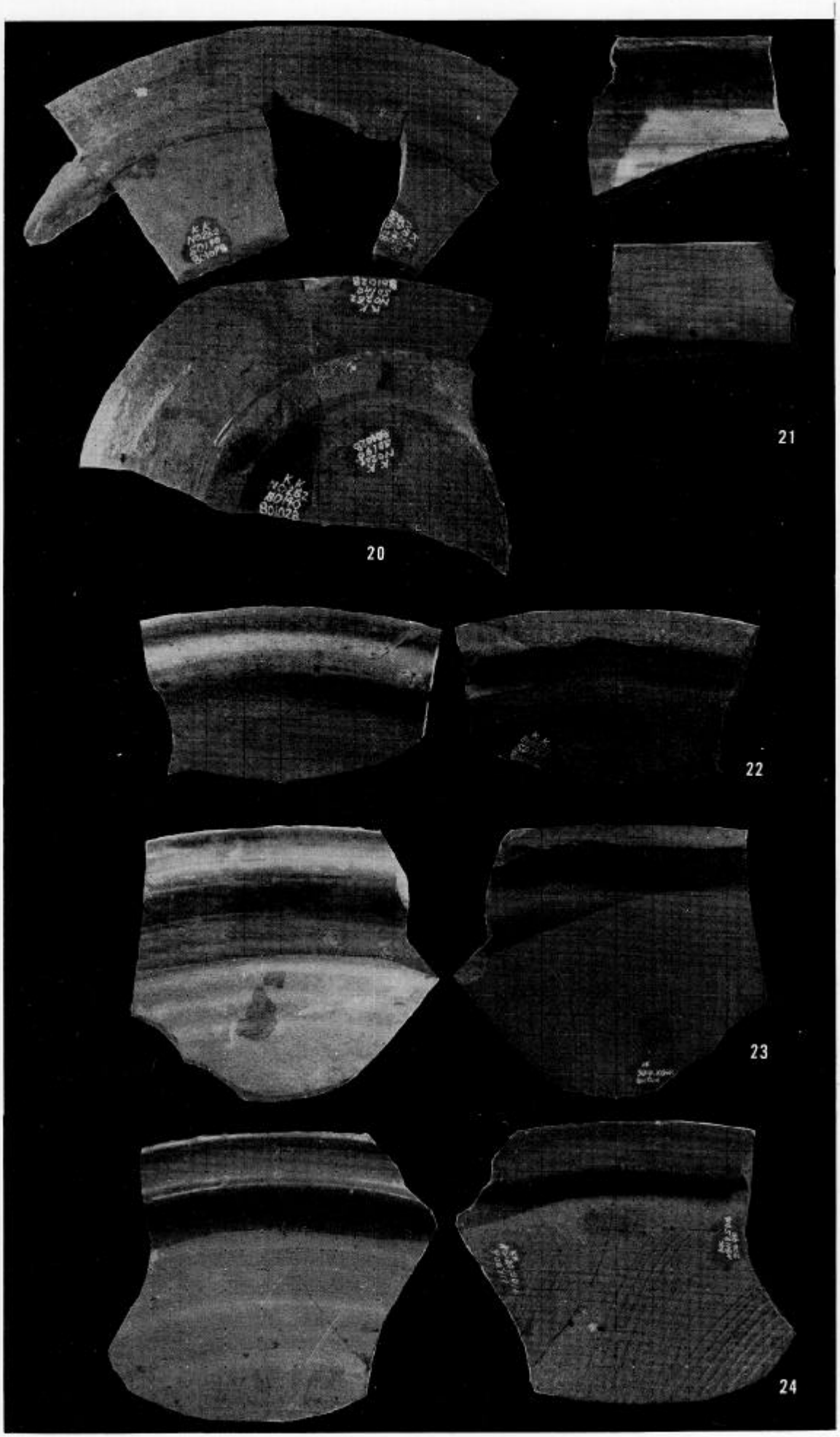
図版20　遺構内出土陶磁器　(1)（S≒1/2）



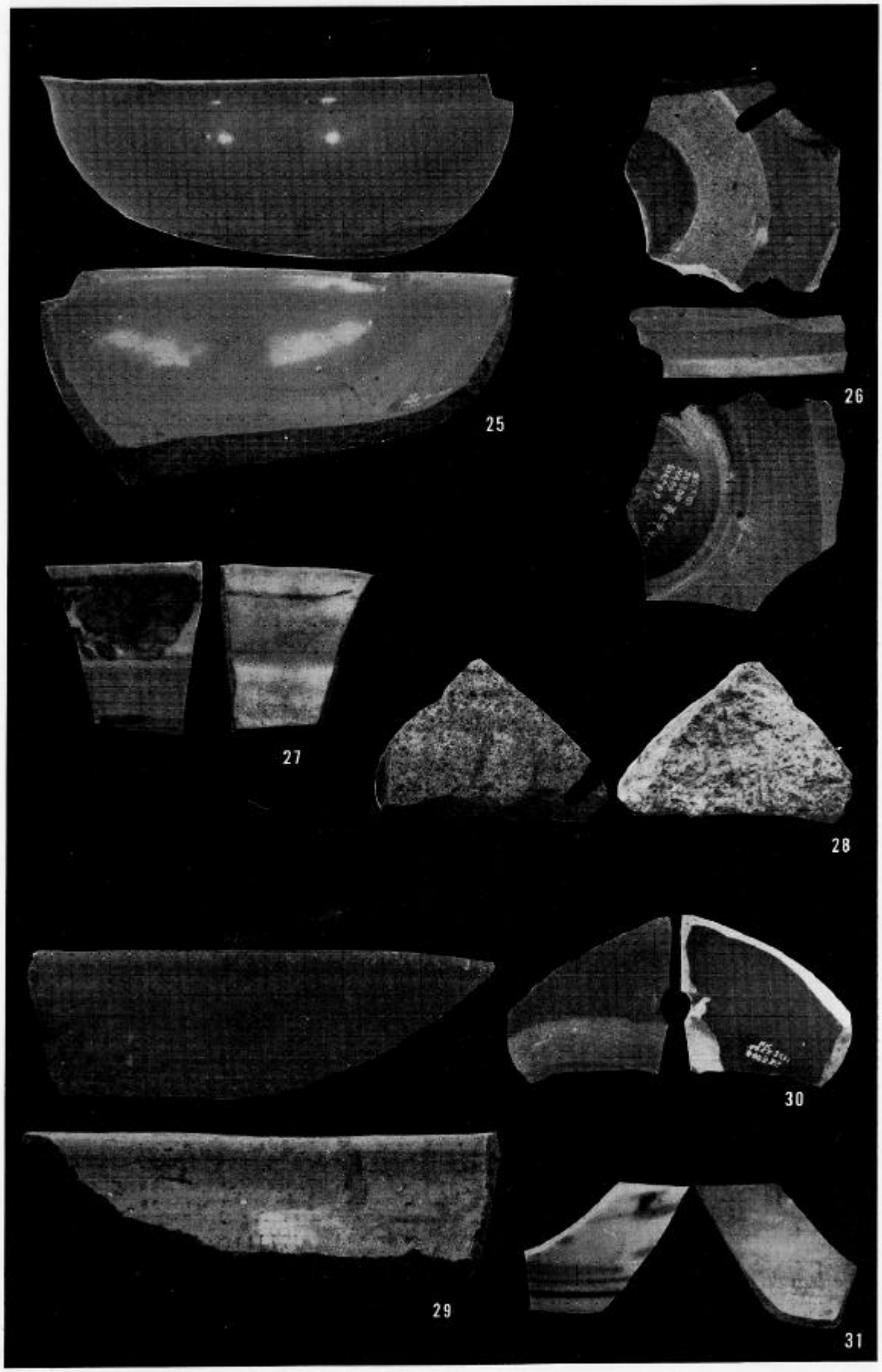
図版21　遺構内出土陶磁器　(2)（S≒1/2）



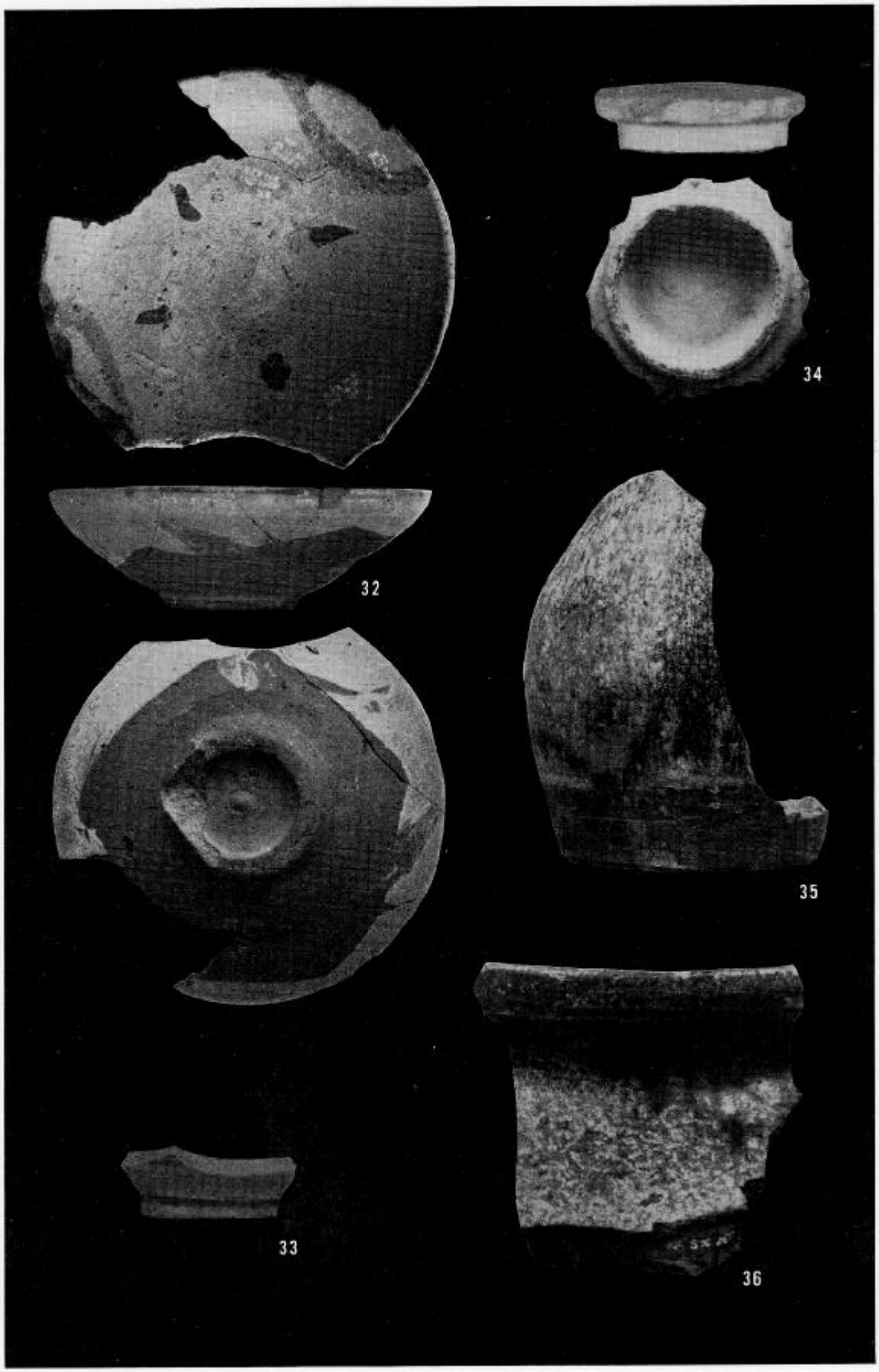
図版22　遺構内出土陶磁器　(3)（S≒1/2）



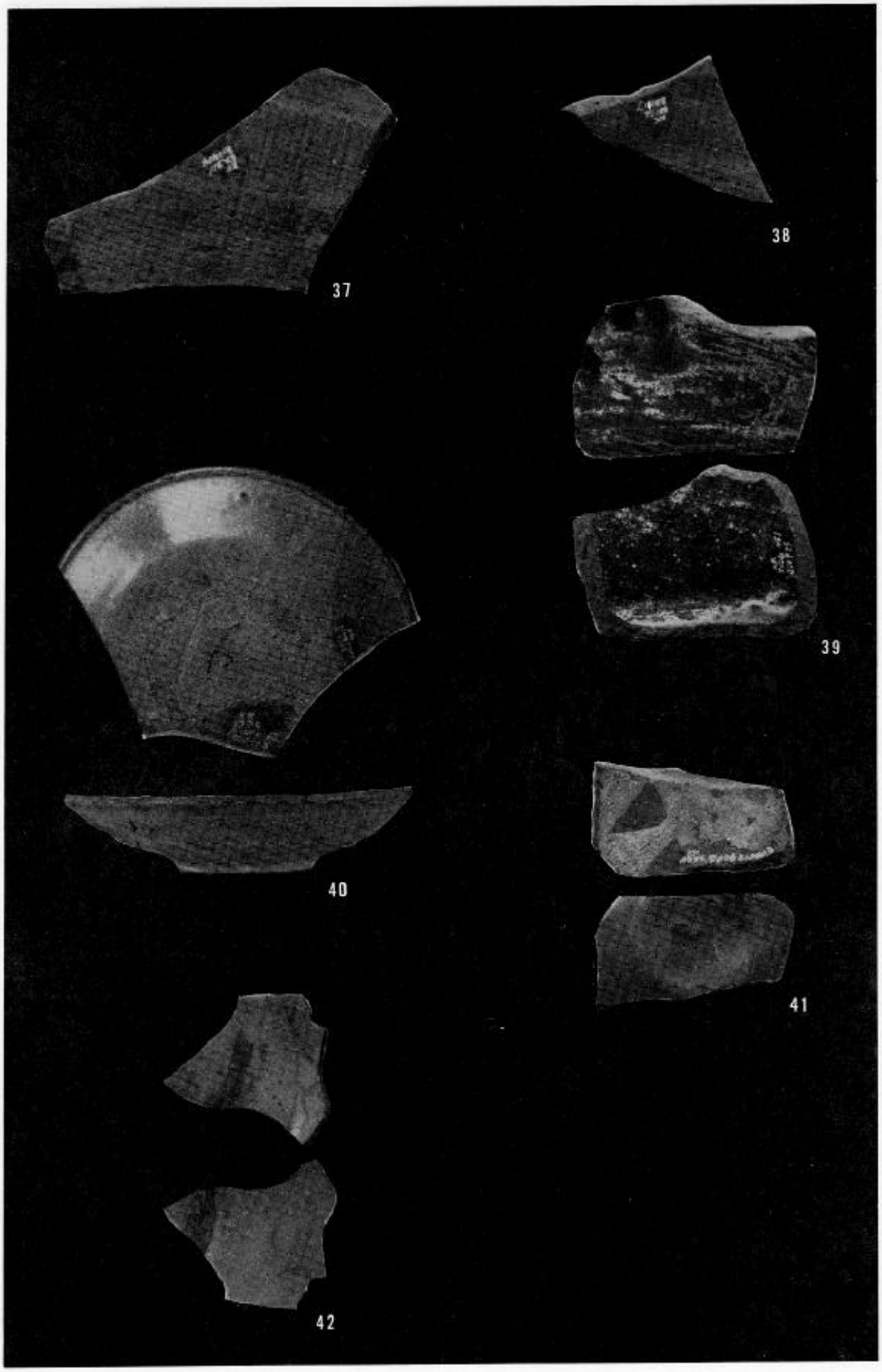
図版23　遺構内出土陶磁器　(4)（S≒1/2）



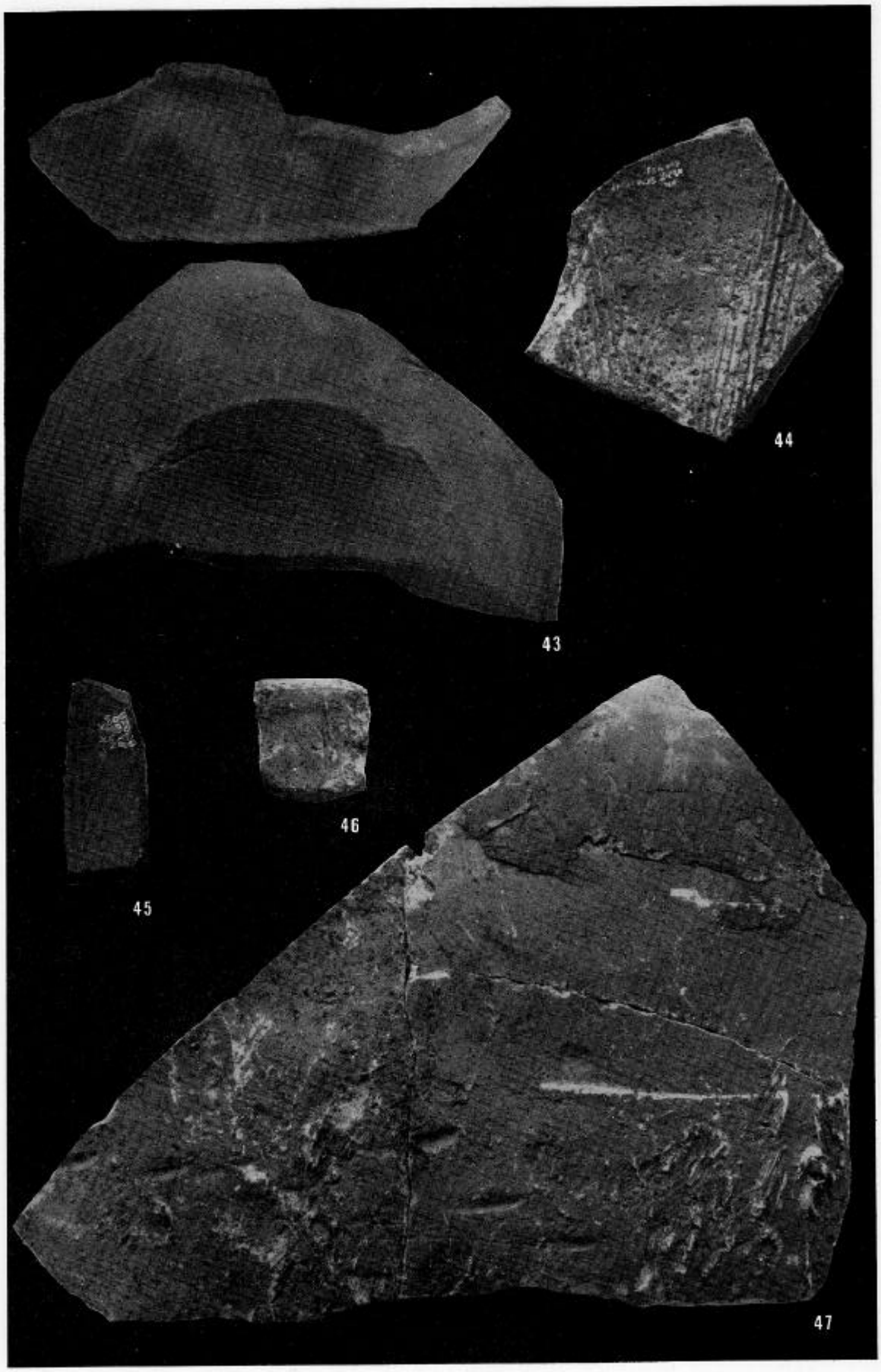
図版24　遺構内出土陶磁器　(5)（S≒1/2）



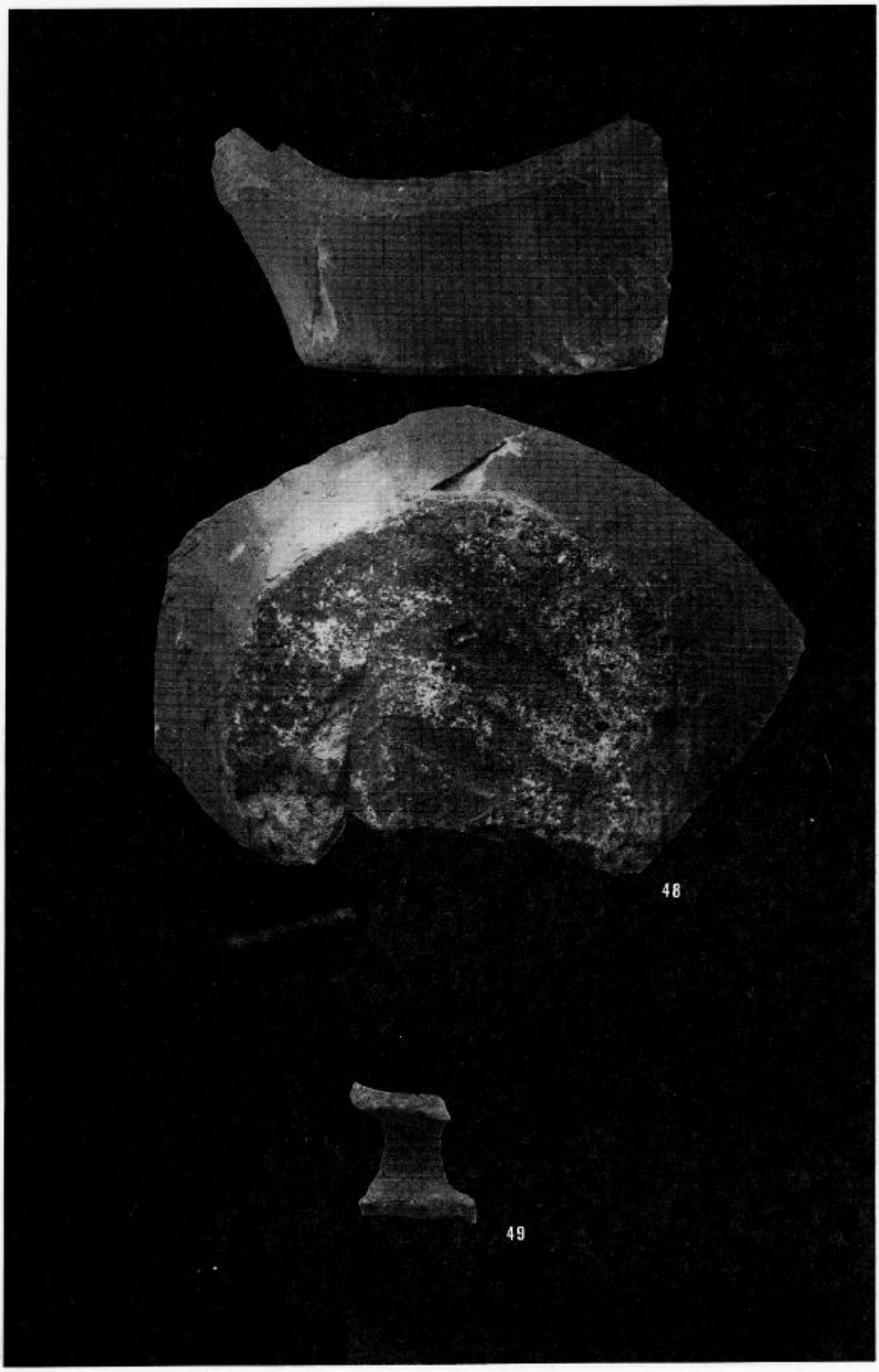
図版25　遺構内出土陶磁器　(6)（S≒1/2）



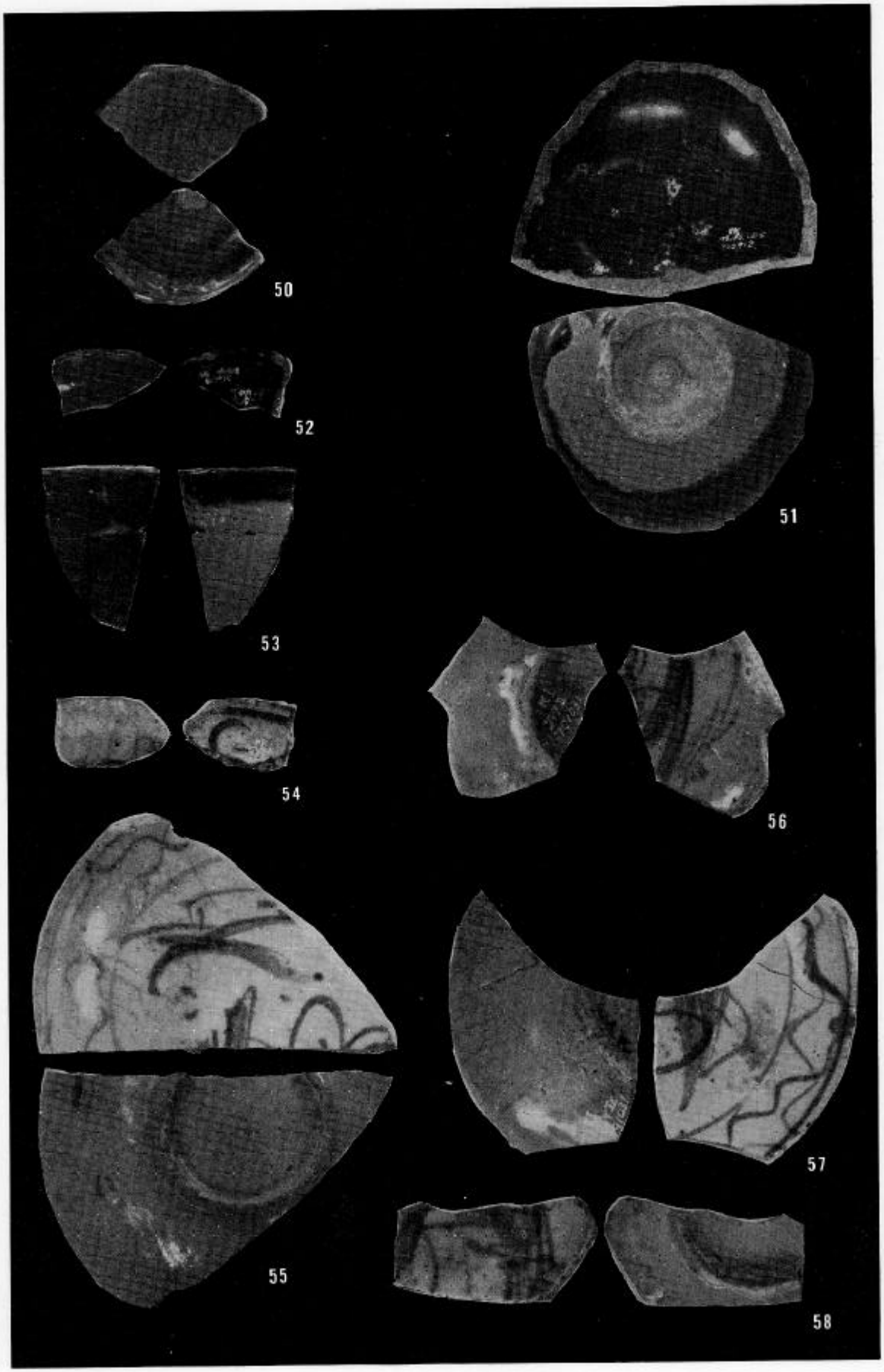
図版26　遺構内出土陶磁器　(7)（S≒1/2）



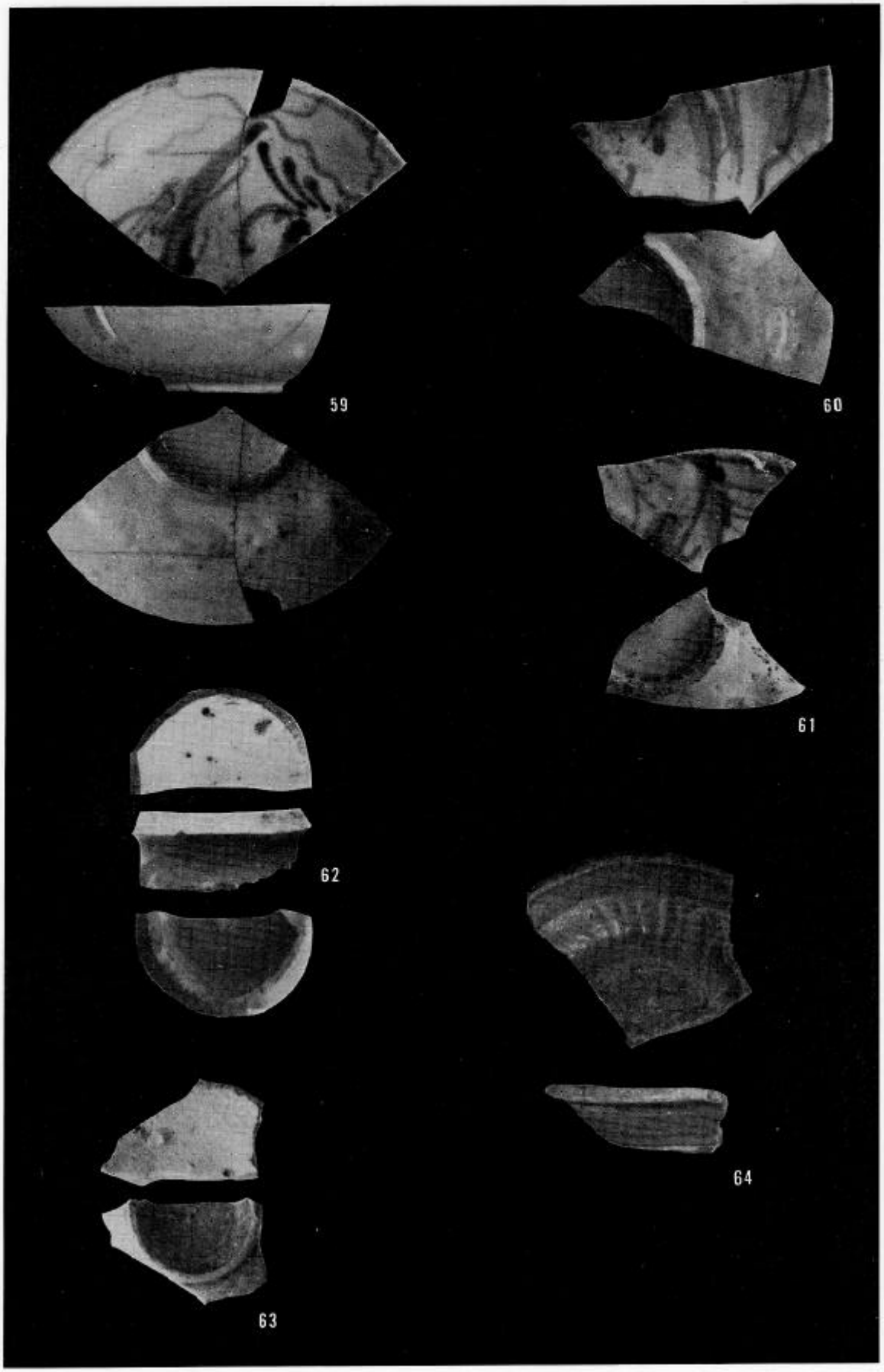
図版27　遺構内出土陶磁器　(8)（S≒1/2）



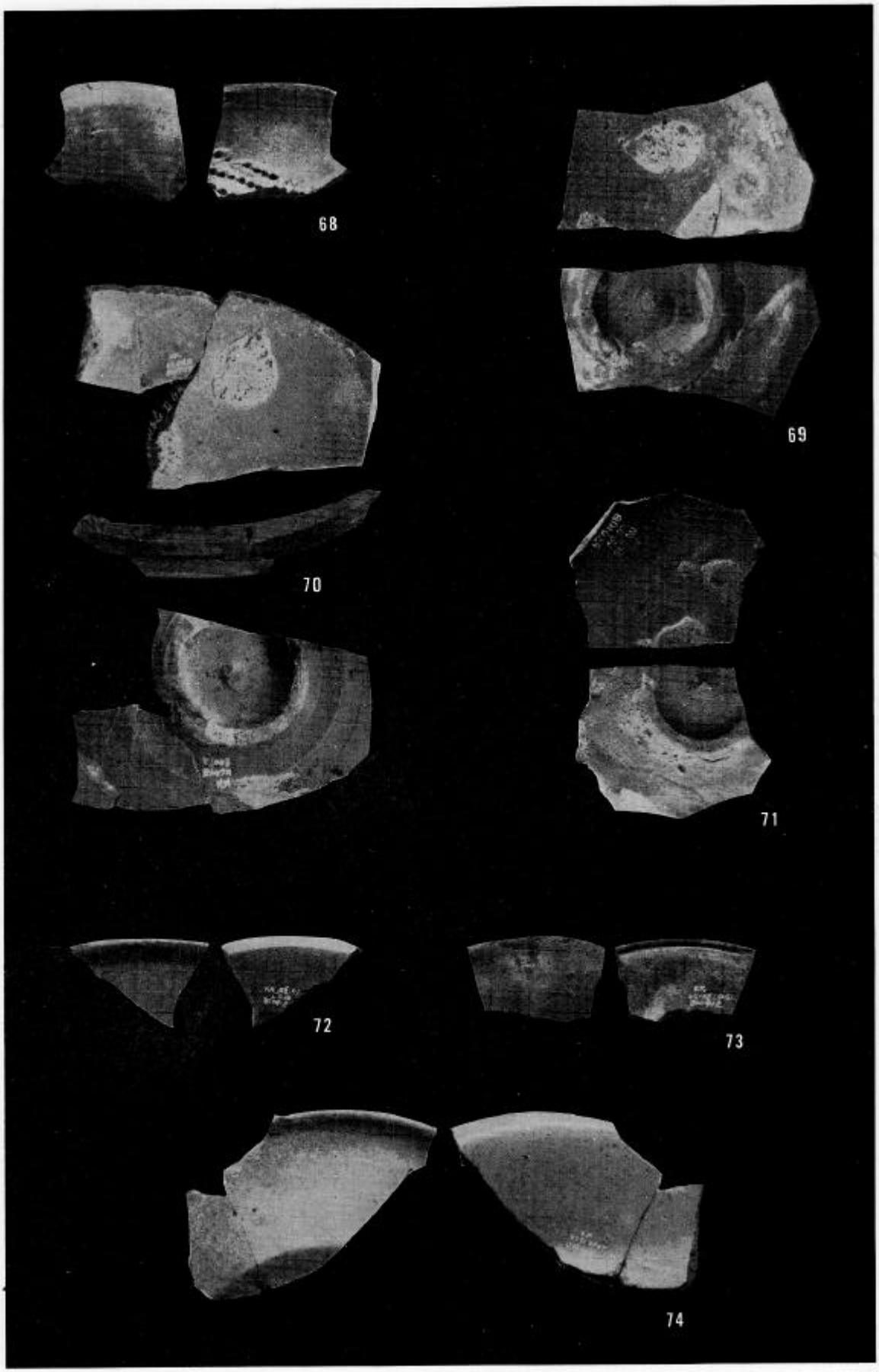
図版28　遺構内出土陶磁器　(9)（S≒1/2）



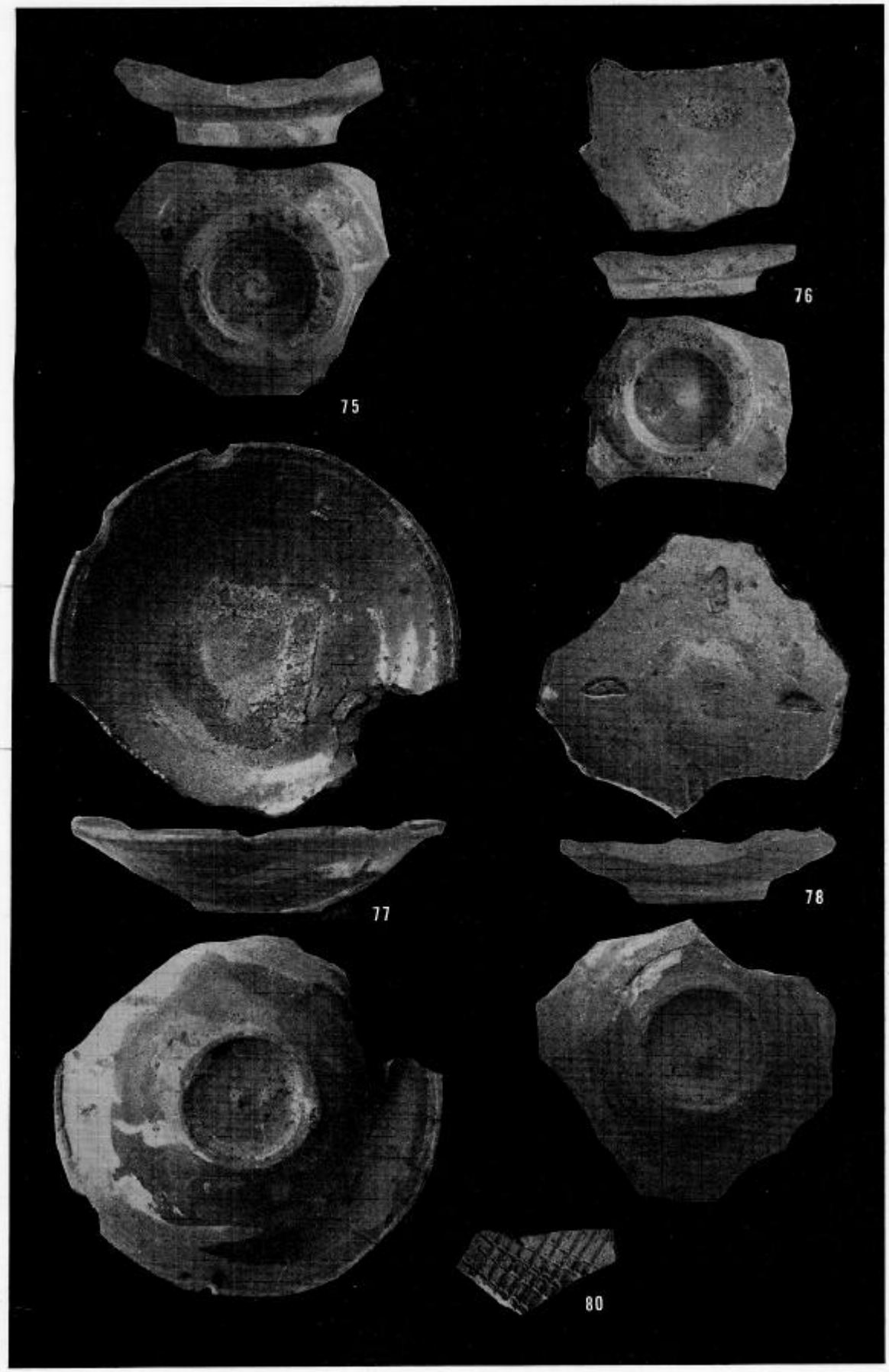
図版29　その他の出土陶磁器 (1)（S≒1/2）



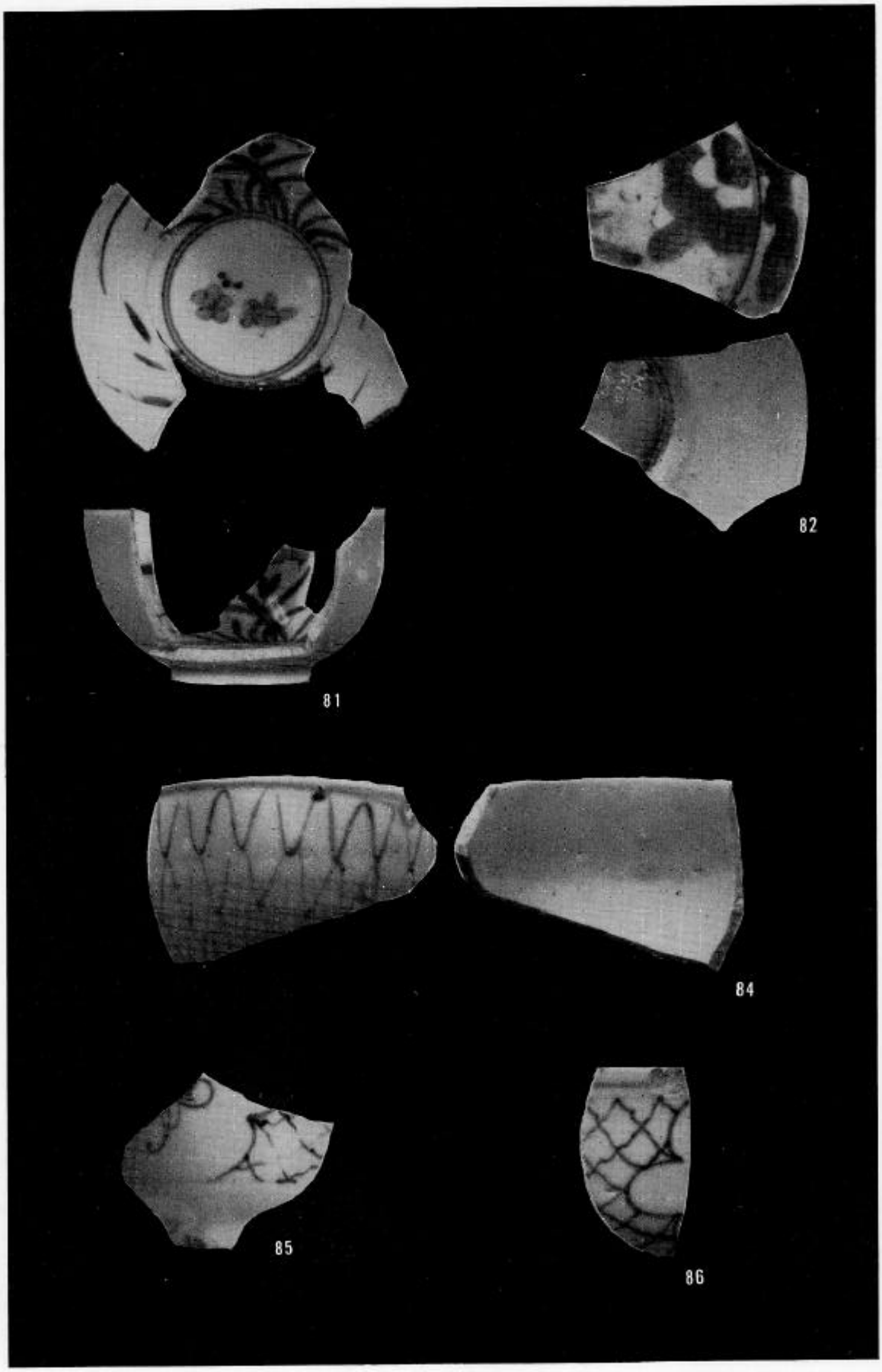
図版30　その他の出土陶磁器　(2)（S≒1/2）



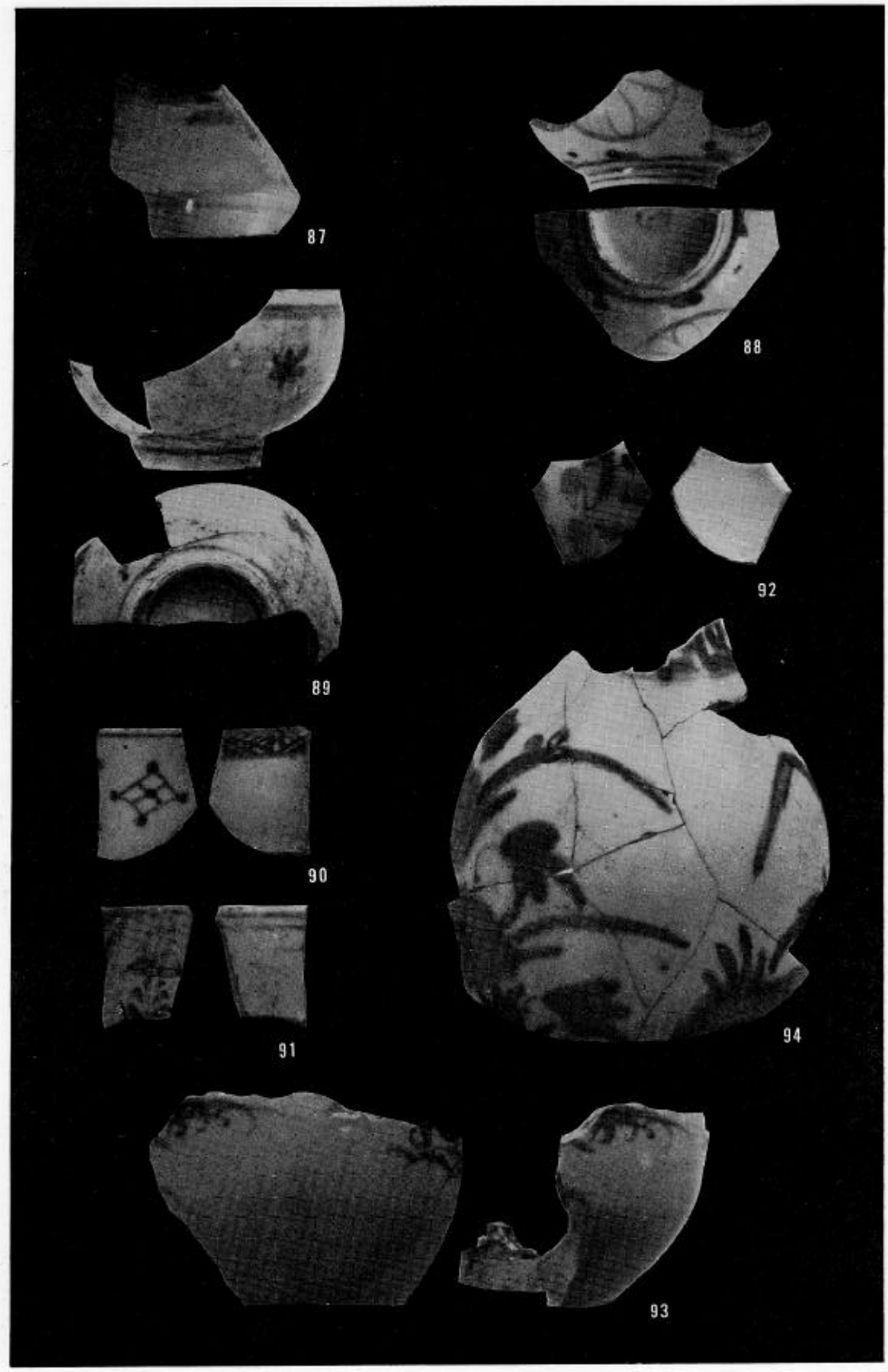
図版31　その他の出土陶磁器　(3)（S≒1/2）



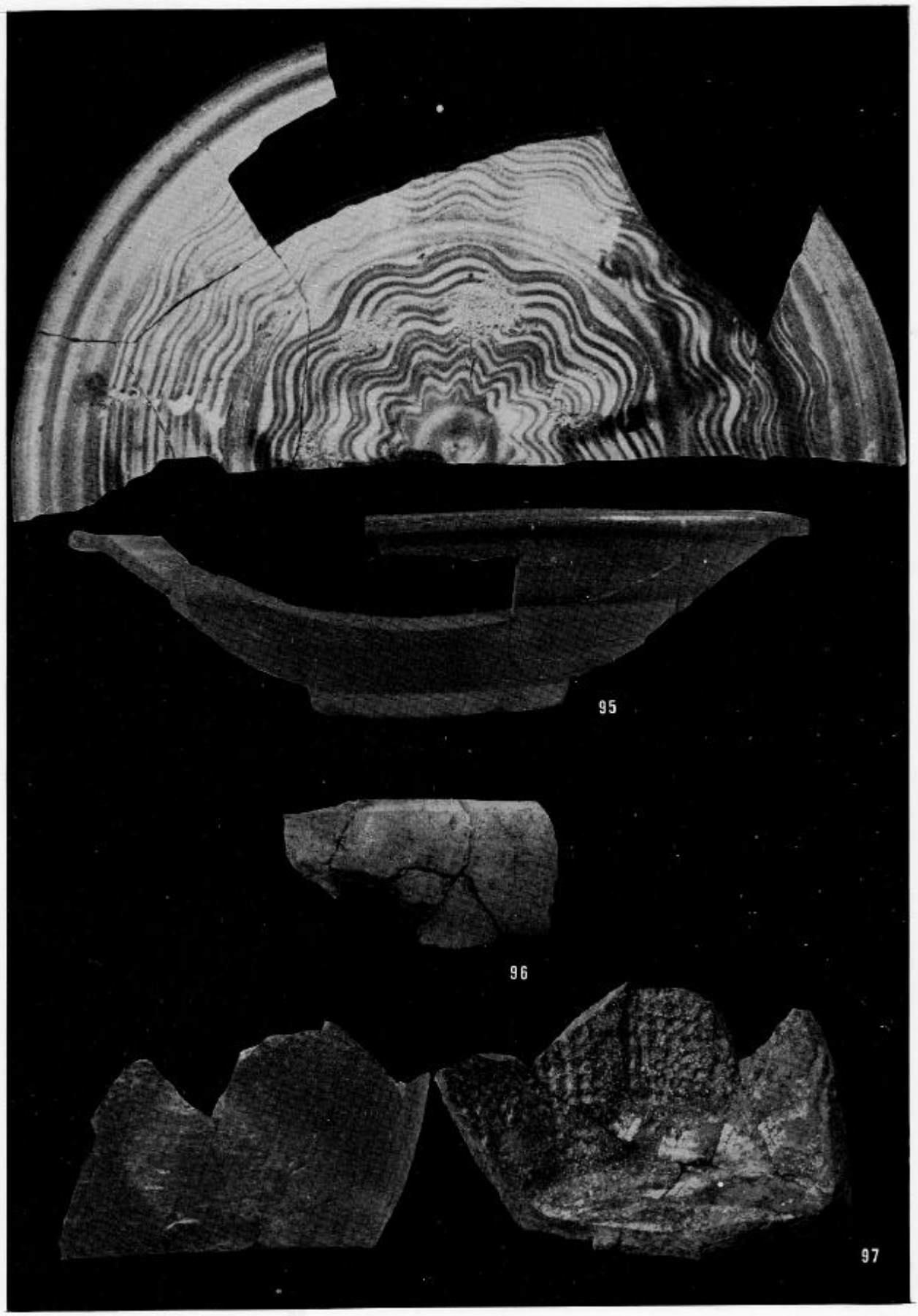
図版32　その他の出土陶磁器 (4) (S≒1/2)



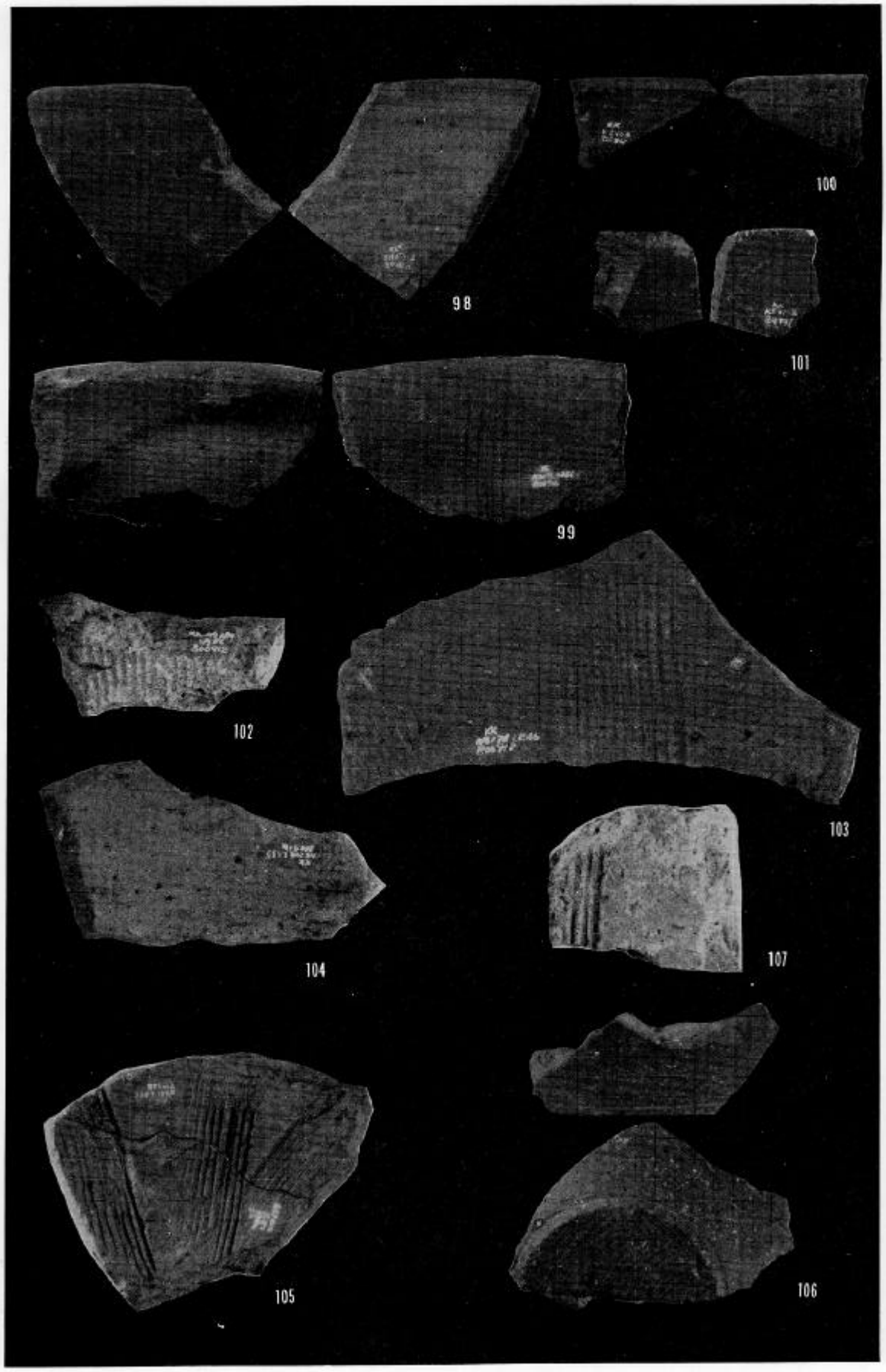
図版33　その他の出土陶磁器　(5)（S≒1/2）



図版34　その他の出土陶磁器 (6) (S≒1/2)



図版35　その他の出土陶磁器 (7) (S≒1/2)



図版36　その他の出土陶磁器 (8) (S≒1/2)

蒲　沼　遺　跡

第1章　はじめに

第1節　発掘調査に至る経過

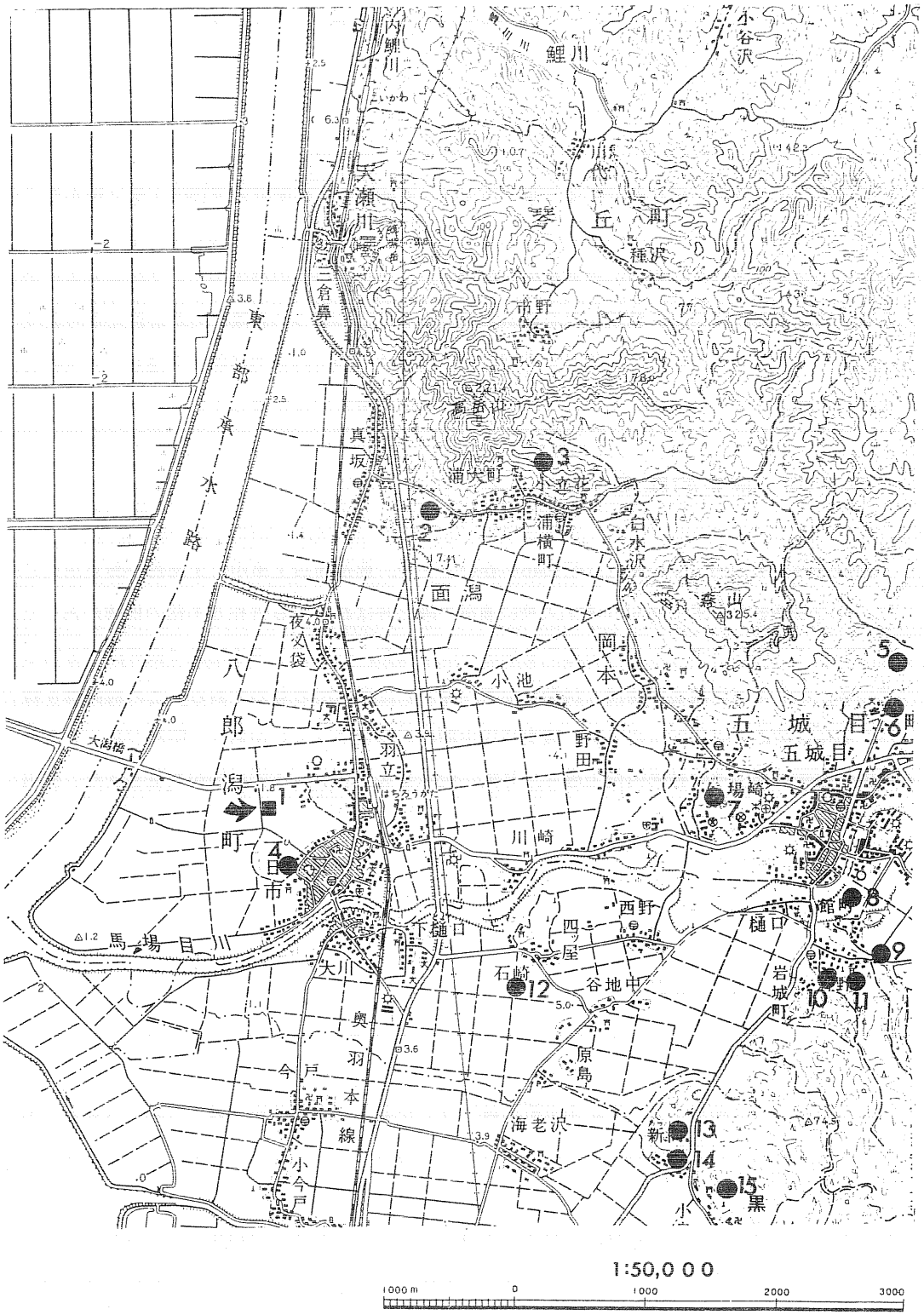
蒲沼遺跡は昭和46年春，農道新設工事の際に発見され，南秋田郡八郎潟町蒲沼150-1他に所在し秋田県遺跡地図に登録された，いわゆる周知の遺跡である。この地域が昭和54，55年度に実施される八郎潟地区の県営ほ場整備事業の地域内に入るため，昭和53年10月16日～21日まで、秋田県教育委員会が主体となって，遺跡の範囲確認調査を行い，昭和55年度実施地域の一部が遺跡である事が確認された。

その後遺跡地内の県営ほ場整備事業は延期され，県農政部より昭和56年度に実施する計画が提出された。その中で現水路を深くして拡幅または新設する計画があり，地下の埋蔵物に，影響を及ぼすと考えられた。そこで秋田県教育委員会では工事に先立ち水路部分の発掘調査を行って，記録保存を図り，今後の資料に資する事とした。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名	蒲沼遺跡
遺跡所在地	秋田県南秋田郡八郎潟町蒲沼150－1他
調査期間	昭和57年6月1日～6月30日
調査対象面積	1.075㎡
調査面積	1.075㎡
調査主体	秋田県教育委員会
調査担当者	柴田陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター）
調査補佐員	三嶋隆儀，佐藤雅子
調査協力機関	秋田県秋田農林事務所土地改良課 八郎潟町教育委員会 秋田県土地改良事業団体連合会
発掘調査参加者	草階金治，山内鎮雄，畠山正三，伊藤金作，伊藤鉄雄，小玉久，小林茂美，伊藤繁夫，伊藤義和，石井エミ，畠山恵作子，相馬チサ，伊藤トモエ，小柳ノリ，伊藤キミ，谷村アエ，相馬ヒデ子（順不同）
整理作業参加者	杉原敬子，奈良淳子，石上尚子，佐藤真智子，保坂千秋，松本千秋

三浦るり子，大沢晶子，小林弘，進藤滋，茂木淳子，高橋紀美，越後谷晴美，武田美智子，藤井智子，池田リュウ子，佐藤せい子，高山比奈子小松睦子（順不同）


内鯉川
鯉川
小谷沢
天瀬川
琴丘町
種沢
市野
三倉
真坂
浦大町
小立花
浦横町
白水沢
面潟
夜叉袋
岡本
小池
八郎潟町
大潟橋
羽立
野田
五城目
五城目
場崎
川崎
日市
西野
館
樋口
馬場目川
大川
下樋口
四ッ屋
石崎
谷地中
岩城町
奥羽本線
今戸
原島
海老沢
新屋
小今戸
黒
1:50,000
1000m
0
1000
2000
3000

第１図　　遺跡位置図

第２章　　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境

蒲沼遺跡は，奥羽本線八郎潟駅より西方約１km，南秋田郡八郎潟町蒲沼150-１他に所在している。本遺跡の周辺地形は，八郎潟残存湖に流入する最大河川である馬場目川が南方約１kmを西流しており，東方には森山，三倉鼻の丘陵があり，森山は鈴虫の群生地として知られる山である。南東方向には狙山，駒頭ヶ森を結ぶ丘陵があり，この２つの丘陵にいだかれたかっこうで湖東平野が広がっており，八郎潟残存湖東部の段丘及び河川の自然提防が発達して，県内有数の水田地帯となっている。本遺跡も湖岸に近い水田地帯の中に位置している。

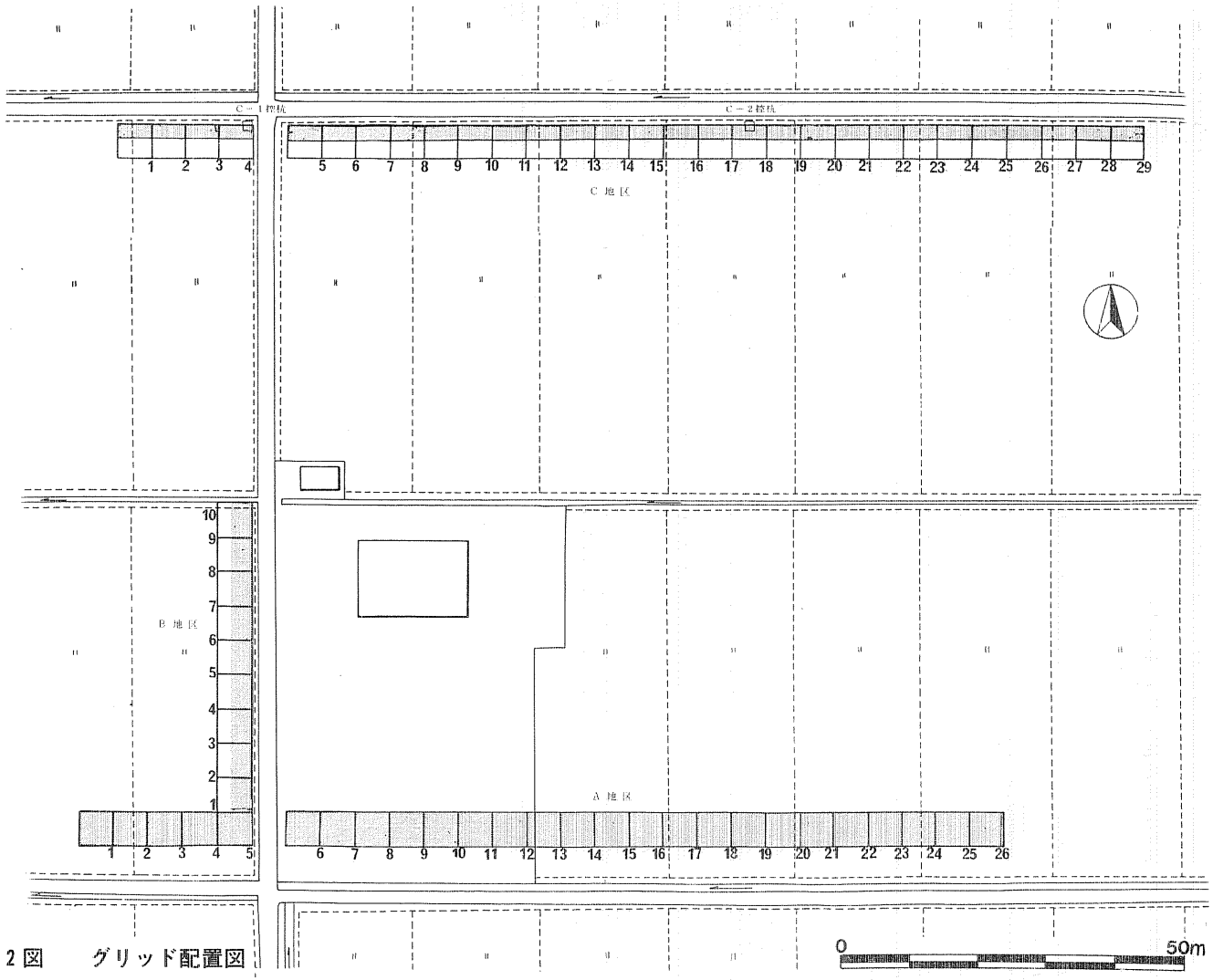
第２節　歴史的環境

蒲沼遺跡（第１図１）の発見は昭和46年春のことで，農道新設工事中に土師器が数点出土した。この遺跡からわずか約500ｍ離れた所に蒲沼の碑と呼ばれている貞和５年銘の板碑があった。八郎潟町には板碑が多くあり，国道７号線沿いには真坂，夜叉袋，中島地区に板碑群が分布している。ほとんどが南北朝時代（14世紀中葉～後半）にかけてのものである。この板碑群を抜けて高岳山麓の標高約20ｍの所に，縄文時代中期の沢田遺跡（２）があり，昭和27年，31年に発掘調査された。その結果円筒上層Ａ，Ｂ式，大木８ａ，８ｂ，９式土器が発見された。沢田遺跡から北東方向へ約１kmほど行った所に室町末期の山城と考えられている浦城（３）がある。蒲沼遺跡から南東わずか200ｍほどの所には中世城館と考えられている押切城（４）があり，蒲沼遺跡との関連性がうかがわれる。五城目町にもこのような中世城館が散在している。

第３節　周辺遺跡（第１図）

蒲沼遺跡の周辺には，縄文時代から中世までの各時代の遺跡が多い。縄文晩期の遺跡として五城目町の下台遺跡（７），同町中泉町遺跡（９）があり，土器の他石鏃，石匙，石斧等が出土している。弥生時代の遺跡は井川町の新間Ａ，Ｂ遺跡（14，13）があり弥生式土器の他，石鏃，石匙，磨製石斧が出土しており，籾痕のある土器片も見つかっている。県内で発掘調査された唯一の古墳として五城目町の岩野山古墳群（10，11）があり，昭和36年より38年と49年に発掘調査された。さらに蒲沼遺跡より南東２kmの所に，石崎遺跡（12）があり昭和47年に発掘調査が行なわれ，柵列が発見された。出土遺物として，須恵器，土師器，紡錘車，木簡風木片

糸車等がある。この遺跡は秋田城以北に新たな柵跡が発見されたとして注目された遺跡であり，秋田郡衛跡の可能性があると考えられている。この他，古代の遺跡としては，五城目町の雀館古代井戸跡（８），井川町小泉遺跡（15）がある。中世に入って，五城目町に砂沢城（５）があり昭和56年に発掘調査された。この砂沢城跡のふもと付近に砂沢窯跡があり，昭和41年に調査されたがその後消滅してしまった。



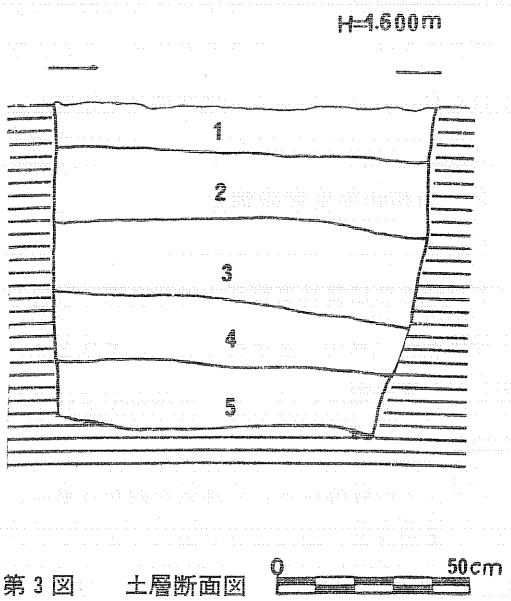
第2図　グリッド配置図

第３章　　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

１　遺跡の層序

蒲沼遺跡は八郎潟の残存湖から東に約１kmの地点にあり，かつてここは潟湖となった時期があったようである。現在南側約１kmに馬場目川が西流しているが，遺跡の北側約300mに馬場目の旧河道があり，氾濫のたびごとに大量の沃土を運んだものと思われる。このため，遺跡の土層は，粘質土が主体であるが部分的に表土から約50cm下の３層と４層の間，５層の下に薄く砂層が入る地点もある。



第３図　土層断面図

遺跡の土層はおおむね以下のとおりである。

第１層　（厚さ10～15cm）オリーブ黒色（５Y3/2）粘質土。（耕作土）。

第２層　（厚さ15～20cm）オリーブ黒色（５Y3/2）粘質土。小礫を若干含む。陶磁器，木製品，土製品等が出土する。

第３層　（厚さ15～20cm）暗オリーブ灰色（５GY4/1）粘質土。１，２層より青味が強く，硬く締まっている。古代の土器が出土する。

第４層　（厚さ10～15cm）暗緑灰色（7.5GY4/1）粘質土。この上に２～３cmの砂層の堆積が見られたりする。

第５層　（厚さ10～15cm）暗緑灰色（５G3/1）粘質土。粘性は上層に比べ弱い。下部にいくにつれ小礫を含むようになる。

２　遺物の出土状況

今回の調査では遺構は検出されなかった。しかし遺物は第２層から陶磁器，木製品，土製品などが出土し，その下の第３層からは須恵器，土師器が出土した。出土した遺物は点在しており，まとまった地点はない。

第2節　調査の方法

1　昭和53年度範囲確認調査

範囲確認調査は，昭和54，55年度県営ほ場整備予定地域内を対象として行った。調査期間は昭和53年10月16日から10月21日までであった。

調査の方法は任意の基準点を決め，それに従って平板で東西南北に延長し，10m毎に坪掘りを行った。必要に応じて土層断面図を作成し，遺物出土状況等の写真撮影を行った。

2　昭和56年度発掘調査

本調査は上記の範囲確認調査に基づいて昭和56年6月1日から6月30日まで実施した。グリッド設定は秋田農林事務所土地改良課で設置したC地区のC－1控抗を基準点にして東のC－2控抗を結び東西の基準線にして，それをA，B地区に延長した。グリッドは5m×5mで設置した。水路幅は，A・B・C地区がそれぞれ5m，3m，2mなのでその幅に従って調査を実施した。

グリッドの呼称はA，C地区が西から東に，B地区は南から北にそれぞれ算用数字を1から付し，各地区名と組み合せて用い（A－1，C－1など）グリッドの南東隅をグリッド名とした。

等3節　調査の経過

1　昭和53年度範囲確認調査

範囲確認調査は昭和53年10月16日から10月21日まで実施した。対象地域は昭和54，55年度の県営ほ場整備事業予定地域で，対象面積は約20,000m²であった。昭和54年度分をA地区，昭和55年度分をB地区とした。遺跡地内は水田で湧水がひどく，発掘作業は困難を極めた。遺物はA地区では全く検出されず，B地区で点在して出土した。出土層位はいずれも粘質土で第2層からは陶磁器，木製品，等3層からは土師器，須恵器が出土した。南側では，第3層が1m以上もあり，遺物が出土しなかったので調査対象区外とした。

調査の結果，昭和55年度ほ場整備地域内の一部で，現在牛舎の建っている所を中心にして遺跡の範囲を推定した。

2　昭和56年度発掘調査

調査期間は6月1日から6月30日までの1ヶ月間実施した。発掘調査に先立ち，5月27日よ

り杭打ちを行ない，５月29日にプレハブが建てられた。

６月１日機材を搬入し，Ｃ地区から調査を開始した。II層中より陶磁器，木製品が出土した。雨期で湧水がひどい。６月４日，Ｃ地区を終了した。遺物は陶磁器片，木製品が少量ながら出土した。

６月５日，Ｂ地区の調査に入る。６月６日，夜来の雨で既発掘区がぬかるみの状態の為，排水溝を掘り水を抜く作業を行った。

６月８日，Ａ地区の調査に入る。Ａ－５グリッドで墨書のある須恵器杯が出土した。水路幅が５ｍと広く，また湧水の為作業が思うように進まなくなった。６月12日，Ａ－６，Ａ－７グリッドに残っていた建物跡のコンクリートの土間をブルで除去した。その後，杭打ち作業を行う。６月19日，雨が降り続き周りの水路から水があふれ，作業に支障をきたす様になったので発掘区の周囲に排水溝を掘る。６月22日，23日，終日雨の為作業を中止し，プレハブで遺物の洗浄，注記を行う。６月24日，Ａ－16グリッド付近で陶器，木製品の出土が多い。６月25日，森山から遺跡の遠景の写真撮影を行う。６月29日，調査の全てを終了し，同30日にプレハブの解体，遺物の運搬をして全ての調査を終了した。

第４章　　調査の記録

１）　検出遺構

遺構は検出されなかった。

２）　出土遺物

調査では土師器，須恵器，陶磁器，土製品，石製品，金属製品，木製品が出土した。

土器

土師器杯（図版９の３）

底部からわずかに丸味をもって立ち上がる。底部は回転糸切り離し，内面にロクロ痕が残り外面はわずかにその痕跡を残している。口径12.7cm，底径5.3cmで口径に対する底径の比率は0.41である。胎土は普通，焼成はやや不良で，色調は浅黄橙色を呈す。

土師器甕（図版９の１，２）

１，２とも底部で，１は底部からやや外傾気味に立ち上がる形と思われる。２は底部外面に成形のあとがあるが，デコボコしている。底部からやや外反しつつ立ち上がる形と思われる。１，２とも色調はにぶい黄橙色を呈す。

須恵器杯（図版９の４）

口縁部をわずかに欠くが完形に近いものである。底部からゆるやかに外傾しながら立ち上がる。底部は回転糸切り離しで,「分」の墨書が認められる。全体的に器厚があり他の土器に比べて安定感がある。口径13.6cm，底径6.5cmで口径に対する底径の比率は0.48である。胎土，焼成とも良好で色調は内外面とも灰白色を呈す。

須恵器甕（図版９の５）

外面に縄目のタタキ目があり，内面は青海波文である。焼成不良で赤褐色を呈す。

陶磁器　出土陶磁器は初期伊万里染付，唐津系施釉陶器，瀬戸系施釉陶器，舶載陶磁器等がある。

初期伊万里染付（図版10，１～22）

細片が多く，完形品は全くなかったができるだけ図示した。これらの中から特徴的なものをあげると次のとおりである。１～14は碗である。１は草花文と思われ，鮮明な藍色で器面は他の染付と比較して，やや白っぽい。３は網文で，器厚が全体的に厚く安定感がある。５も底部から腰部にかけての器厚がある。器面はやや凸凹があり，くすんだ淡灰色を呈している。７は他の碗に比較して底部から腰部にかけての立ち上がりが緩やかである。全体に貫入が入る。９の文様は鮮明な青色で，深めの削り出し高台である。10は他のものに比較して底径が大きく、底部から腰部にかけての立ち上がりが緩やかである。高台畳付は無釉で砂粒が付着している。

11は高台が低く，底部が厚い。高台畳付には釉がなく，砂粒が付着している。12は比較的深みのある椀である。高台畳付には釉がなく，砂粒が付着している。14は口縁部付近の破片である。12とほぼ同じ器形と思われるが，器厚は比較的薄い。15～19は口縁部の破片であるが，皿形を呈するものと思われる。22は内面に釉を施さないものである。21は高台畳付に砂粒が付着している。22は全体に釉ののりが悪く，器面がややデコボコしている。

唐津系陶器（図版11，23～36）

計15点出土しているが完形品はなく，器形が不明のものも多い。23は外面が赤褐色を呈し内面と高台畳付には釉を施さない。腰部に明瞭な段を有する。24は灰釉を内面と外面の腰部まで施す。高台や底裏に明瞭なロクロ成形痕がある。皿と思われる。25は内面に釉は施さず，ロクロ成形痕が明瞭に残る。外面は淡黄色の釉で貫入が入る。28は内面に成形の際の段を明瞭に残し，釉は青みがかった茶色か淡い茶色を呈す。重ね焼きの跡が残っている。外面は無釉で底部よりやや上に足が付いていて緩やかに立ち上がる。器形は盤であろうか。29は内面と外面上半に釉がかかり茶色を呈し，器肌はザラザラしている。口縁部の下に口が付いていたもので片口鉢である。32は釉が灰色で見込み部に重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。削り出し高台で，高台内面と底裏には釉が部分的にかかる。33は釉が内面で淡茶色か濃茶色で，外面は灰白色の上に茶色の濃淡で文様を表現している。34は外面が茶色がかった淡黄色で流線的な文様を表現している。36は，擂鉢の底部付近で，内面の下はかなり磨滅している。外面は茶色がかった黒色を呈する。

瀬戸系陶器（図版12，45）

45の１点だけである。底部は糸切り痕を残し，外面だけ淡い茶色の釉を施す。釉は薄くむらがある。

舶載陶磁器（図版12，37～44）

37～39は中国製の白磁である。37は高台部の破片で，釉調は灰色がかった白である。39は口縁部で，淡い青色である。37～39は皿と思われる。38は腰部から急な立ち上がりを示すもので，外面には成形の稜が明瞭に残る。内外面とも青灰色で，外面は釉ののりが悪く部分的に器肌が見えている。

40～43はいずれも明末の製品で，40，41は緑釉陶器である。40は内面が緑がかった淡黄色で見込みには重ね焼きの跡が残る。外面は体部から腰部まで灰白色の釉がかかっている。41は内面が淡緑色か深みのある緑色で見込み部に重ね焼きの跡が残る。外面は体部から腰部まで釉がかかり，くすんだ灰白色を呈している。42は暗緑釉陶磁器で土瓶の注口部付辺と思われる。注口が欠けている。器厚は薄く，外面にのみ釉を施す。43は輪花皿で釉は灰色がかった浅黄色で，高台及び内面見込みまでは及んでいない。全体に貫入が入る。外面の腰部と内面の口縁部下か

ら見込みまで彫刻刀状のもので縦に幅4㎜の長く浅い削りを施しているが，それが全体を回るものと思われる。

45は朝鮮系の白釉陶器で高台部のみが残存している。釉は全体に不均一で気泡が入って小さい孔があき，砂粒が付着している。畳付は無釉である。

その他の陶磁器（図版12，46～71）

産地未詳の陶磁器が多いが，46～48は県内産の五城目焼である可能性が考えられる。

46は底部が糸切り離しで，体部が底部から緩やかに立ち上がる。釉は内面が茶色でその上に黒と暗緑色の釉がまだらにある。外面は一部に釉が流れている。器肉は厚く，胎土には砂粒が混入している。47は壺で胴部がふくらんで口頸部ですぼみ，口縁部をつまみ出す様にして幅1.3㎝の平担部を作り出している。48は口縁部を内と外につまみ出すようにして幅2.2㎝の平担部を作り出している。47，48は茶褐色を呈している。

49～51は薄手で皿形になるものである。52は，薄手で灰白色を呈し，器面がザラザラしている。

53は暗赤褐色で内面にアテ板痕が残る。

54～62はいずれも口縁部であるが擂鉢か盤と思われるもので口径が23～33㎝と大きい。口縁部の形態は①肥厚するもの（54～56，61，62），②丸みをもつもの（57，59，60），③「く」の字状になるもの（58）などがある。57は青灰色，他は暗褐色を呈す。

63～71は擂鉢である。63，64はにぶい褐色で胎土に砂が入り，内外面ともザラザラしている。同一個体であろう。65，66は深みのある茶色の釉がかかる。67，69，71は暗褐色である。68，71は赤褐色である。68，70は赤褐色で器面がザラザラしている。

第5章　まとめ

範囲確認調査と今回の調査で遺構は全く検出されず，遺物がまとまって出土した地点はない。遺物は平安時代の土師器，須恵器の他に陶磁器，土製品，陶製品，石製品，金属製品，木製品が出土した。

平安時代の土師器，須恵器は，細片が多く図示できたのは土師器杯，土師器甕，須恵器杯，須恵器甕の15点である。その中で須恵器杯が7点と多く，その特徴はロクロ水挽き成形で，底部は回転糸切り離し5点とヘラ切り離し2点があり，ヘラ切り離しの中の1点だけ調整のナデを施すものがある。その中に墨書土器が1点ある。

陶磁器は細片で器形不明のものも多く，また産地未詳のものもあった。その中で初期伊万理染付，唐津糸陶器，明末の陶磁器が主体を占め，年代は16世紀後半～17世紀初めと考えられる。

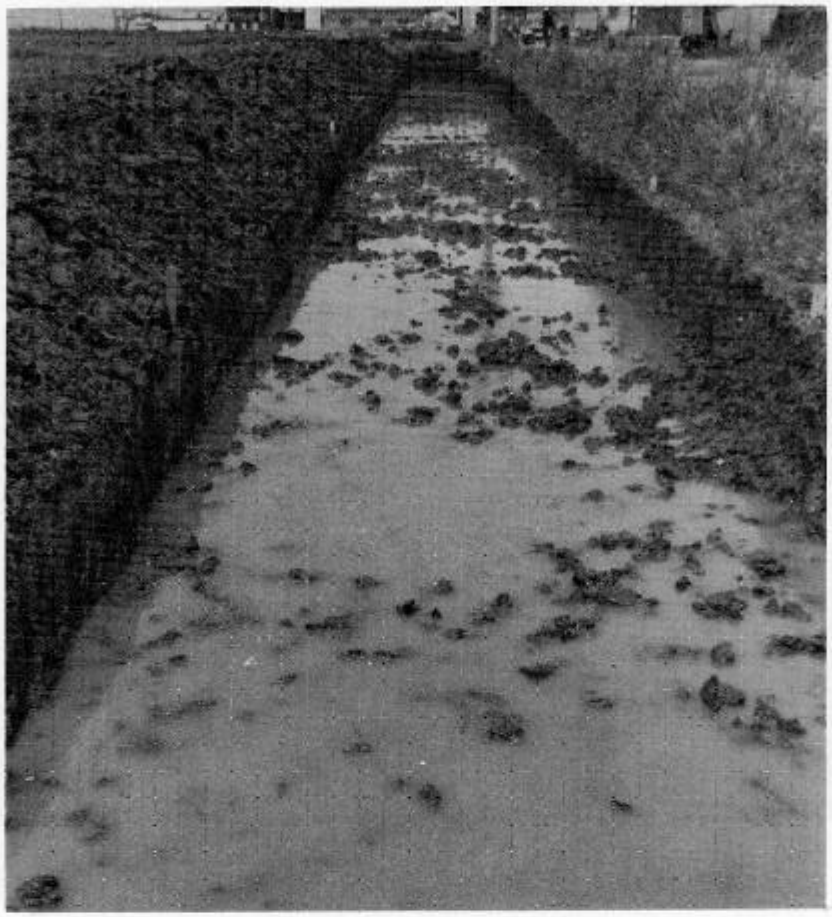
遺跡の周辺には南東約2㎞に秋田郡衙跡と推定される石崎遺跡，八郎湖の西約9㎞には海老沢窯跡などがある。本遺跡出土の墨書土器の存在や須恵器の焼成地の問題などからこれらの遺跡との関連性が考えられる。

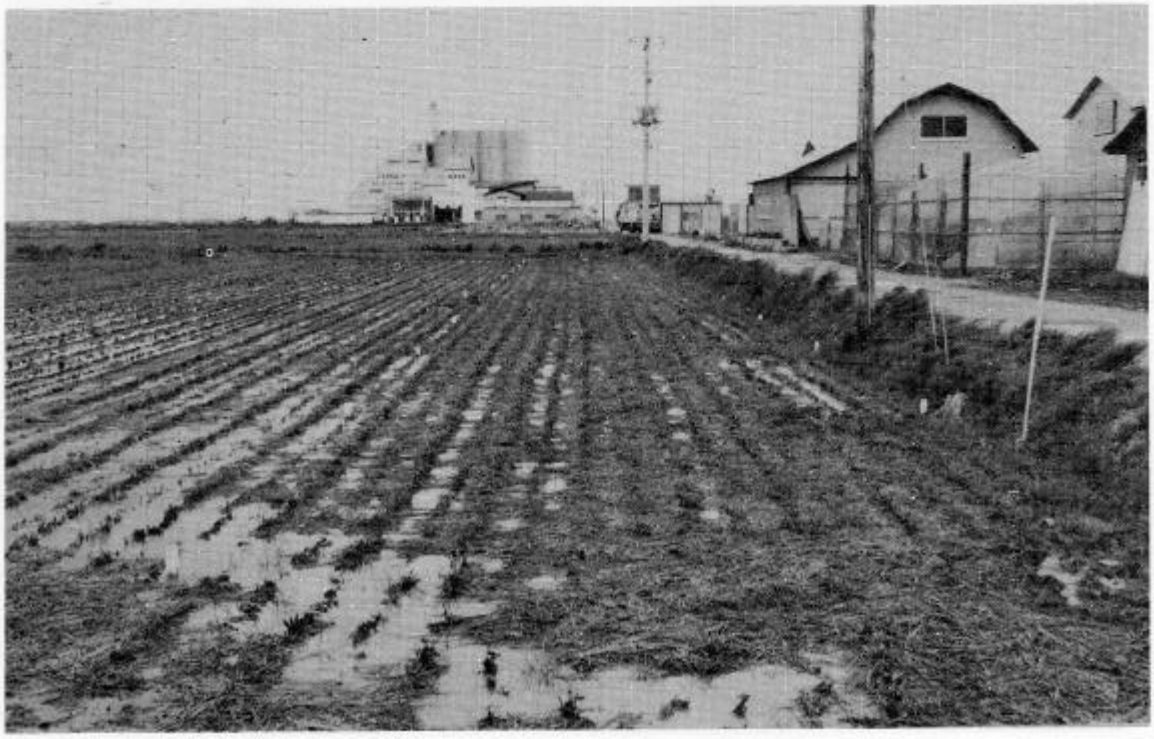
遺跡の南東の隣接地には沼地と中島を利用して築城された押切城があり，存続年代は天正（1573～1592）～慶長（1596～1615）年間頃（註）とされる。本遺跡からは遺構は全く発見されなかったが，遺物などからして本遺跡との深い関連性がうかがわれる。

註　角川書店　『角川日本地名大辞典5　秋田県』　昭和55年

図版 1　　上　遺跡遠景（森山から北西を望む）

　　下　遺跡遠景（北▶南）





図版 2　　上　B地区調査終了後（南▶北）

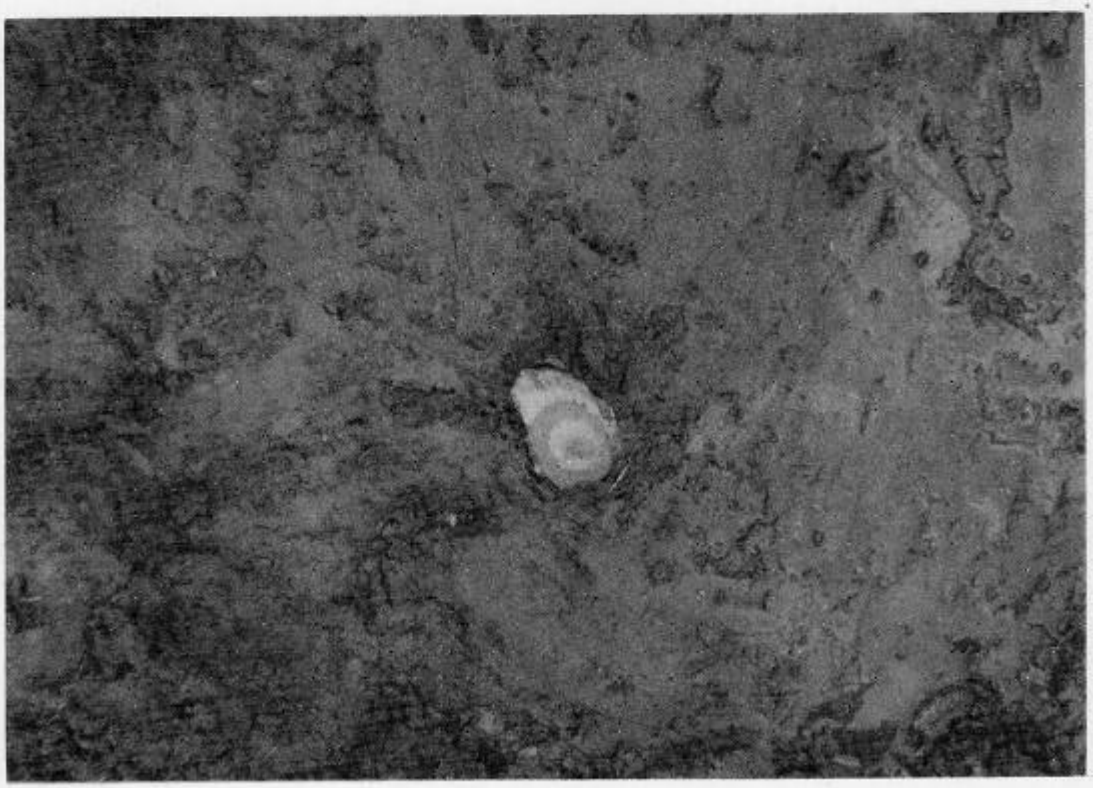
　　下　B地区調査前　　（南▶北）

図版 3　　上　C地区調査終了後（西▶東）

　　下　A地区調査終了後（西▶東）

図版 4　　上　土層断面

　　下　陶磁器出土状況

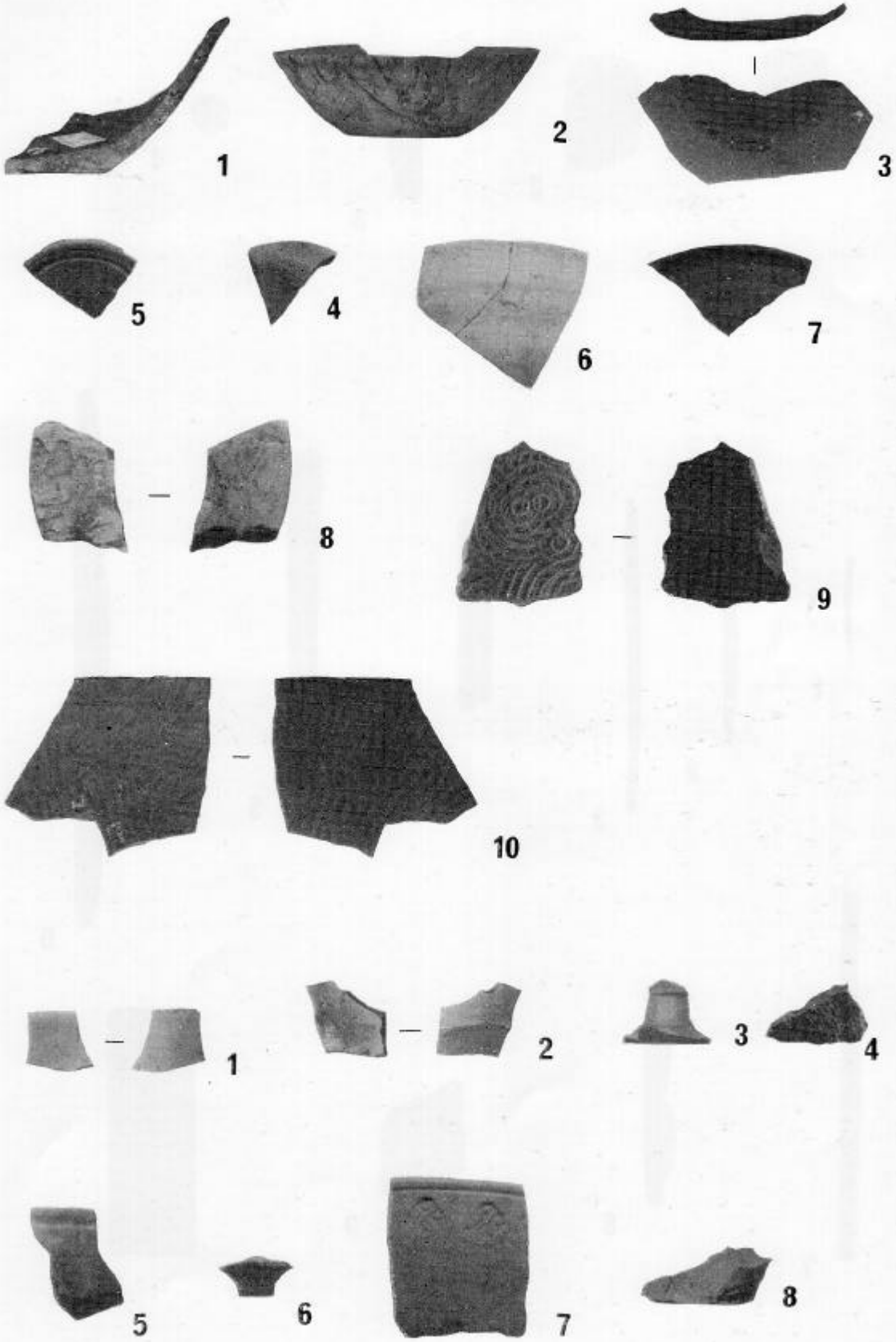


図版 5　　上　陶磁器出土状況

　　下　陶磁器出土状況

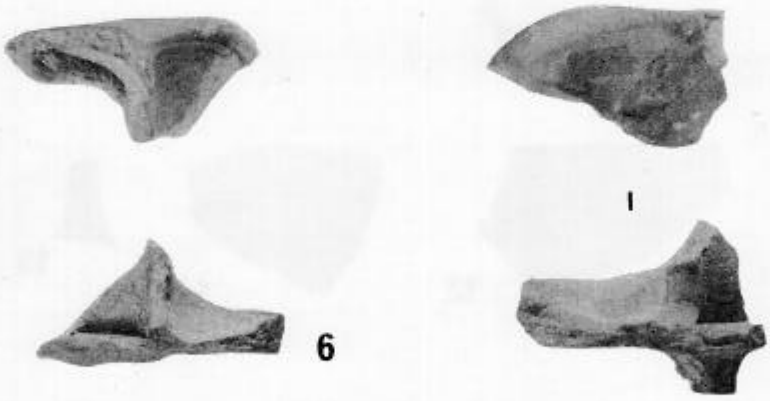
図版 6　　上　土器出土状況

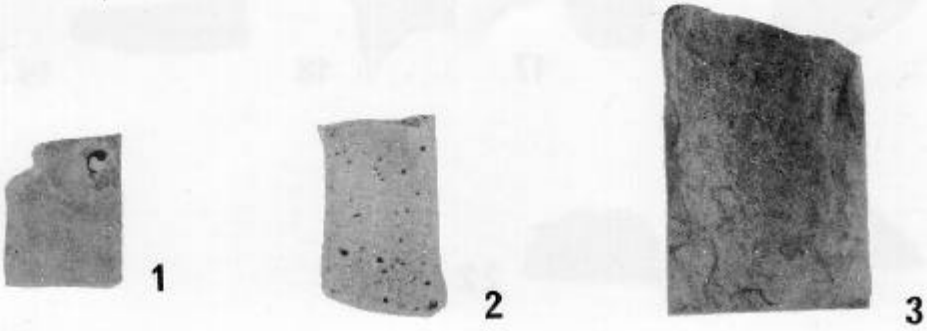
下　木製品出土状況



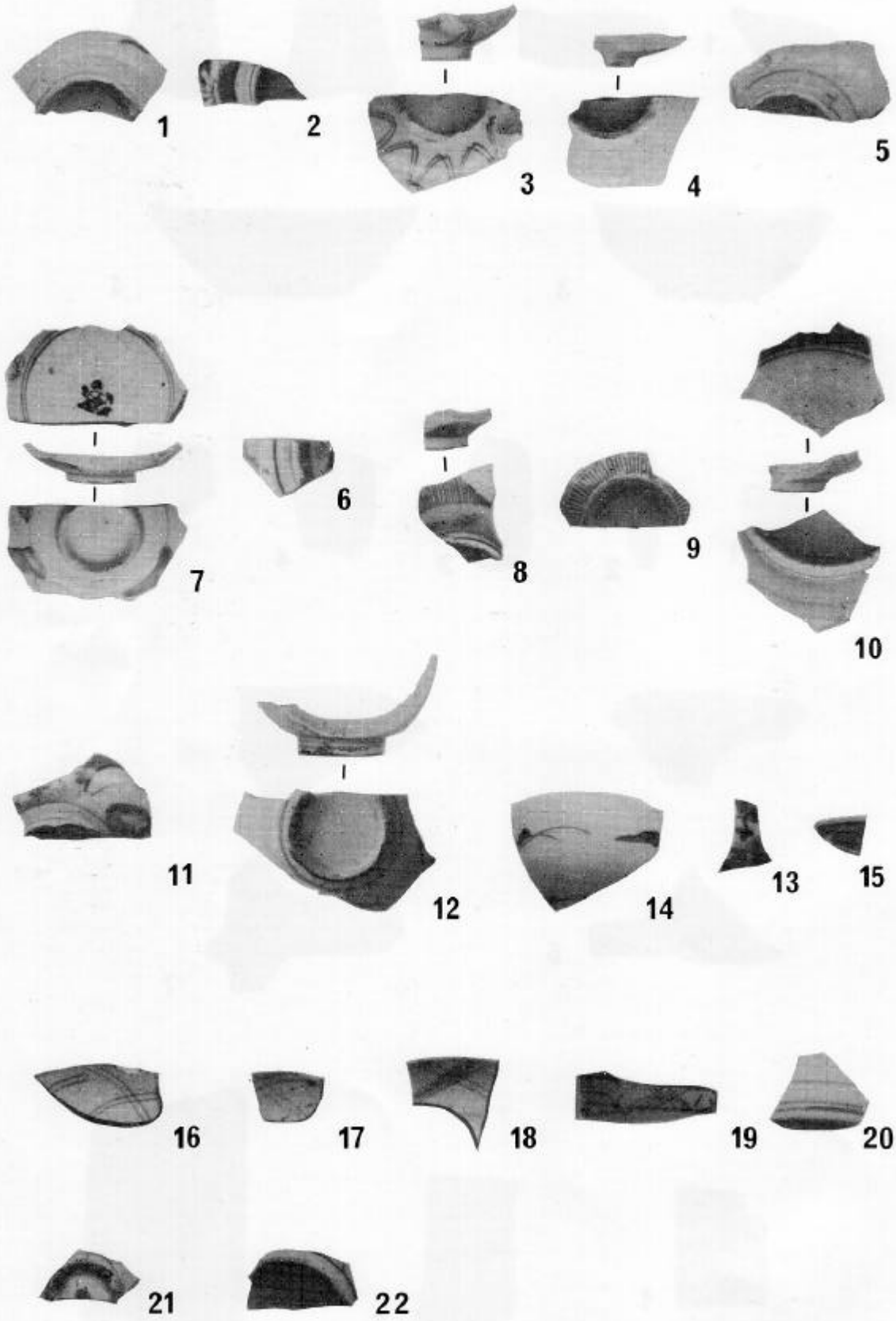
図版 7　　範囲確認調査出土土器・陶磁器

図版 8　　範囲確認調査出土土製品・木製品

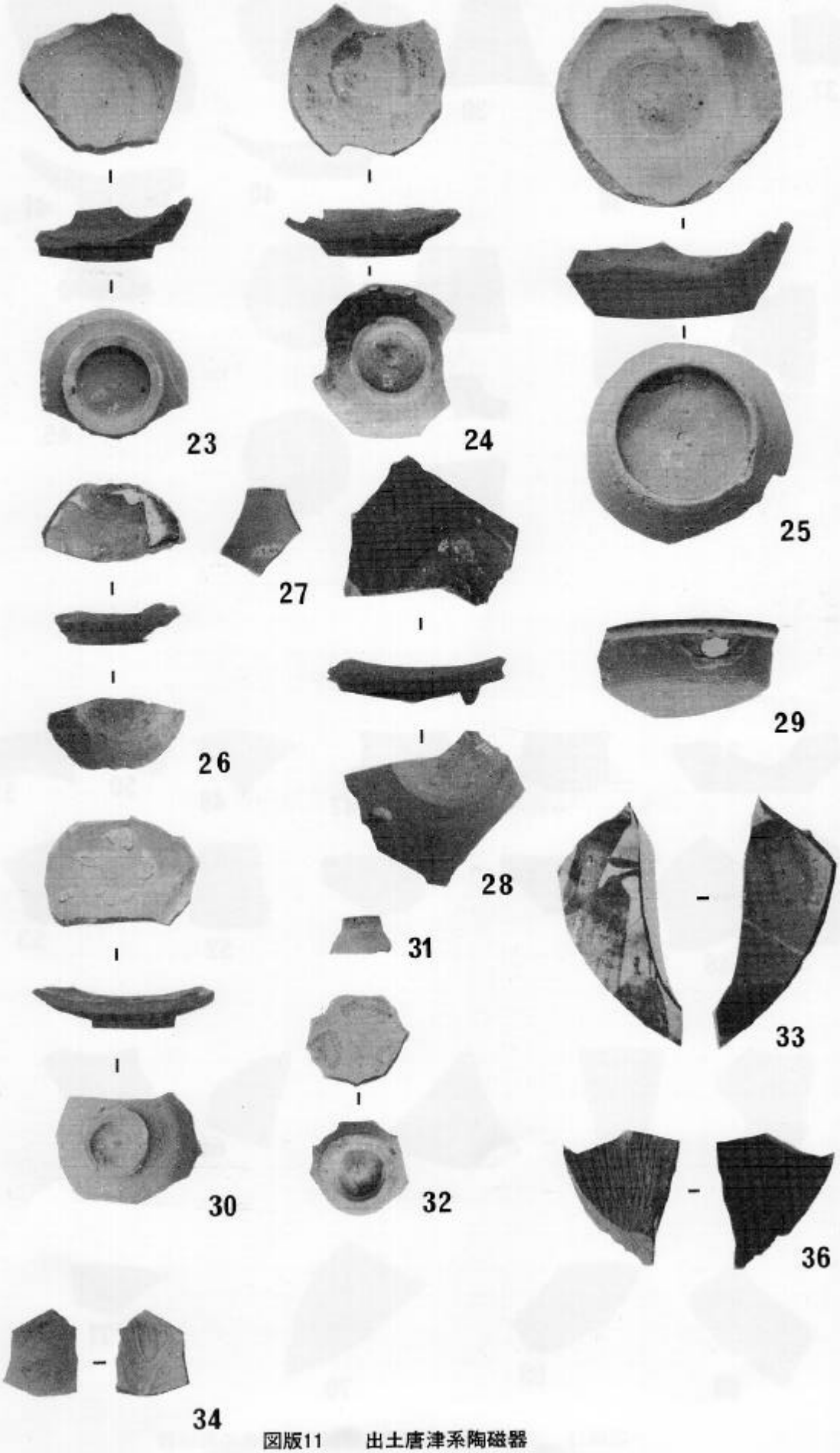




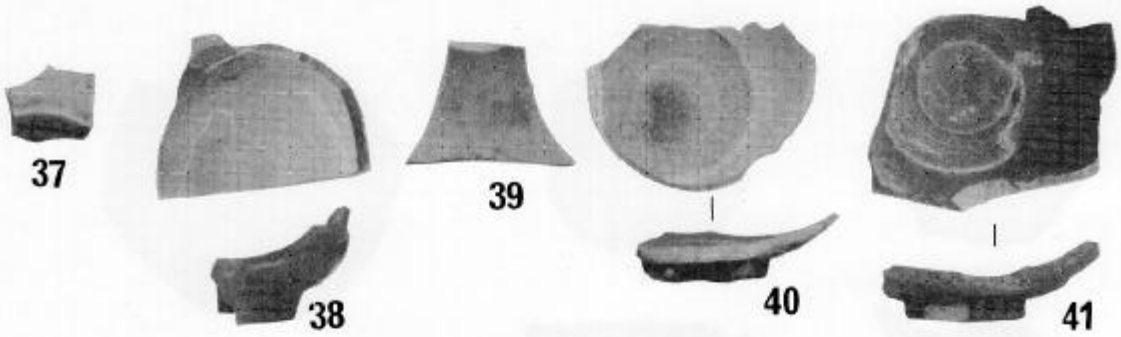
図版 9　　出土土器・土製品・石製品

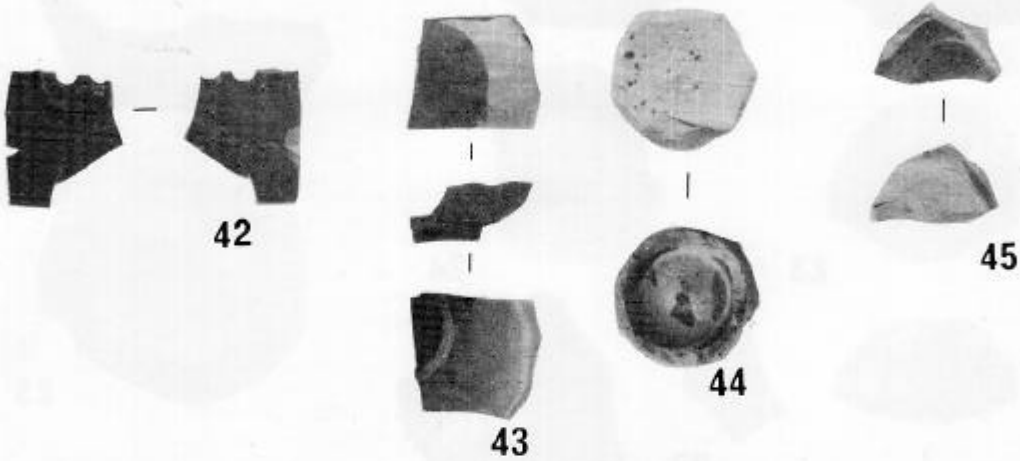


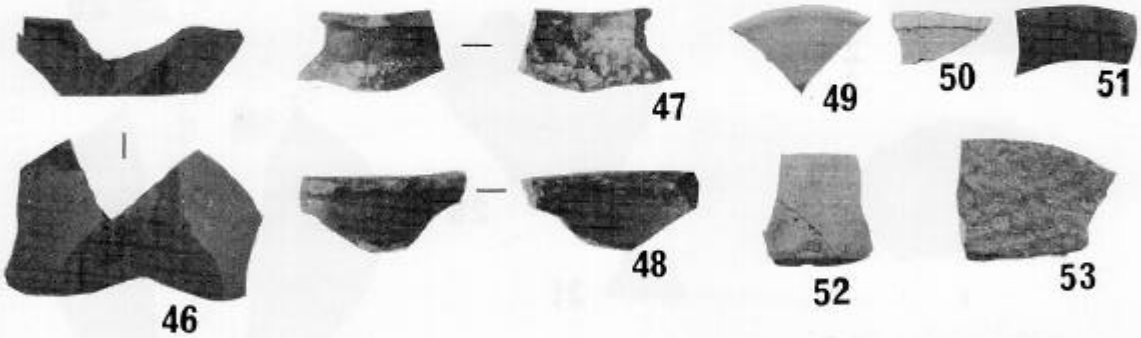
図版10　　出土染付

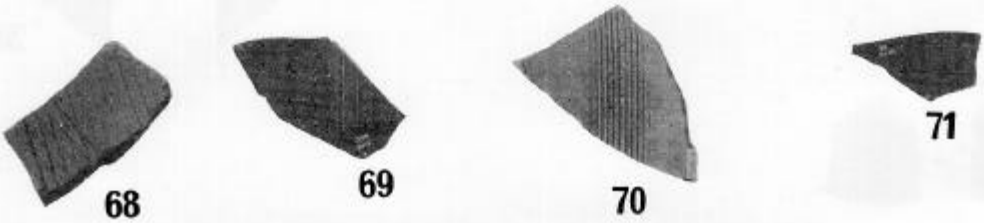


図版11　　出土唐津系陶磁器

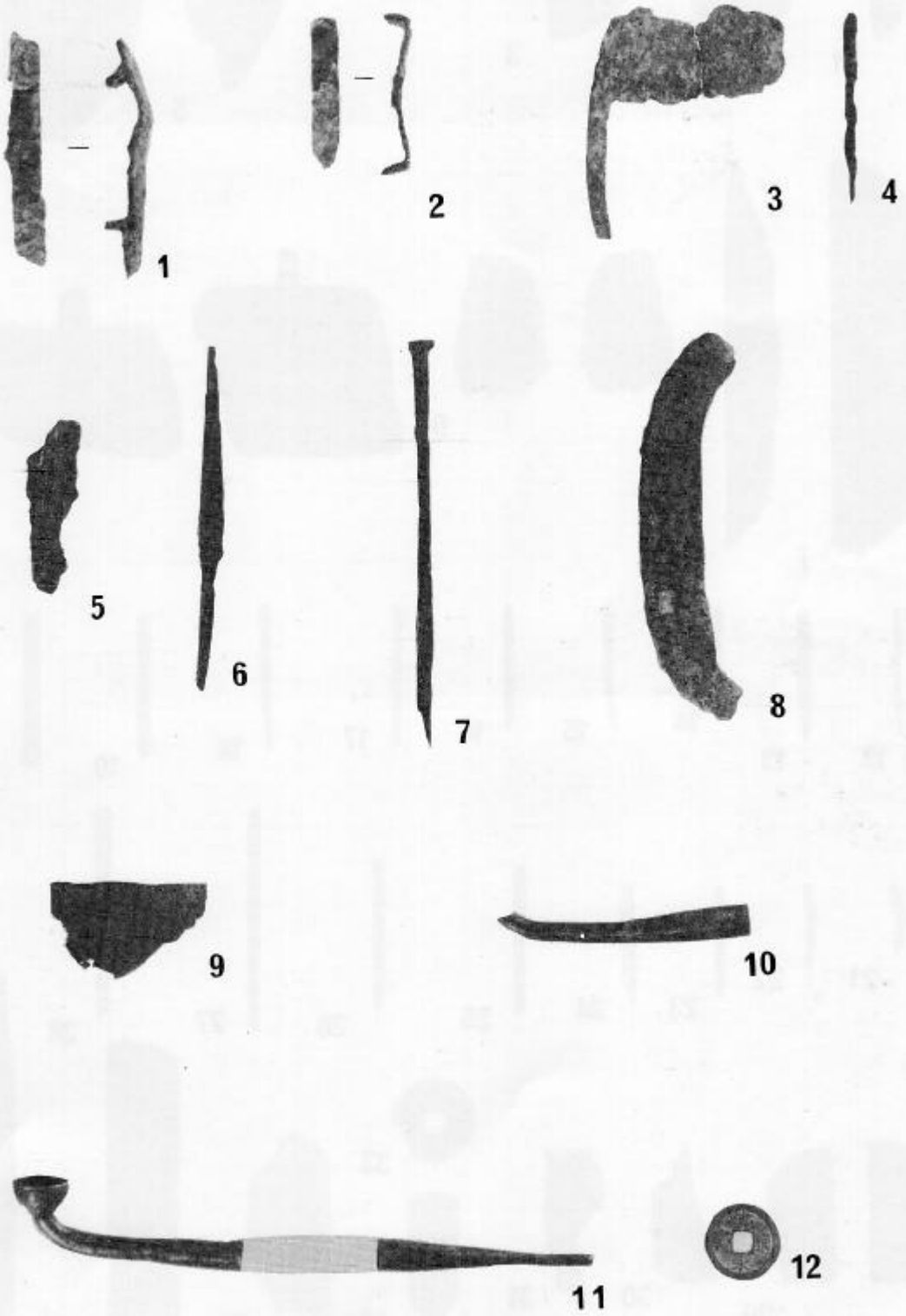




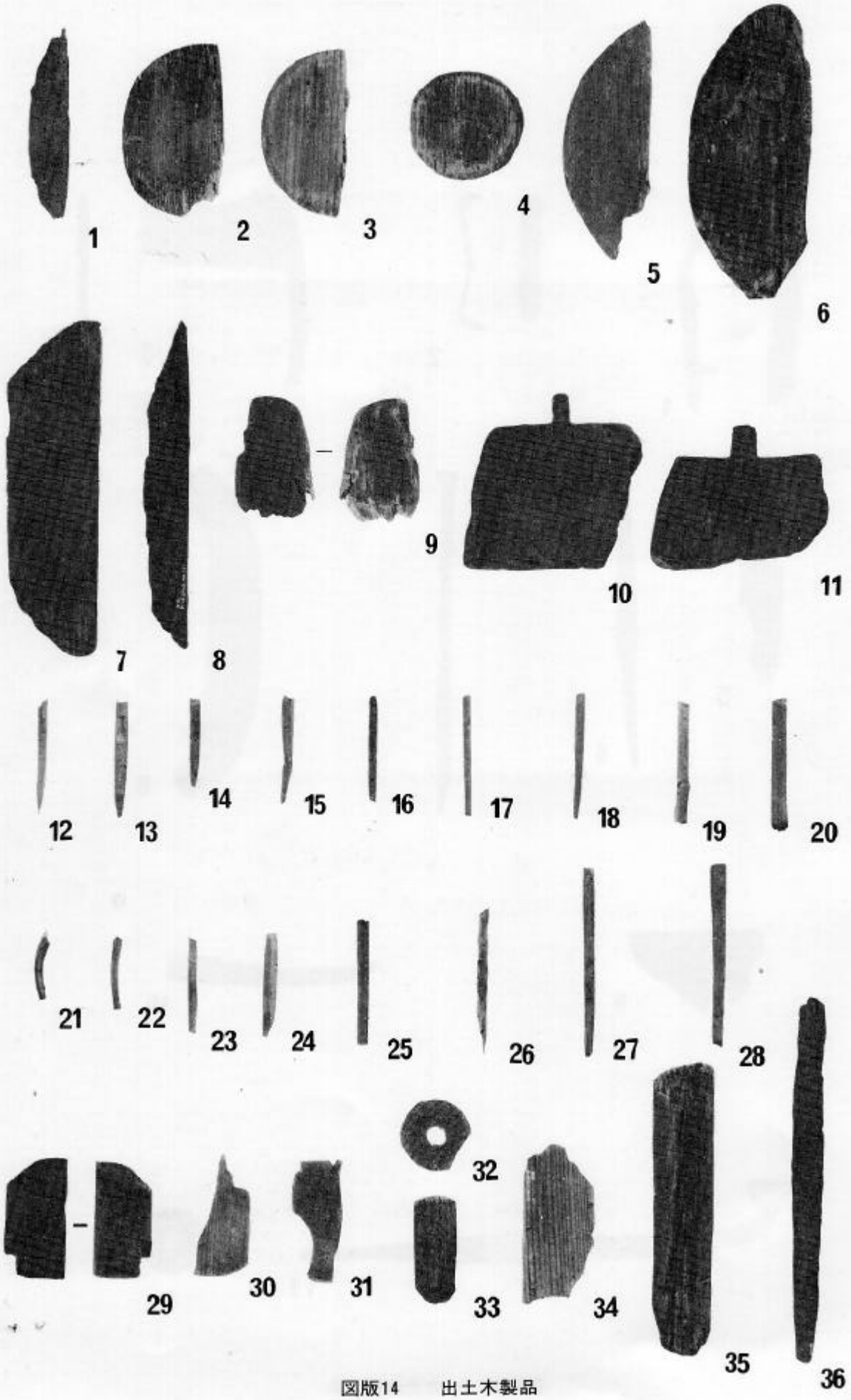




図版12　出土舶載陶磁器・擂鉢・その他の陶磁器



図版13　　出土金属製品


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

図版14　　出土木製品